

山室軍平著

實行的基督教

(第四版)



特18
47

山室軍平著

實行的基督教

(第四版)

明治
44.11.30
丙午

序

こゝに第四版を發行する此書は、或る意味に於て全く新刊のものとして公衆の前に現はれ來るであらう。何んとなればこれは事實、前に在つた書の標題を變更し、其内容を改訂し、其「戰争的基督教」といふ舊い名を廢めて、新に「實行的基督教」の名を以て出て來りたるが爲めである。元來は救世軍の士官又は兵士を益せん爲めに著はされたるものであれど、それが此度第四版の發行を見るに至りたる事實は、此書が如何に亦救世軍以外に多くの需用者を有するかを示すものである。

凡て基督信者の間に、其同胞の救に對する一層の熱心と、又一段の活動とを促がすべき種類の讀み物が、彌増し渴望せらるゝ

とを見出すのは、眞に心強い事である。余は憚らずして言ふ、此書を熟讀することは、凡て眞實なる人の心に恩寵の御業を深くせらるゝ上に、餘程の助となるであらうと。著者山室大佐心得が此の如く好評あり且人を益する書物を作り得たるに就ては、其努力の甲斐ありしことを賀せらるべきものである。

我等は今凡て此の冊子を読む人々が、之に由て激勵せられ、神の榮と靈魂の救を進むる爲めに、其全力を盡して働くに至らんとを熱心に祈りつゝ、此第四版を送り出すものである。

明治四十四年十月十五日

東京にて 少將ヘンリー・シ、ホツダー

自序

前年發行したる「戦争的基督教」は第參版を出したる後、活版所の火災の爲に紙型を失ひ、暫く絶版となつて居つたが、其後も尙引續き諸方からの註文が絶えないので、乃ち全文を改訂し、一二の章は全然之を變更し、「實行的基督教」と改題して再び世に公けにすることゝなつた。神の御祝福此書の上であり、其實踐躬行の基督教を我同胞に紹介する上に、多少の益あらせ給はんとを、これ著者が心からの祈禱である。

著者識

明治四十四年十月十五日

目次

(一) 次 目

(一) 神の愛……………一

(二) 人を救ふ力……………二四

(三) 如何に救を受くべきか……………四〇

(四) 道樂者への強異見……………五三

(五) 如何に救を持續すべきか……………七二

(六) 貧民の福音……………八三

(七) 獻身の勤め……………九六

(八) 聖潔の早わかり……………一〇九

(九) 聖旨に従ふ生涯……………一二四

(一〇) 戦争的の聖潔……………一三五

(一一) 如何に靈魂を救ふべきか……………一四六

- (一二) ヴァイバル……………一五九
- (一三) 基督教の家庭……………一七四
- (一四) 潔められたる實業家……………一八四
- (一五) 獻金及び集金の説……………一九五
- (一六) 老人の慰め……………二〇七

實行的基督教

山室軍平著

(一) 神の愛

愛なき者は神を知らず神は即ち愛なれば也。神は其生み給へる獨子を世に遣はし、我情をして彼に由りて生命を得せしむ。是に於て神の愛我情に顯はれたり。(約壹四〇八、九)

或時米國の市俄古の市に、一つの大きな會館を設けた人がある。夜の集會の度毎、説教壇の上に瓦斯の火にて「神は愛なり」といふ一句を點し、どんな後の席に坐つて居る人にも、一目で見える様に仕かけて置た。或夕方落ぶれ果てたる一人の若者が其邊を徘徊ひながら、不圖見上げると其處に大きな會館がある。若しや集會でもあるものなら、どこかの隅に腰をかけて、暫く疲れた足を息めさせて貰ひ度ものど。門口に近づいて見ると、支度は十分調ふて居る様子だが、誰も尙席に就て居るものが

ない。これは大方時間が早過ぎたのであらうと引返す拍子に、圖らず目にとまつたのは、説教壇の上に瓦斯の火にて「神は愛なり」と認めたる文字であつた。「神は愛なり」とか、左様、私は見供の時お母さんの膝の上にて、度々彼句を教へられたこともあつたが。併し待てよ一體「神は愛なり」といふのは本統のことであらうか。實際此世には獨一の神様がお在になつて、其神様は愛の神様でもありなされるのか知らぬ。而して若し此世に然らぬ神様がお在なされるものとすれば、其神様は今日の自分の様に、己が心柄とは云へ、世間から棄てられて誰一人見かへるものもなき身さへ、尙も愛して居つて下さるのであらうかと。若者は頻りに思索し乍ら、暫く無宙でそこらを歩いて居つたが、稍あつて己にかへり。だが一體自分は今頃どこをうろついて居るのか知らぬと、周圍を見ればこは如何、いつの間にか今一度先刻の會館の前に来て居つた。最早中では集會が始まつて居る様子であるから、若者は竊と入つて一番後の席に就き。考へるともなしに、復しても例の説教壇の上の「神は愛なり」といふ一句の事のみ考へ續けて居つたが。其間には自分が幼い時、母から此句を習

ふた當時の、無邪氣な楽しい時代の事など思ひ浮べ、徐ろに涙に堪兼ねて居つたのである。説教壇の上の教師は、目敏く此有様を認めためたものであるから、説教が済むと急ぎ壇を下りて若者の傍に近づき、其肩に捫つて「青年よ、一體貴君は今晩聞た説教の何ういふ處に感心して、然んなに落涙して居られたのか」と尋ねた。若者は喫驚して教師の顔を見つめながら、説教でござりますか、實は其説教の方は何ういふことであつたか、一向伺ひませぬでしたが」といふ。「それは貴君は何を考へて、そんなに涙を流して居られたのか」と重ねて問ふと。若者は包み隠すことが出来ず、細かに其身の上を語り出で。扱「私の様な見下げ果た人間でも、神様は尙も見棄せずお救ひ下さるのでありまするか」と尋ねる故。教師は「固より左様である」といふて、それより神様の愛と、又基督の救のことなど語り出で、懇ろに教へ導くと。それが本にて若者は其時から罪を悔改めて基督を信仰し、以來全く既往と異ふ眞面目な人間となり、幸福にして有用なる生涯を送つたといふ話がある。此の如く「神は愛なり」といふ一句は短かいけれども、其中に千萬無量の味のこもつた語である。

人が若し本統に此世に獨一の神様が在になつて、其神様は又愛の父上であると
いふ道理を、心に會得するに於ては。それこそ前の若者と同様、どんなに失望落膽
して居つた者も、今一度氣を取直して奮ひ起つことが出来。又どんなに罪の重荷を
負ふて苦み悶えて居つた者でも、其罪愆との魔縁を絶切り、以來は清く正しき幸福な
る世渡をすることが出来る様になる。それ故「神は愛なり」といふ一句を本統に諒
解すると否とは、人間一生の幸不幸、善惡正邪の分水嶺である。私共が人間らしい
高尚な世渡をするのも、又は碌々として意味もない一生涯を過すのも、全く此語の
心得方如何に由つて定まるものといふても差支ない。私は此書物を読み諸君が、如
何にもして此天に獨一の神様があつて、それが慈愛の父上であつて居るといふ道理
を會得し、其結果として善良、幸福、有用の生涯を送る人々とならんことを、切
に希望するのである。然らば私共は何ういふ理合を考へたならば、此「神は愛なり」
いふ貴い語の意味を、十分に合點することが出来るであらうか。
それに就て先づ第一に考へべきは、私共が人間として此の世に生れ出たる御恩のこと

とである。軍醫總監石黒忠憲といふ方は、稚ない時天然痘に罹られたことがある
由にて、今でも顔に痘痕がこのつて居る。久しき以前のことであるが、或時石黒氏
は如何にもして自分の痘痕を治療し、も少し恰好の好い顔になり度と思ひ、色々思
案をこらさるゝうち。序のことに人間の顔を總體に、今少し改良する工夫はないか
といふ様な問題を、考へ出されたさうである。それから勸工場に行つて、政治家、軍
人、角力取、俳優など、種々様々の人物の寫真を多く買ふて歸り、それを机の上に
列べては、腕を組んで前の問題を考へ込まれた様子である。斯くて數日の後、石黒
氏は終に一つの大きな發明を致された。それは他でもない。人間の顔といふものは、
矢張今の儘が一番好いといふことであつたと申すとである。此の如く日本で屈指の
大醫が、どんなに其智慧分別をしぼつても、どこを一點改良の仕方もない程に、行
届いてよく出来た顔を、私共箇々に授け給ふたものは、どういふ方であるか。
或時一人の小學教師が其生徒にむかひ、次の如きお話を致した。「皆さん此頃は色々
珍らしい器械が發明になります、こゝに一つの不思議なる器械があつて、それは

大小二十四箇のものから成立つて居る。長さ僅かに二三尺の小さな道具であるが、其調法なことといふたら、他に較べものがありませぬ。人が若し能く此器械の使ひ途を知つて、巧みに之を用ふるに於ては、或は雲を突く様に高い塔を建てるとも出来れば、底の知れぬ程深い井を掘ることも出来。目の届かぬ位ひろい野原を耕やすことも出来れば、又は顕微鏡でも見分けるとの出来難い程細かい細工をすることも出来る。諸子は其器械が何んといふものだから知つて居りますか」と問ふと。生徒は代るく手を舉げて思ひくの答をしたけれども、一つも満足なものがなかつた。乃て教師は自分から其不思議なる器械の説明をしていふには「皆さん、其器械といふのは、即ち諸子が銘々有つて居られる其手であります。抑も人間の手といふものは、大小二十四箇の骨を組合せて出来たるものにて、長さ僅かに二三尺の小さなものに過ぎねど、其働は實に大層なものであります。私共が若し巧みに此一本の腕を用ふるに於ては、それを雲を突く様に高い塔を建てるとも出来れば、底の知れぬほど深い井を掘ることも出来、目の届かぬ程ひろい

ひろい野原を耕やすことも出来れば、又は顕微鏡でも見分けられぬ位、細かい細工をすることも出来る。世の中にどんな不思議な器械の發明があつたからといふて、これ程不思議なものは決して出て来るものはありません。と説いて聞かれたさうである。成程さういふ風に考へて見れば、人間の腕といふものは、真に私共の思案に及ばぬ程、不思議な器械であると謂はねばならぬ。一體私共は何處の何ういふ方にお頼み申して、かゝる行届たる器械を授かつたのであらうか。私は或時禪學を修行したことがある一人の友人に向ひ「なんでも禪學の方では、隻手の聲を聞く」とかいつて、聲なき掌の聲を聞くのが、其修行の初歩ださうであるが。私は禪學がどんなものやら一向不案内であれど、近頃どうやら自己流に、其隻手の聲を聞いた様な氣がする」のであると申すと。友人は答へて「それは又どういふ聲を聞いたのか」と尋ねます。故。私は前の小學教師の不思議な器械の話をして「そこで今此物語を心に憶えながら、靜に己が掌を眺めつゝ、扱そこに一體どういふ聲がして居るか。心の耳をすませば、成程一種の聲が聞えて居る。而してその聲は「神は愛なり」と

響いて居る様に覺えられる」と、申すと。友人は「如何にも」といふて、うなづいた様なことがあつた。私共が唯其顔や腕だけの事を考へてさへ此通りであるから、況して其他の目だの、耳だの、鼻だの、口だの、さては内臓の組立だの、進んでは其體に宿れる靈妙なる靈魂のこと迄考へて来る段には。これはどうしても好加減な出来合ひ仕事ではなくて、慥かに愛と力とに富みたる天の神様の、御手際でなくてはならぬことを認めるわけである。即ち聖書に「見よ我は畏るべく奇しく造られたり」と認めてあるのは其事である。昔ソクラテスといふ大學者は、或時其弟子の一人が、街頭にて巧みに出来たる石像を指し、「先生一體あれはどういふ人の作でありませう、まるで活きた人間の様に、上手に出来て居るてはありませぬか」といふのを聞いて、「お前は石像が活きた人間に似て居るといふてさへ、それ程感心して居りながら、なぜ其本物の活きた人間を造り給ふたる神様を、尊敬すべき道理を辨へぬか」と、戒められたさうである。芭翁翁の句に「何んの木の花とは知らぬ句かな」とあり。いづこともなく吹き来る花の匂を嗅いで、そこらあたりには花の咲いて居ることを想像

することが出来る如く。私共は各自、斯く迄行届いて申分のない身體と靈魂とを授けられ、人間として生れ出でたるわけ合を考へるにつけても、此世に目には見えなけれ共、能力ある慈愛の神様が在なるとを、認めずには居られぬ次第である。第二、次に私共は、お互が無事息災に今日迄生き存へるとの出来たわけを考へるに就けても、神様が愛で在すと感ぜずには居られないのである。昔の心學本に「或夏の頃、十四五歳の前髪の子が桃の葉を葉て束ねて、或町を桃の葉や桃の葉やといふて賣り居つたら、向ふから又肴屋が肴を籠に入れて、鯛や鯛やといふて來かゝり。彼の桃の葉賣を見てから、其桃の葉は幾許かといふと。桃の葉賣が此りや一把が一錢ぢやといふ。それや滅相な高い桃の葉、五厘に負けよといふたら。否それでは損がゆくといふ。何、損が行くものか、それや大方どこぞの桃の木の葉を無料で取つて來たのであらうといふと。桃の葉賣がいふには、オ、此桃の葉は山の手へ行つて無料で取つて來たのぢやが、然う言はしやれば、お前のそこに擔いでござる鯛も無料であらうがといふ故。肴屋は大きに腹を立て、何、此鯛が無料であるものか、

此りや問屋から請けて来たのぢやといふと。桃の葉賣がいふには、その問屋へは何處から持て来た。其れや知れたと漁人が持つて来た。其漁人は又どこから取つて来た。それや海から取つて来た。其海へは金でも入れて取つたのかといふと。否、無料て取つたのぢやといふだけな」といふ様な話がある。此の如く海から無料て魚を取らす様に仕向けた者は誰であるか。一粒の米麥を蒔て置けば、それから百も二百もの實が取れる様取計らはれたのは、如何なる御方の御計であるか。西洋の諺に「人は井の水が涸れて後に、始めて水の有難さを知る」といふとがある。諸君は神様の御恵と、其御慈愛とを狎れ侮つてはならぬ。或時伊豫の小松といふ處に一人の貧乏な男があり、妻に死なれて二人の兒供をとり遺された。しかもその一人は乳呑兒である。或夜つらく思ふ様、大きな方の子は獨りて遊ばして置くとも出来れど、乳呑兒の方はさういふわけにはゆかない。さりとて毎日宵中に負ふて仕事に出られるものでもなし、寧ろ其方だけでも、亡き者にしてしまふたならばといふ様なことから、其夜大きな子の寝靜まるのを待ち受け、心を鬼にして乳呑兒の首に手拭を巻き、し

めかすると今迄熟睡して居つた大きな子が、ひよつくり起き上つて「お父さん」といふ。「お前は尙目がさめて居つたのか」と、之を宥めて今一度眠らせたる後。再び乳呑兒を殺さうとすると、大きな子は復もや飛び起きて、「お父さん」といふ。此ういふとが一晚に三度續いたので、其男は到頭我を折り、「天道様には敵はない」といふて、兒を殺すと思ひ止まつたといふ話を聞たことがある。昔の人の句に「秋風や人ほど死なぬものはなし」とあり。人間の命は脆いものにて、人の身の上には又様々の不運不幸の押寄するともあり、何か一寸した間違でもあらうものなら、直ぐに私共は死んでしまはねばならぬものである。お互が斯く何事もなく成人して今日に至つたのは、全く大なる神様の御恵によるものではないか。或人が流車の災難に遭ひ、危ない命を辛くも拾ふたので、家に歸ると直ぐに教會の牧師を聘び、感謝會を開いて貰ふとなつた。すると牧師は其人に向ひ「今日貴君が危ない處を免れて感謝會を開かれるのは、結構な御心がけてあるが。それにしても今日迄、一度も然ういふ危険な目に遭はずに過させ給ふたる御恵は、いつ感謝をなされまするか」と、いふたと申

すがある。「年を経て浮世の橋を見かへれば、さても危よく渡りけるかな。」私共は冥々の中に私共を守り導き、今日に至らせ給ふたる神様の、御愛心の深いことを感謝し奉つらねばならぬ。「すぎにし世には、神凡ての異邦人に、其己が道を歩むことを許し給ひしかど、又爾曹を恵みて天より雨を降らせ、豊かなる時を與へ、食物と喜とを以て爾曹の心を満たせ、己自ら證しせざりしとなし。諸君は無事息災に、今日迄生き存へるとの出来た御恩を有難く思ふにつけても、天の父なる神様の御愛心の深いことを認められねばならぬ。

第三、次に私共は神様が兩親を賜はりたる御恩の程を考へて其御愛心に想ひ及ぼさねばならぬ。諸君の中に誰一人木の股から産れ出たといふ人はない。何れも皆兩親があつて産み、又育て、下されたに相違ない。固より世には親でありながら、親としての務を満足に盡さぬ親の例もあるはあらうが、概して言へば世の中に子をいつくしむ親の恩愛ほど、無垢で、眞實で、忝けないものといふはない。私は貧しい家に生れ、十歳の時から親の膝下を離れ、親類で養はれたものである。それ故私は

餘り久しく親の膝下に居ることが出来なかつたけれども、親の有難いことばかりは、身にしみてよく承知して居るのである。私の母は無學なる田舎者にて、山の中に生れて山の中に死に、大方一生の間郷里から五里と外には出られたことの無い人であつた。併し乍ら私の母は其子の爲めに有らん限りの誠を盡された人である。母は私が生れ落ちると直ぐに、神様にむかつて願がけをせられたさうである。それが何んといふ神様にであつたかは私も知らない。唯何んといふとはない、所謂「識らざる神」に願がけをして「此兒が行末何卒善人になり、幾らか世の中に善事をするものとなります様、其爲め私は一生涯卵絶ちを致しまする」といふ様なことを、祈られたのであつた。元來私の郷里は、山陽山陰の境界に近い山の中にて、平生海の肴などは一切來ず、牛肉牛乳などいふものは、其頃誰も之を用ふる者がなかつたので、所謂滋養物らしい滋養物としては、先づ卵の外にはなかつた位のものである。然るを私の母は、唯私といふ子を満足に育て上げたい許に、其殆んど唯一の滋養物である卵を絶つて神様を拜まれたものである。其後二十七八年間、母は重

病に罹つて終に彼世の人とならるゝ迄、此神様への舊い約束を守り續けて、つひに一度も之を破られたとがなかつた。私は基督信者になつて後、夏休みに折々歸國したる時など、母に此約束を改めて下さるやうにと勧めたとも何遍かあつたが、併し乍ら母は斷じて聽かれなかつた。思ふに其當時私の母は天の眞の神様を知られなかつたけれ共、眞の神様は明らかに母の誠を照らして居給ふたに相違ない。乃ち私が今日兎も角も幾らか神様の御爲め、人の爲めになる様な世渡をしたものと覺悟し、夜に日に勵むとの出来る様になつたのも、其元は此母の眞實なる祈が、天の神様に届いた御蔭であると信じて疑はないのである。思ふに此の如きは唯私だけの事てなく、諸君の中にも亦それ〴〵其父なり母なりの有難い御恩愛を、身にしみて覺えて居らるゝ方々が少なくないとしてあらう。而して人の親たるものに、これ程厚き愛心を授け給ふたる天の神様は、御自身には亦どれほどか其以上に、厚い御愛心を有ち給ふも方であると思ふのが無理であらうか。私共は親の愛の有難いことを思ふにつけても、天の眞の神様の御慈愛を疑はず信仰せねばならぬ。

第四、次に神様の御愛心の深いことは、其罪人に對する御忍耐の事を考へれば分るのである。前申す如く神様は私共を人間として此世に生れさせ、慈愛ある両親をして丁寧親切に育てはぐしませ、又無くて叶ふまじき物を與へて、無事息災に今日迄生き存へさせ給ふたものである。私共の今日あるは全く神様の御恵である。それにも拘らず、私共はつひぞ一遍其有難い御恵を御禮申上るともせず、又その神様の思召に合ふ世渡をする心かけさへなく、却つて神様が賜はりたる健康、時間、智慧、力量等を濫用し、本心に背く行をなし、神様の聖旨を痛め、世の人の禍となる様な罪愆のみ犯して居る。歌に「あまりにも神の恵の廣ければ、恵を知らぬ人もこそあれ。」然るを神様は氣長く、辛抱強く、忍耐して、罪人が改心するのを待つて居給ふ。其御忍耐の深いとを見れば私共は神様が愛の神様で在し給ふ道理を、認めずに居られないのである。これは米國での物語であるが、或時二人の娘が肉身の同胞も及ばぬ程親しい交際をして居つた。處が其一方が結婚して一二年の後、急に姿を隠し、全く音信不通になつてしまふたゆゑ。残つた方の娘は「これは餘りにつれない仕方であ

る、如何なる事情のあるにもせよ、私に許りは行先を知らせても可さうなものを」と、非常に恨んで居つたが、さりとて別にせんすべとてもなかつた。それから十七八年過ぎて後、或日残つた方の婦人が旅行したる先にて、不圖或家の二階から首を出して居る一人の婦人を見るに、其姿が如何にも以前に親しくした友達に似寄る故。乃ち戸を叩いて面會を求め、會ふて見ると、頭の髪こそ意の外に白くもなつたれ、其額にこそ皺も寄つたれ、まがふ方なき以前の友達であるからうどうして貴女は其以來姿を隠くしておしまひになつたか。餘人は兎もあれ私に迄も行先を知らせないといふのは、餘りの仕方ではありませぬか」と怨ずると。其婦人は答へて、「眞に相済みませぬでした。併しこれには色々言ふに言はれぬ事情がありますので、先あ何卒一寸こちらへ来て見て下され」と。誘はるゝ儘に次の室に行つて見ると、そこには十七八歳と思しき一青年が寝て居り、其顔の似て居る處から、それが其人の子だといふとは直ぐに分かつたのである。其時其婦人が言ふには、「此子が私の世間を避けて引込んでしまふた理由であります。御覽なさい、顔附だけ見ても然る懸

かさうにも見えぬのに、不幸にもこれて居て生來の白痴であります。私は此子を産み落してのち、色々と思案を致しました結果、到頭一切世間の交際を避け、此子の爲めに埋木になつて一生涯を過す決心をしたのであります。固より血を分けた我子でありますものを、假令白痴であらうと、不具であらうと、我子の爲めに苦勞するの何んの心のこりがありませう。併し乍ら、それでもねエ貴女、長い間に折々は、此うして居るうちにいつか此子が人並に分別が出て、唯一言なりとも「お母さん」といふて呉れるとが出来たならば、何んなに嬉しい事であらうかと、思はぬともありませぬ」と、涙ながらに物語つたといふとである。皆様よ、天の父なる神様は、丁度此白痴の子を養育したる母親と同じ様に、亦諸君を養育してお在なされる。而して此慈愛深い母親と同じ様に、亦諸君がいつか一度は其本心に立歸り、「ア、我父よ、天の神様よ」と、呼び奉つる日の來らんとを待つて居給ふのである。貴君が十七歳であるか。神様は過る十七年間貴君を待つてお在なされる。貴君が二十五歳か、三十歳であるか。神様は去二十五年間、又は三十年間、貴君を待つてお在なされるのである。

貴君が四十歳、五十歳、六十歳であるか。神様は去四十年、五十年、六十年の長の歲月、貴君を忍耐し、容赦し、いつか其うちには、翩然として其罪を悔い、神様に立歸る様にと待つてお在なされるに、貴君は此上いつ迄神様を待たせ申上るつもりであるか。「爾神の豊かなる恵と、寛大なると、忍び給ふとを藐視するか。其恵は爾を悔改に導くなるを知らず」とあり。諸君は神様の御忍耐の深いとを考へて、其御愛心の有難い道理を悟り、それにつけても速かに悔改めて、其御憐憫に依頼されねばならぬ。

第五、とはいへ、神様が若し際限もなく罪人を容赦してのみ居給へば、罪人は愈増長して其非を遂げる恐がある。それ故神様は罪人を忍耐するのみならず亦之を懲らしめ給ふ。これは罪人が悔いからではなくて、却つて愛しいからの御計ひである。「惜みては打たぬものなり笹の雪。」あんな竹など折れても可と思へば棄て置く。併し乍らあれは大事な竹である、雪折れがしては惜いと思へばこそ、之をたぐいて其雪を拂ふてやるのである。丁度其通り、神様は亦私共を愛する故に懲らしめ給ふ。

即ち私共が不養生すれば病氣になり、怠れば貧乏になり、不真面目な真似をすれば事業に失敗するといふ様に、神様は絶ず懲罰の鞭を以て、人を戒めて居給ふものである。「我子よ、爾主の懲治を輕んずる勿れ、其譴責を受くる時心を喪ふと勿れ。そは主其愛するものを懲しめ、又凡て其納くる所の子を鞭てり。誰か父の懲しめざる子あらんや」とあり。神様は愛の鞭を以て不心得なる其子等を懲しめ給ふものである。昔武藏坊辨慶は安宅關にて其主人なる義經を打つたといふことである。併し乍ら其時は、杖の下にうたる義經よりも、打つ辨慶の胸の中の方が、餘程痛かつたに相違ない。丁度其通り神様は亦私共に様々の不幸なる運命を與へて、其不心得と罪とを懲しめながらも、其御心の中には、却つて私共よりも深い苦痛を覺えておいてなされるのである。聖書に放蕩息子が貧乏して食へる物にも困り、お負けに饑饉年に迫められて、豚の番人と迄落ぶれたる後、始めて其本心に立歸つたといふ比喩談がある。諸君は色々の心配苦勞や、難儀不運に遭ふにつけても、これ全く天の父なる神様の御愛心より出づる、懲罰の鞭であるといふ理合を考へ、速かに悔改めて、神

様の思召に合ふ眞人間となられねばならぬ。

第六、神様は前にいふ如く罪人を容赦する許りてなく之を懲らしめ給ふ。加之一旦翻然として其罪を悔い眞人間にならうとする者の爲めには、前以て獨子耶穌基督といふ方を此世に遣はし、十字架にかゝつて造も救の道を立てさせておゐてなされる。神様が斯く私共を罪から救ふ爲めに、獨子基督をさへ賜はりたる思召の程を眞實に味ふたならば、私共は最早何うしても、神様の御愛心の深いとを認めずには居られないのである。夫れ神は其生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信する者に亡ぶるとなくして、限りなき命を受けしめんが爲めなり。又「夫れ義人の爲めに死ぬるもの殆んど稀れなり。仁者の爲めには死ぬることを厭はざる者もやあらん。されど基督は我儕の尙罪人たる時、我儕の爲めに死給へり。神は之に由りて其愛を彰はし給ふ」とあるのは此事である。私共は神様の前に如何程罪深い人間であつても、若し眞實に其罪を悔改めて基督を信仰するに於ては、これ迄犯したる凡ての罪を皆赦され、又以來心を入れかへられて、打つて變つた善人になると

が出来来る。昔老ぼれて役に立たなくなつた人間を、山奥に棄て居つた時代があつて、信州の姥捨山などいふのは其頃から遣つた名前だといふとである。其頃或時一人の若者が腰のぬけた老母を負ふて山奥へ捨てに出かけた。處が脊中の母は、折々手を伸べては木の枝を折つて居る様子であるから、「おッ母さん、お前何をして居るのか」と尋ねると、母は答へて、「私は先刻から途次木の枝を折つて、柴をして居る處である。どうせ私は足腰の立ぬ、生き甲斐もなき老の身であるから、此うして山奥に捨てられても、さら／＼厭ひは致さねど。お前はまた先きの長い若者であるに、若しや歸りの途に迷ひ、荒い獸の飼食にてもなる様なことがあつたなら、どんなに悲しいとか知れない。それ故私は先刻から、途次木の枝を折つて柴をしておいたゆゑ、お前は好加減な處へ私を捨てたら、何卒道に迷はぬ様此柴を辿つて、さつさと家に歸り、切角達者で仕合に日を送つて呉れよ」と、言はれたと申す話がある。人の親の心は闇みにあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな。丁度其通り、神様は現在自分に逆らひ、自分に仇する罪人をさへ尙も憐れみ、さういふ人々の救の爲めに獨子基督を

道はし、十字架に迄もかゝらせ給ふたのである。世にもこれ程大きな愛といふが復とあらうか。私共は神様が斯く教主を此世に降し、十字架にかゝつて迄も、私共を救はせ給ふ大御心を考へるにつけても、其御愛心の廣大無邊なることを心に思ひ知らねばならぬ。歌に「親は子といふて尋ねもするが、親を尋ねる子は稀れな」とあり。諸君はいつ迄も、天の父なる神様にのみ御心配をまかけ申さず、速に自分から進んで神様の御恵を求め、其御救にあづからねばならぬ。これは諸君にとつて何より大切な務である。

第七、最後に今一つの神様の御愛心の深いとは、罪より救はれて、清く正しき世渡をする様になつて後に始めて本統に味ふとが出来ものである。前にもいふ如く神様は天地萬物を造り、凡て入用の物を私共に授くるのみならず、最後に其獨子をさへ賜ふて、私共を罪より救ひ、神様の子供の一人とならせ給ふ。私共はかゝる重ねく御恵を身に實驗する様になつて後に、始めて十二分に神様の御愛心を味ふとが出来ものである。此場合になつては、最早理窟や道理の沙汰ではなくて、實地經驗上の

話である。私共は前に罪を犯しつゝ、無用有害の生涯を送り、未は地獄に墮つべき筈の處を救はれ、以來は善良、有用、幸福の人間となり、此世の旅路終りて後には、又天國の榮をさへも受けるものとなる。こんな有難い恵といふが復とあるものではない。聖書に「爾曹見よ、我儕稱へられて神の子たるを得、これ父の我儕に賜ふか許りの愛ぞ。世は父を識ず、是に由りて我儕をも識らざる也。愛する者よ我儕今神の子たり、後如何。未が露れず、其あらはれん時には必らず神に肯んことを知る」とあり。諸君は天の父なる神様の御愛心を認めて、其御救に與かり、其豊かなる御恵の中に毎日を過すものとならねばならぬ。

(一) 人を救ふ力

此ほか別に救あることなし。蓋天下の人の中に、我々の依頼みて救はるべき他の名を賜はさればなり。

(徒四〇十二)

今日人間世界の罪と、亦それに附まると禍とは、何うしたならば之を救ふことが出来るかといふに。或人が申すには、「人が悪いことをするのは其人達に智慧がないからである、無教育が罪と愆との本であるから。もつと皆を學校に入れて教育さへすれば、悪いことは自然に止むであらう」とのとである。然るに實際の世の有様を見れば、愚かな者が悪い事をする丈ではなくて、智慧のある人が悪い事をして居る。智慧のある馬鹿に親爺は困り果て」といふのは、其事である。いつぞや横濱で一人の泥棒を捕へ、其懷中をしらべると、一冊の手帳が出て來た。何んだか横文字で書き込んであるから、英語の出來る人に讀ませて見ると。これは何時何處へ泥棒に入つたといふ覺を、英語で書たものであつた。英語を勉強した學者が泥棒になつて、他の人

に讀めない泥棒日記を書く杯といふのは、随分恐れ入つた話である。或は「貧すりや鈍するとか、または貧の竊みなどいふて、人は貧乏するから悪い事をするのである。それ故何んでも利益の配當をよくし、少しも多く給料を取れる様にさへ仕向ければ、人は悪いことをするものではない」といふ人がある。これは大きに道理のあるとにて、實際此世には生活の問題に苦しめられ、つひ心ならずも悪い事をして居る者が多いに相違ない。さり乍らそれでは反對に金の融通の利く人は何うか、食ふに困らぬ人達は如何と考へて見るに、「小人罪なし玉を抱いて罪あり」とやら。世には金が自由になる爲めに、飛んだ悪いことをする人々が少くない。金持は度々貧乏人に眞似の出來ない悪いことをして居るものである。即ち「富める者の天國に入るは、駱駝の針の穴を通るより難し」といはれるほど、金のある人は金のあるだけに罪を造る様な例が多い。人は金の工面が好いからといふて、それで善人になれるとは限らぬものである。或は「法律を嚴重にし、びしく」と悪い事をする人間を罰したならば、それで世の中を善くすることが出來るであらう」と言ふ人がある。併し乍ら

監獄に行つて見れば、十人の囚人の内六七人は、いづれも二度以上、舞戻つて来た人々であつて見れば、法律の力も案外届かぬものだといふことを知らねばならぬ。或時秋葉の原にて、土方の間に働いて居る一救世軍兵士の話に、「頃日警察がやかましくなつて、賽の目で博奕をうつとなど出来なくなりましたから、今度は電車の番號で、偶だの奇だのと賭事をする様になりました。困つたものであります」といふとてあつた。其如く法律は人を外部から取締るものではあれど、固より人の心を改める力はない故、未だそれ文では此世の罪と惡とを絶することが出来ないのは、申す迄もないことである。或は「社會の制裁といふものを厳しくし、輿論の力を借りて世の中を改良したら」といふ人々がある。併し乍ら水は水源より高く揚がる事が出来ない道理。お互に不眞面目、不身持なことのみに行ふもの、多い世の中に、仲々そんな手ぬるいこととて、人を善に化することの出来やう筈がない。然らば私共は如何にして此世の中を救ふべきか、如何にして罪と惡とに苦む人間を救ひ、善良、幸福、有用の人とならしむべきであるかといふに。それは各々其犯せる罪を悔改め、基督を

信仰して其御教を受けるより外に、方法はないことである。といふ理由は、一、罪人が悪い事をするのは、其心がするのである。即ち手て悪い事をするのは、手がするのでなくて心がするのである。口て悪い事をいふのは、口が言ふのでなくて心が言はするのである。有ゆる罪と惡との本は皆心の中にある。それを忘れて人を唯外部からのみ扱ひ、貧乏だからといふて金を持たす工夫をし、手足で悪い事をしたからといふては、手足の自由を奪ふて監獄にぶちこみ、又は智慧分別が足りないからといふて、唯頭にばかり色々な智慧を注ぎ込んでも、若し肝心な人の心を入れかへる事が出来なかつたならば、罪人は決して善人になれるわけのものではない。昔庚申塚に目と耳と口とをさへた三頭の猿を刻つたのが多くあつた。これは一切の悪い事を見ざる、聞かざる、又言はざるといふ戒を、猿に引かけて教へたものと見える。さりとして實際の世の中では、まさか年中、目や耳や口をさへて歩かぬものでもなし。乃て或人の歌に「見ず聞かず言はざる三つのざるよりも、思はざることをまじりなりけれ」と詠んだのは、如何にも道理に合ふたことと思ふ。然らば私共は何う

したならば、法律も、教育も、社會の制裁も、金錢の力も届かぬ所に、人の心を變化することが出来るかといふに。それは唯救主、耶穌基督を信する信仰に由つて出来ることである。即ち人間に靈魂を授けた天の神様に頼り、其御力によつて既往に犯せる罪を赦され、亦此後罪に染まぬ清き生涯を送る力を授けらるゝ外に途はない。之を名付けて基督の救とはいふのである。今私は進んで少しく、此基督の救とは如何なるものかといふ説明をして見たいと思ふ。

元來此基督の救といふのに、二つの大切なる意味があつて。其第一は既往に犯せる罪を赦さるゝ事、第二には又其罪に穢れたる靈魂を入れかへ、新しき心をもつた人間とせらるゝことである。

●第壹、基督は私共の犯せる罪を赦し給ふ事。聖書に「人の心は尙其疾を忍ぶべし、然ど心の傷める時は誰か之に耐んや」といふことがある。人が己の身を省みて、神様の前に犯せる罪の大なることを見出す時、殆んど身も世もあらぬ思ひが致し、悶え苦しむ様になるものである。印度人の話など聞て見るに、罪滅しの爲めとて釘を打

列べたる寢床の上に横になり、身體を釘に刺れ乍ら神様を念ずるものあり。一坪程の地面を仕切り、四隅にどんぐり火をたいて、其中程の處に設けたる席に坐り、逆上つて悶絶する迄呪文を唱ふる者あり。もつと酷いのは丁度田舎の彈釣瓶の如く、丁の字形の木を立て、其横木の一端には鉤をつけ、鉤の先を人間の背中に引かけ、横木の他端には繩を結んで置いて、一人が其繩を引張たり伸したりすると。其度毎鉤にかけられて居る人は、忽ち空中高く引立られ、又忽ち地上に釣下される。かくして身體を上たり下したりせらるゝ間に祈禱するのが、罪滅しの一法だと心得て居る者もあるといふ事である。我朝に於ても彼袈裟御前を殺して後發心したる文覺上人が、一週日の間裸で竹籤の中にて蚊に喰れ、又は三七日の間那智の瀧にうたれて荒行をしたといふ様な例は、随分少なくないものである。此の如く人は其犯せる罪の容易ならぬとを悟る時、何んなにかして之を赦されたいものであると、色々難行苦行をするものもあれば、又は牛羊などを殺して、其を犠牲に罪の赦されんとを願ふ者もあり。或は罪を悔む餘りに出家して山寺に引込む者あり、托鉢坊主となる者あり。

其他堂宮を建立し、施與をなし、斷食祈禱をなし、お百度、日參、巡禮をする等、何處の國にも昔から随分ある習である、併し乍ら、世を棄て山に入る人山にても、尙憂さ時はいづくゆくらん」といふ歌もある通り、人は山寺に入つたから、それで安心立命を得らるゝものでもなく。又は難行苦行や、施與や、犠牲などしたからといふて、罪愆を消さるゝわけのものでもない。人の罪愆を赦す者は、唯神様の御子耶穌基督が十字架の上に流し給ふたる血汐の功德に由るとである。天の眞の神様は人間が重ねゝの罪を犯し、悔めども及ばず、もがけども自分で自分を救ふ力なく、苦んで居る有様を見て之を可憐と思召し。今から千九百年の昔、其御子耶穌基督をユダヤの國に生れさせ、人間の委を取つて三十三年の間此世に存へ、有難い教訓を説き、貴き模範を示したる後、其罪もない御身を十字架にかけ、萬國萬民の身代りとならせ給ふたのである。即ち人は何んなに罪深い者と雖も、最早何等の難行苦行をなすに及ばず、又は犠牲や、施與に由つて自分を贖ふとを努むる迄もなく、唯眞實から既往に犯せる罪を悔改め、耶穌基督にすがりさへすれば、神様は基督の血

汐に免じて、直に私共の凡ての罪を皆赦して下さるとになつたのである。乃ち書に「夫神は其生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信する者に、亡ぶるとなくして永生を受けしめんが爲なり」とあるのは、此事であるハレルヤ。或時ロシアの國に一人の兵卒が在つて、一夜机の前に坐り、鉛筆をとり上げて、幾人から借りて居る借錢の額を勘定して居つたが、計算して見ると仲々大層な金高であるから、何う考へても一兵卒の身分として之を支拂ふ見込が立たず、ぼと／＼思案にくれ。やがて總勘定の終の處へ「此借錢を誰が拂ふ？」と認められた儘、時間が来たから寢床に入つたのである。其夜露國皇帝ニコラス陛下には、微行して右の營所へ御出になり、深更にあちら此方と部屋々々を御巡察になつたが、忽ち或兵卒の机の上に、何か書附の様なものがあるのに御目がとまり、手にとつて御覽になると之は借錢の計算書であるから、さて／＼身分に不似合なる多分の借をこしらへたものである。何々「此借錢を誰が拂ふ？」とか、これは面白い、朕が一つ拂ふてやらうと。有合せたる鉛筆を取上げて、其後の所へ「ニコラス」と御自分の名を御認めになり、其

まゝ御引取になつたが。翌朝になつて兵卒は目を醒し、軍服を着ながら何気なく昨夜の書付を窺いて見ると、此は不思議。此借金を誰が拂ふ？」と書た後へ、見慣ぬ手蹟にて夜の間に誰か、「ニコラス」と書込て居る。奇跡なともあるものだと思ひ感ふて居ると。ほどなく上官から呼出され、皇帝陛下の特別なる思召により、丁度その借金を拂ふに足る丈の金額を御下賜になつた故。兵卒は夢かと許りに驚き喜び、さしては前夜我部屋に来て、わが書附の終に「ニコラス」と記名なし給ふたのは、畏くも我一天萬乗の皇帝陛下であつたかと、それこそ手の舞足の踏む所を知らず、狂ひ廻つて陛下の御仁徳を讃へて歩いたといふ話がある。今私共人間が神様の前に重ね重ねの罪を犯し、自分で之を救ふに途なく、如何とも致方のない有様に陥つて居る時。神様の御子基督が賤しい人間の姿を取て世に現はれ、十字架にかゝつて罪の身代となつて下されたといふのは、聊さか之と似た様な事實である。即ち一天萬乗の皇帝陛下が、名もなき一兵卒の爲に一切の借金を拂ふておやりなされた如く、基督は又私共罪人の爲めに、貴き血汐を流して凡ての罪愆を贖ふて下されたものである。

前の兵卒は其借金を拂ふて戴いた時に、手の舞足の踏む所を忘れて狂ひ喜んだ如く、私共は亦基督に由つて、既往に犯せる罪の皆赦されたことを知る時、心から何とも言へぬ感謝の念に満さるゝ者である。ハレルヤ。夫義人の爲に死る者殆んど稀なり。仁者の爲には死るとを厭はざる者もやあらん。然ど基督は我儕の尙罪人たる時、我儕の爲に死給へり。神は之に由りて其愛を彰し給ふ」と。私共は基督の十字架を見て、天の父なる神様の御愛心を、深くも感佩いたす者である。

第二、基督は私共の靈魂を更生らせ給ふ事。人が其犯せる罪を悔改めて基督を信仰する時、神様は既往の罪を赦すのみならず、亦其人の靈魂を更生らせ給ふ者である。譬へば同じ一升徳利でも、酒を入れてある間は酒徳利だか、水を入れて中を洗ひ、後に醤油を満すならば、それが醤油徳利と變る如く。體は元の儘の體なれ共基督に由つて其靈魂を入かへらるゝ者は、全く以前と違ふた人間になるとが出来る。即ち罪に穢れたる心は聖くなり、利己主義の人は愛心ある人と變り、これまで惡魔の支配を受けて居つた者は、以來神様の御支配を受ける人間となる。此變化を名けて靈魂の

更生とはいふのである。川柳に「極無理な異見、たましひ入かへろ」と申し、親爺が道樂息子を呼つての強異見、「こゝな大馬鹿者の腑甲斐なし奴が、そんな鈍い意氣地のないとして、乃公の跡目相續がなると思ふか。今から屹度たましひを入かへ、性根の違つた人間になれ」と、此様に言て聞かせる。其言るゝ所は如何にも尤も千萬であれど、扱其靈魂を入かへるといふとが、口に言ふのは容易けれ共、之を實地に行ふことは何うしても出来ない。其爲め道樂者は勿論、親不孝者も、肝癪持も、懶惰者も、氣儘者も、凡て我罪愆に心付た程の人々は、皆これをのみ持餘して居る様な次第である。併し乍ら幸ひなるかな、こゝに天の眞の神様は罪人の心を更生する道を開き、假令如何程極悪非道の人と雖も、若し心から其重々の罪を悔改めて、心に基督におすがり申すならば。基督は不思議なる救の力を以て、其場て即刻其人の靈魂を入かへ、これ迄好き好んだる一切の悪事は、急に耻かしく又嫌ひになつて。それと一緒に以前窮屈とのみ覺えたる善事は、心から好ましく、又楽しくなる様、御取計ひになつて居る。何んと忝けない御恵ではないか。スロツス爺といふのは長

らくの間英國の救世軍中に評判の男であつたが、此爺は其以前稀なる大盜賊にして、復しても牢屋に許り入つて居り、都合四十年の長の歲月を英國と濠洲との監獄にて過し、革の鞭にて五十宛脊中を打たれたると前後八回に及び。又餘り度々ポートルンドの監獄に出入をした故、英國の泥棒仲間では「ポートルンドのお大名」と仇名を取た程にて。警察も監獄もほと／＼之を持餘し、此んな厄介者は何とか名をつけて監獄で蓄殺にする工夫はあるまひかと、相談したといふ位の難物であつたが。それが一夜不圖救世軍の安宿に泊りたるが縁にて、悔改めて基督を信仰し、其御救を受るととなつた。以來爺は其死ぬる時迄十七八年の間、終始一徹熱心なる信仰の生涯を續けたが、殊に最後の七八年間は救世軍の出獄人救濟所に雇はれ、毎日其方の主意書を持って監獄の門前に立ち、放免になつて出て来る人々を待受ては右の主意書を示し、救濟所に連れて来ては其肉體と靈魂と二重の救を受さず様、手引をして居つたのである。此スロツス爺が平生の懺悔談に「鐵の鏈も、懲役も、四百度の鞭も、四十年の牢屋住も、私を改心さするとが出来なかつたものを。神様は僅か一

二分の間に全然私の心を入かへ、更生つた人間となし、又其更生つた心を今日迄持
 續けさせてお出なさる。何と有難いとはないか」と、此様にいふて居つたのであ
 る。此の如く非常な極悪人をも其靈魂を入かへて、丸切り變つた善人とするのは、
 唯基督の救の力である。ブリス大將が或時濠洲に渡り、其首府メルボルン市にて演
 説せられたる中に、此ういふ言葉があつた。「諸君、余は今新南威斯州のニューカ
 ッスル市から當市へ參つた。同市にて余が出席したる集會に、八十四歳の老女にて、
 此十八年間は最も忠實なる救世軍の兵士であれど、其以前は手も附られぬ大酒家の
 狼藉者であつた婦人に出あふた。此婦人は蓬の様な頭をし、あらめの様な着物を着
 て、ニューカッスル市を暴れ廻つた者である。同市の各警察署は悉く之を持餘して
 居り、同人が牢に入つたる度數は都合百四十回であつたといふとである。而してそ
 の爲めに、政府がつかふて居つた費用は、毎年金一千圓以上であつたが。其が今から
 十八年前に一人の救世軍人に導かれ、基督の救を受けて更生つた人となり、以來は
 政府に御厄介をかけぬ許か、相當の税金をさへ納める立派な市民となつて居る。即

ち唯此婦人一人に就て言ふも、救世軍は濠洲の政府に對し、過る十八年間少くとも
 壹萬八千圓の貸金がある筈である云々。「何んと驚くべき更生りの事實ではない
 か。
 併し乍ら此更生の恵といふものを、唯世の中の大酒家、盜賊、淫婦、其他目に見
 えて著るしい墮落をした者にのみ、必要なことの如く考へてはならぬ。聖書に「義
 人なし一人もあるなし」と申し。人は皆悉く神様の前に罪の深い者にて、殊に其
 動機に立入つて吟味する段には、此世で道德家とも、品行方正の人物とも認めらる
 る者が、却つて案外神様の前に、非常な大罪人である様な例も多いとである。其故
 基督は其御在世の當時、或時地位あり、學問あり、世の人から品行方正の君子と立
 られて居るニコデモといふ人に向ひ、「人若し新に生れずば神の國を見ることが
 と、説いても聞かせになつた様な次第である。コリエーといふは有名なる説教者に
 て、ブリス大將の如きも、幼い時其説教を聴聞して非常に感化を受けられたといふ
 とであるが、此コリエーに就て面白い話がある。同氏が基督信者になつて後、或日

熱々我心の有様を省みるに、未だ何となく物足ぬ節が多くあり、所謂「熱くもあらず冷たくもない」中途半端の信仰であることに気が付た故。之では不可、何うも自分
 は信者といふ名のみにて、其實は未だ靈魂の更生といふことを経験して居ない者である。率、今から慥かに其實験をなし、本統に救はれた人間にならう。それには更生の實驗をすると一緒に、傍から其當時の模様を書留めたならば、實驗と共に其道
 理をも十分呑込ことが出来るであらうと。乃ち聖書と、歌の本と、手帳と、筆墨
 汁とを携へて一室の中に閉籠り、靜かに我身の有様を吟味し、罪を悔改めて、一切
 を神様の御手に任せ、「今私を赦し給へ、我靈魂を更生らせ給へ」と祈つて居ると。忽
 ち神様の靈は其上に降り、明白に罪を赦されたりと覺ゆるのみならず、亦慥かに心
 の變化せられたることを感ずる様になつた故。感謝の念に充溢れつゝ筆を執て手帳
 に向ひ、先づ「榮光、榮光、榮光」と書起し、少し許り當時の有様を認めたが。何
 分喜びが胸の中に一杯であるから、又忽ち紀事を止て「ハレルヤ、ハレルヤ、ハレル
 ヤ」と続け様にかいた。かくて一行認めては「榮光」、二行書ては「ハレルヤ」とい

ふ様な調子にて、書た後で讀て見ると、更生の哲理といふのは唯もう何の事はない、
 始から終迄「榮光」と「ハレルヤ」との一點張であつたと申す話がある。
 基督は斯く悔改めて、其救を信仰する者の罪を赦すのみならず、亦其靈魂を入れか
 へ、何んな大悪人をも、瞬く間に全然以前と異ふたる善人にならせ給ふ者である。
 其故に基督の救は根本的の救である。基督は眞に「凡ての人を照す全き唯一の救
 主」である事を知らねばならぬ。救主耶穌萬々歳！

(註) ハレルヤとは「神を讃めよ」といふ様な意味の語である。

(三) 如何に救を受くべきか

期は満てり、神の國は近けり、爾曹悔改めて福音を信ぜよ。(可一〇十五)

基督は人の罪を赦すのみならず、其靈魂を更生らせ給ふ。然らば斯る大なる御救は、如何にして之を受けらるべきかといふに、之には二つの大切なる條件があり。即ち悔改と信仰とである。

第一、悔改とはこれまでに作りたる罪を悔ひと、又之を改めるとである。昔熊野の山中に親を殺した者があり。役人は早速之を捕へて吟味すると、其男は一向平氣で。「私が若し他人の親を殺したといふなら、御咎めを受けるのも止むを得ない」と乍ら、我親を殺した分に何の悪いとがありますか。一體我親なる者は平生我儘なと許り申し、家内中持餘して居りました故、私も止むなく之を殺したので、それが何うして罪になりまするか」と。眞面目に主張して居る様子を見て、藩主徳川頼宣公には深く心を痛められ、申さるゝ様。烏に反哺の孝あり、鳩に三枝の禮ありとやら、禽さ

へ孝道を知る世の中に、人間として其親を殺すとの罪たる道理を辨へぬ者があると云ふは、全く余の過である」と。乃ち藩中一番の學者にて李梅溪といふ人に言ひつけ、三年の間孝經の講釋を右の男の爲めにさせられると。三年経て後其男は始めて親孝行の大切なる道理を合點し、自分が親に背き、上に手敷をかけたる罪を悟り、「此上は一時も早く御處刑を仰せ付られます様」と願出た故。藩主を始め役人一同、不憫とは思ひ乍らも政道なれば致方なく、法に據て之を處刑せられたといふとがある。今日の眞の神様は人間の靈魂上の父上である。日月を照し、雨露を降せ、飲む水、食る米麥を支給ひ、何一つ足らぬものない様に、私共を恵みはごくむ御方である。然るを此眞の神様を拜まず、日毎我儘氣儘の行爲をなし、淫た一生涯を送る人々は、是れ世にも大外れた親不孝者ではあるまひか、前の熊野の親殺しは、親を殺して其罪たるを知らなかつたといへど。世には天の父なる神様に背き、重々の大不孝を致し乍ら、自分の大罪人たるに心付ず、平氣で日を送つて居る人が多くある。嘆かはいとはいではないか。加之聖書には「凡ての不義は罪なり。」善

を知て行はざるは罪なり。」又一「凡て信仰に由りて爲ざるは罪なり」といふとがあらう。若し然らういふ嚴重なる尺度に由つて、私共が毎日の世渡を吟味せらるゝに於ては、誰か天の神様の前に、山の如く多くの罪愆を重ねて居ない者があらう。又私は之でも人間一人前の役目を盡して居りますと、大な顔して言得る者があらうか。有名なる説教者ムーデーといふ人の言に「若し爰に一人の人があつて、人間の心の有様を其儘寫真にとる術を發明し「何卒御最負に願ひます」と、世間に廣告したとするならば、諸君は其人の商賣が繁昌すると考へになるか。さうではあるまひ。一體人は皆其美しい容貌や、上手な着物の着なしを寫真に探るとを好み共、其心の有様は之を人に知らるゝとを好まない。却つて人に知られては耻かしいとのみ多くある故、成べく之を掩ひ隠さうと努めて居る者が多い。其故右様な商賣は繁昌しないて、却つて直ぐにつぶれてしまふに相違ない。が併し乍ら皆様よ、こゝに凡ての人の心を寫したる正直正銘の寫真がある。否でも、應ても、ちやんと諸君の心の様を、とつくの昔から寸分違はず寫し取たる寫真があつて、それは即ち聖書の羅馬書第

三章である」と言ふてある。そこで今試みに其羅馬書の第三章を開けて見ると、「義人なし、一人も有るなし。明達者なく、神を求むる者なし。皆曲りて全く邪まとなれり。善を作すものなし、一人も有るなし。其喉は破れし墓、其舌は詭詐をなし、其唇には蝮の毒を藏り。其口は詛と苦さにて満ち、其足は血を流さん爲めに疾し。残害と苦難は其途に遺れり。彼等は平康なる道を知らず、其目前に神を畏るゝの懼あるとなし。是故に律法の行に由りて神の前に義とせらるゝ者一人だに有るとなし」と、此様に認めてある。皆様よ、これは諸君の正直正銘なる心の寫真ではあるまひか。人は外の貌を見れども、神は心の中を見たまふ。天の眞の神様は、諸君が陰の方で行ふとも知り、亦心の中に思ひめぐらすことをさへ、一々御存知でお在なされる。諸君は今日迄虚言詭詐を言ひ、喧嘩口論をなし、人を罵り、人を陥れ、不孝、不實、不義理、不人情、無慈悲、不親切、貪り、盗み、怨み、嫉み、高ぶり、放侈、懶惰、浪費、其他飲食男女の慾等に、其身を穢した覚えはないか。凡そ婦を見て色情を起す者は、心の中既に姦淫したるなり。諸君は假令公然と右申す如き罪を行はれ

なかつたとした處で、少くとも心の中に之を思ひ、神様の聖旨を痛めては居らぬであらうか。又身勝手などは即ち罪である。諸君は今日迄一切萬事我が身勝手の心から之を行ふては居らなかつたか。正直に自分を省み、篤と今日迄の世渡を吟味して御覽なされ、歌に「なきなどい人には言てありぬべし、心に問はれ何とこたへん。」世の中の人には知らねど科あれば、我身をせむる我心かな。「何れも胸に思當る所がありませうがな。そののみならず、罪は凡ての禍の本である。神様は罪人を罰し給ふ。古語に「天の作る孽は猶避く可し、自ら作る孽は遁る可らず」と申し、人間世界に念の入つたる禍は、凡て皆其當人が犯せる罪の報として身に落來るものである。或時一人の説教者が講壇に立ち、聖書の中から、「自ら欺く勿れ、神は慢る可き者に非ず、蓋人の播く所のものは亦其穫る所となるなり」と云ふ一節を讀み上げ。神様の御賞罰の明かなるとは、譬へば善種に善果を生じ、惡種に惡果を生ずる如くであると、説いて居ると。忽ち聴衆の中から一人の男が聲をあげ、「私は然んなどは信じない」と叫んだ。けれ共説教者は騒がず、講壇の上から答へて、「我友よ、貴君がそれを

信ずると否とに關はず、眞理はどこ迄も眞理にて、神様は必らず嚴重に箇々の人間を審判なし給ひますぞ」と答へ乍ら、平氣で説教を續けたが。やがて集會がすんで各々家路に就く時、一人の警官は集會所の入口に待つて居つて、矢庭に先刻の「私は然んなどを信じない」と、叫んだ男を捕へた。後にて聞けばこれは度々人の家に忍び入り、盗みなどして居つたものださうである。即ち此男は眞の神様の御賞罰のあるとを信じないと云ふたけれ共、天網恢々疎にして漏さず、然ういふ口の下から、自分の犯せる罪の祟を受け、此世から早くも懲役にやられ、耻と苦みとを受けたる者である。聖書に「神は人の行に循ひて各々に其報をなすべし。耐忍びて善を行ひ、榮光と不朽とを求むる者には、永生を以て報ん。然れども争闘をなし、眞理に順はず、不義につく者には、報るに忿と、怒と、患難辛苦とを以てす。」又「罪の價は死なり、神の賜は我儕の主耶穌基督に於て賜はる永生なり」とあり。義さ神様は凡ての罪人を、現世のみならず、來世に於て嚴重に成敗なし給ふとてあれば。人は皆よく「我身の上を省みて、其犯せる罪を嘆き、之を悔む可き筈のものであ

る。罪を悔ひと一緒に大切なるは罪を改むるとである。即ち既往の悪い罪を改め、良らぬ友達を遠け、不都合な商賣を廢め、派手な裝飾を除き、淫猥な書物を焼き拂ひ、盃を打碎き、人に迷惑をかけたるとは力の及ぶ限り之を辨償し、其他一切の罪愆と關係を絶つて、眞面目に神様に従ふ事である。天は自ら助くる者を助く」といふ語の通り、人を救ふ者は固より唯神様であれど、救ふて救く人間の方からは亦、精々自分で奮發して其罪愆を改むる覺悟が何より大切である。基督も嘗て「ヨハネの時より今に至る迄人々勵みて天國を取んとす、勵みたる者は之を取り」と言ふて、斯る奮發心の大切なるを教へ給ふた。これは外國の話であるが、或時一人の大酒家（大酒家）が救世軍の集會に来て悔改め、今から全く堅氣な人間になりませうと決心はしたものの、扱これ迄酒屋の前を黙つて通ることの出来ない厄介な癖のついて居る人物として、油断をすれば會館から家迄歸る間にも、澤山ある酒屋の前を素通りすることが、六かしいてあらうと思ひ、其事を士官に相談すると。士官は暫く考へたる後、

其男と一緒に會館の門口に出立ち、向ふを指さして言ふ様、「御覽なさい、此館から貴君のお宅の前迄、ずつと此電信柱が續いて居るてせう。宜しいか。そこで貴君は此館を出ると、直ぐに一番近くの電信柱を目がけて一目散に駆けつけ、無事に届いたならばハレルヤと叫び。而して又、今度は第二の電信柱を目がけて駆けつけ、無事に届いたならばハレルヤと叫び。斯て第三、第四、第五と、順ぐりに駆けつけ、無事に届いたならば復ハレルヤと叫び。斯て第三、第四、第五と、順ぐりに電信柱を目がけては、祈禱をし乍ら次から次へと駆け付たならば。酒屋のとなど全く忘れて、大丈夫飲ずに家に歸れるであらう」と申聞けると、其人は感心し。正直に其通りを實行して、無事に我家に到着したるを手にて、以來酒癖に打勝つとが出来。神様の御助けと、自分の奮發と、二つが一つに合たる結果、間もなく立派に酒嫌の隊長になつたといふとである。基督の御言葉に又「若し右の眼爾を罪に陥さば抉出して之を棄よ、蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投入らるゝよりは勝れり。若し右の手爾を罪に陥さば之を断て棄よ、蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投入らるゝよりは勝れり」といふとがある。諸君は眼を抉き、手足を断る程の大決心を以て、

斷然其罪愆を悔改められねばならぬ。

第二、悔改と共に大切なるは、「救はる可き信仰」である。「救はるべき信仰」とは何んなものかと云ふに、これは天の父なる神様と、又救主基督とを信用して、身も靈魂も之にお任せ申すとを謂ふのである。即ち管に神様は獨一てお在てなるとか、基督は救主であるとか、いふ様な道理を認めるのみならず。進んで神様が耶穌基督の十字架の功德に由り、今、私の罪を赦し、私の靈魂を更生らせ給ふと信じ。既に斯くなる以上は、最早今日迄の自分勝手なる世渡を斷然やめて、神様の思召の儘に其身も心も献ぐるとをいふのである。それに就てブリス夫人の書かれたものの中に次の如き一節がある。「或時音樂館にて營みたる集會の後に、一人の婦人が私の處へ参り、「ブリス夫人よ、一體私は何處が間違つて居るのでせうか、何卒教へて下さい。私は貴女がお教へなさる通りのとを既に幾年となく信仰し、祈禱もすれば働いても居りますけれど、未だ一向救を受ける事が出来ず。矢張以前と同じ様に、罪の奴隷たる生涯を送つて居ります。これは何うしたら可のでありませうか」と、此様に質問致さ

れた。それを聞た時に、私は宛然天からの電光に撃たれた如くに覺えたのである。而して心の中に神様に祈りつゝ、「オ、主よ、此婦人こそは、正しく世の幾千幾百の同じ様な信者達の標本であります。斯る信者は如何に導く可きものか、何卒今私に示し給へ」と求めると。神様は其所禱に應へ、「救はるべき信仰」とは何であるかといふことを、私に現はし給ふた。即ち信仰とは委託するといふとである。身も靈魂も凡てのものを、悉く神様に引渡し、以來は神様に屬する男、又は女となつてしまふ程に、全く己を献ぐるとである。「救はるべき信仰」とは、全く自らを献げ、神様の眞實と又善良なることを信用し、現世のみならず來世まで、我一切を賭すとである。斯くて神様の聖旨をのみ眞實なりとし、大膽に我周圍の人々と全く反對の生涯を送り、又行動をなすとである云々。「今此ういふ眞の信仰を以て、基督の救を求めたる實例を左に掲げませう。これは英國であつた話であるが。或時一人の婦人が救世軍の集會に列り、色々證言や、警告を聞くうち、自分の罪深いとを悟り、何うしても一切を棄て神様に従はねばならぬと感じた故。會の終りに一人の女士官の

誘ふ儘に悔改の座に進み出るとは出たが、さて愈々基督に従ふとなれば、其爲めに身に落来る可き難儀苦勞の數々あるとが目に見えて、仲々容易に祈禱をする事が出来ず、暫し涙にかさくれて居つた。そこで女士官は怪み乍ら理由を質すと。婦人は答へて「私は此市の或學校の教師を勤むる者にて、家には宗教に反對の父があり、又近所には許婚の男子が居つて、之も同じく信仰の事を好みませぬ。其故若し今晚愈々私が救世軍で悔改めたといふとが知れるならば、無論父は私を放逐なさるであらうし。學校は私を解雇するであらうし、而して亦許婚の男子は必ず亦私を見棄るに相違ありませぬ」と言ひ乍ら、復も涙にかさくれて居つたが。稍あつて婦人は最後の決心をなしたるものと見え、靜かに其指から許婚の男子に貰つた指輪を外づして、之を其腕いて居る腰掛の上の、涙の湛つた中に浸し。やがて眞實から罪を悔改めて基督を信仰し、「今より一切を神様の御手に任せ奉るに就ては、今自分を罪より救ひ、以後は如何様とも宜しさに導き給へ」との、切なる祈禱を献げたのである。後にて聞ば、此婦人が斯く思ひ切つて基督に従ふたる結果は、果して輕薄なる許婚

の男子からは見棄てられたが、幸に學校の方は解雇せられずに濟んださうである。其後此婦人は神様の召を受けて救世軍の士官となつたが、今では英國で最も有力なる働きをして居るといふとである。人若し全世界を得るとも、其命を喪はゞ何の益あらんや、又人何を以て其命に代へんや。諸君は此婦人の手本に倣ひ、如何なる困難辛苦をも恐れず、如何なる犠牲をなすとも厭はず、罪を悔改めて基督にすがり、大膽に其御救を求められねばならぬ。基督は然らういふ誠實なる靈魂に、罪の赦と、更生の恵とを授け給ふ御方であるハレルヤ。未だこの實驗のない方は、今直ぐ其處に跪いて、第一に罪愆を悔改め、第二に基督を信仰して、其救をお受けなさるとを、切に御勸誘申上るわけである。神様が讀者諸君を残らず罪と滅亡の中より救ひ出し給はんとを祈る。

(註) 平民之福音「今は恩恵の時救の日なり」と云ふ條に、初めて悔改めて救を求むる人の祈禱の手本が出て居り。其通りの祈禱をして神様の恵を受けた人々が幾人もある。即ち次の如し。天の父様よ、私は爾の前に大罪人であります。さり

乍ら爾は罪惡を悔改めて基督の信仰する者を、お救ひなさる由を承はり、今私は心から私の罪を悔改め、又耶穌が唯今私をお救ひ下さるを信仰致します。何卒唯今私を罪惡から救ひ、新しい人間にして下されませアーメン」

(四) 道樂者への強異見

人は火を懐に抱きて其衣を焚れざらんや、人は熱き火を踏みて其足を焚れざらんや。(箴六〇廿七、廿八)

「放蕩は地獄にゆくの近路也」と申すところがある。人間が様々の不幸難儀に陥り、地獄の滅亡に到る途は多くあれ共、中にも一番の近路は放蕩するところである。道樂ほど速かに人を零落に墮すものはない。されば昔サムソンは驢馬の骨をふりまはして、一千人を仆したる勇士なれ共、婦人の慾に曳されて敵の捕虜となり。ダビデ王は又敬虔深き君子なりしかども、同じく色慾の爲めに凶殺の大罪を犯すとはなつた。舊い書物に「それ故に色といふ字は刀を書いて下に巴と書く。是は蛇が物を吞たる形にて我慢惡事の萌である。家の斷絶も多く色慾より起る。それ故糸通に色といふ字を書て絶ると讀ます。是にて色情の惡事たるをよく知らねばならぬ云々。」即ち「六兵衛がお釜を質に置くも、七兵衛が角屋敷を賣物に出すのも、皆此迷から起る」事にて。之が爲めに健康を害ひ、事業を誤り、信用を無くし、學問が荒み、親子相争ひ、

兄弟相闘ぎ、夫婦離別し、一家分散するといふ如き例は、世間に數多くあるとてある。加之放蕩する者の靈魂は神様の御怒に觸れ、死んだ先では地獄の刑罰を免れるとが出来ない。其故昔ソロモン王は、「汝の心を淫婦の道に傾くると勿れ。又之が徑に迷ふと勿れ。蓋彼は多くの人を傷けて仆せり。彼に殺されたる者ぞ多かる。其家は陰府の道にして死の室に下りゆく」と、戒められたとてある。道樂は斯く迄恐ろしい人間の禍である、又惡魔の陥穽である。然らば人は何故に斯る禍を好み、斯る陥穽には陥るのであらうか。熱々考へて見るに、同じ放蕩する人々の中にも、自ら四種の區別がある様に見える。

第一、交際上より遊興するもの、事。第一種の道樂者は其連が惡い爲に放蕩する者である。即ち交際上止を得ずして遊興するといふ人々である。賣卜先生糠俵といふ本に、乞食と問答の事を録し、「翁の曰く、如何さま乞食にも大抵てはならぬと聞く。深き傳授もあるや如何。乞食身上市して曰、格別ふかさ秘事口傳もおはしまさず、唯友を選むにあり。善友に交はりては中々非人にはならぬもの也。惡しき友

を友として酒を飲習ひ、虚言もつき習ひ、窮屈などを嫌ひ、夜遊を好き、小博奕を打覺え、第一親の言付を聽ぬ様にし、叔父叔母の異見を用ゐず。乞食にならねばならぬ様に身をもてば、終には乞食となるもの也。奉公人も同じ手段、最初は惡しき友に交り、先づ新地俵の字の味を覺え、蔭日向を第一にして小宿にては買喰仕習ひ、三絃も些くりばかり習ひ、次第に泥に泥がつき、上達するに従ふて主人番頭の日を抜覺え、請人に預けられても耻を耻と知らざれば、直さんとする心なく、宿の伯母までむごう欺し、後にはたゝすむ所さへ、何にもなしのてんつるてん。是ても乞食にならずんば天か時かと疑ふべし」とある。何と惡い友達の感化は、恐ろしいものではないか。岡山孤兒院の石井十次君が或時其孤兒を戒むる言葉に、「諸子は朋友に二種類あることを知つて居りますか。本統の朋友とは、月を二つ列べて書た見るからよく氣の合た友達である。併し乍ら世には又蜂の友達と書た蜂友といふものがある。譬へば蜜蜂が蜜のある間のみ花に来て、うまい汁の吸へる限は散々吸ひ取り、無くなるまで直ぐに次の花へ飛移る如く。一緒に酒でも飲み、惡いともして、暫く

目前の樂みのある間は仲好くし、少し都合が悪くなると直ぐに見棄て、何處へか行てしまふものである」と言はれた。世には此ういふ蜂友のみ多くて困るとである。併し乍ら私共は、諸君が斯る友達とは絶交して決して其爲めに身を誤らぬ様、注意せられんとを望まねばならぬ。何故かといふに、斯る友達は有つて甲斐なき者である。諸君を罪と禍とに墮しこそすれ、固よりまさかの時に聊さかも頼りにならぬ輩だからである。昔管仲、鮑叔の二人は非常の親友であつたけれども、私共は未だ此二人が共に散財して、彼んなに親しくなつたといふ話を聞いたことがない。又西洋にてはコブデン、ブライットの兩人が、殊に深い交りを経て居つたと申せど、それとて兩人が一緒に酒を飲んで、仲好になつたわけのものではない。或學者の語に「愛は潔からざれば深さと能はず」と申し。あぐらをかいて淫猥などを談し合ひ、又は一緒に道樂杯して、始めて親しい交際の出来る様な友達は。友達ではなくて自分の壽命を縮める仇敵、自分の品行を盗む盜賊、又自分の靈魂を滅亡に墮す惡魔である。古語に「晏平仲よく人と交る、久らして之を敬す」とやら。眞の朋友は親んで狎れ侮ら

ず、打ち解けてつきあへ共互に尊敬の念を失はず、眞面目にお話の出来る者でなくてはならぬ。聖書の中に眞友の鑑として録されたるは、ダビデとヨナタンとの間柄であるが。此二人の者は身分も大層違ひ、利害も全然反對する、切ない境涯に身を置きながら、それにも拘らず、互に手を握合て曠野の中に天の神様を拜み「願くばエホバ神、我等と我等の子孫の間に在せ」と祈禱して、最後迄其美はしい交際を續けたといふとである。此の如く神かけて潔き交りを選び、互に相敬ふて交際ばこそ、眞の頼甲斐ある友達は得られるものである。道樂をせねば相手にして呉れぬ様な友達は、此方からも相手にしてやらぬが可い。そんな友達は今日限り此方から絶交するに如くはない。酒を飲まず道樂をせず、淫猥がましい言を交へず、鹿茶一椀にてそれでも眞面目な話をして、あかずあかれぬ人を見立て、貴君の友達となされ。それこそ身の大事を打開ても差支なく、亦まさかの時の頼りになるべき人物である。皆様よ、諸君はどんなとがあつても、悪い友達に誘はれて悪い場所に足を運ぶ様なとがあつてはならぬ。

●第二、快樂を求めて放蕩する者の事。其次に又快樂を求めて悪い場所に入出入をする人々がある。一週間の勉強に疲れたから、浩然の氣を養ふ爲めに遊蕩に行くといふ學生があれは、仕事に忙しくて氣が屈したから、又は家にくすぶつて居ても面白くないから、鬱暗しの爲めに遊廓へくり込むといふ商人、職人などがある。固より人間は苦んで許り世を渡るべきものでないから、快樂を求めるといふとに就ては、私共とても別段異存のあらう筈はない。私共救世軍人は樂んで此世を渡るべきことを主張する者である。乃ち「Keep Smiling」にこくして日を送れ」とは、救世軍の標語の一つである。然ういふわけ故、私共は世の中の快樂を求め人々に同情する。然り乍ら放蕩は果して人間に眞の快樂を與へるものであるか、遊廓は果して眞の慰藉を求むべき場所であるかといふに、決して然ういふことはない。歌に「足元の輕さ重さは吉原へゆく提灯の歸るつりがね。」後先の考へもなく浮々と悪い場所へ足を運び、無宙で遊んだ其歸途の足の重いと如何許であるか。ア、馬鹿などをした。歸つてから主人に何んと挨拶しやう。親兄弟、朋輩には何んと申譯をしたものであらう。

月末のやり繰算段は又何ういふ風にしたら可てあらうか」と。それでも諸君は道樂が楽しいものだとも考へになるか。歌に又「麥飯に糠味、噲汁は諺に傾城買の守本尊」やみくもに登る心の有頂天、つひに天竺浪人となる。「道樂者の身の行末は皆此通りである。即ち身代をつぶし、事業を誤り、零落して路頭に迷ひ、果は泥棒して懲役に行くか、又は無理情死でもする位が其落である。其故に遊廓は苦勞難儀の賣捌所である、心配と困窮のよろし問屋である。決して人に喜び樂みなど、與へる場所ではないことを知らねばならぬ。眞の快樂は善いことを行ふ中にある。善を爲すと最も樂し」とは、今も昔に變らぬ眞理ではないが、即ち神様を敬ふて救の恵をうけ、我日常の本分を忠實に盡し、時間の都合さへつけば、救世軍の集會にても足を運び、善いことを聞き、善いことを行ひ、神様の御爲め、又人の爲めに、身に適ふ丈の働をして御覽なされ。「爾曹耶穌を見され共これを受し、今見ずと雖も信じて喜ぶ、其快樂は言難く、且榮あり。信仰上の快樂、愉快といふものは、又格別である。而して時節を待つて信仰の篤い堅氣な婦人を娶り、清い家庭をお調へなされ。清い家庭はよ

しや貧くとも、其中に眞の幸福が宿るものである。歌に「樂みは夕顔棚の下涼み、男はてら女はふたのして」とは、此有様をいふたものではないか。或時波斯の王様が英國に御滞在在中、折柄有名なる政治家グラッドストーン氏が金婚式を挙げたので、王様は其清く床しい家庭の様子を見聞して羨ましさには堪らず、申さるゝ様「ア、朕は一生の間に五十人の妻を持ち、グラッドストーン氏は五十年の間、唯一人の妻を守られたが、眞の幸福は朕の方にはなくて、却つてグラッドストーン氏の方にある」と此様に言れたさうである。芭蕉翁の句に又「鮫汁や鯛もあるのに無分別」と申し、放蕩淫亂の樂みは、譬へば鮫汁の如きもので、其當座はうまい様でも直ぐに後腹が苦り、果は貴重なる命をさへ奪らるゝ恐がある。併し乍ら堅氣で清い世渡は、鯛の眼球の吸物と同じく、うまい上に中毒の恐がなく、而して又身の滋養となるものである。其故私共は世の中の快樂を求めて悪い場所に入出入をする人々が、速に其迷の夢から醒めて蘇つて眞の信仰に入り、又清き家庭の樂みを求むる者となられんことを切に勧誘する者である。「汝己の水溜より水を飲み、己の泉より流るゝ水を飲め。

汝の流を外に溢れしめ、汝の河の水を衝に流れしむ可けんや。之を己に歸せしめ、他人をして汝と偕に之に興らしむる勿れ。汝の泉に福祉を受しめ、汝の少き時の妻を樂め。彼は愛しき鹿の如く、美しき鹿の如し。其乳を以て常に足れりとし、其愛を以て常に喜べ」と。これはソロモン王の箴言の一節である。

第三、人情を知る爲めに道樂する者の事。第三種の道樂者は又世間を知り人情を學ぶ爲めに、遊廓に行くといふ者共である。又は男と生れて遊廓の様子を知らない様では、人中に顔が出せぬなどいふ言草の下に、ふざけた真似をする連中である。久しき以前四國の某市に一人の青年があり、他の青年輩と一緒に廢娼論を唱へ、雑誌を發行し、演說會を催はし、一時其地方を動かして居つたが。此人が間もなく中國邊の或新聞の記者に聘せられて後、何うも遊廓の事情に通ぜぬては、小説が作り難いとやら、又は雜報が書き難いとやら申し。然ういふ場所へ視察に行く間頭惡魔に魅入られ、大變な道樂者となり、義理ある養家の身代を費ひ果し、其が爲に操正しい細君は、兒供を擁へて自活の途を求めねばならぬ様なとなり、夫に別れて或裁縫

學校に入り、後小學校の雇教師となつて、其兒供を養育して居るのに出會ふたことがある。所謂ミイラ取がミイラになるとは此事ではないか。主の祈に「我儕を試練に遇せず、惡より救ひ出し給へ」と、教へてあり。故意に劍呑な場所に近寄り、其身を誤る如きことは、眞に愚の至と謂ねばならぬ。或人の句に「知いても耻にはならず、鯁の味。」私共は遊廓の様子を知ぬ爲めに野暮といはるゝならば、寧ろ野暮といはれた方が可と思ふ。無理に通人になつて、體と靈魂とを地獄に墮すには當らぬことである。否々、よくよく物の道理を考へて見れば、世間で通人だなどいはるゝ人間ほど、世にもわけの分らぬ不通人はない。親には心配をかけ、妻子には難儀をさせ、朋輩や親類には飛んだ迷惑を及ぼし、自分には又心も身も事業をも害ひ乍ら、後先見ずの道樂をするといふ、此んな道理に通ぜぬ不通人、義理人情のわからぬ不通人といふがあるべきものか。其故昔瀬川といふ娼妓は、厭に通人を氣取る標客に向ひ「何んぼう、そんなにお氣取なされても駄目なことであります。一體本統の通人といふ者は、吉原の大門から内には入つて來ない者であります」と、此様に言た

さうである。歌に「大方の粹がる者は不粹もの、粹でないのが人のさつ粹。」又古語に「粹が不粹」とも「粹が身を亡ぼす」とも、いふてあるのは此事である。されば皆様よ、若し諸君が眞に世間を知り、人情に通じ度とならば、眞面目で聖い世渡をするに如くはない。而してもつと親子、兄弟、夫婦の眞の情愛を味ひ、進んでは忠實に我日毎の本分を盡しつゝ、活た社會の出來事の中に自分を揉れて御覽なされ。使徒パウロといふ人の言に「我貧賤に居るの道を知り、又富厚に居るの道を知り、飽くとも、飢るとも、豊むとも、乏しきとも、諸々の事に於て我之を熟練せり。我は我に力を予ふる基督に由て、諸々の事を爲し得るなり」といふてある。即ちパウロは聖く義しく身を持って、眞面目に信仰の生涯を辿る間に、よく世の中の酸い辛いを噛分け、又人情の底を見究めたと告白したる者である。私共は諸君が亦此パウロと同じ様に、人間の大道を履んで行く間に、眞の人情世態を辨へた人となられんとを願ふ。吳々も懐の金にちやほや言れて馬鹿の限りを盡し、金がなくなつたら、其處に居るかとも言ふて呉れぬ賣女の類にのぼせ上り。義理人情を忘れ、神様の聖

旨を痛めて、放蕩三昧の行爲をなすつゝ、それで世間を知つたの、人情をかみ分け
たのと思ふ如き、不了簡な真似をしてはならぬ。

第四、情慾に馳られて放蕩するもの、事。最後に今一種類の道樂者は、其燃るが如
き情慾を抑へ切らずして其爲めに放蕩する者である。意馬心猿の狂ふが儘に、理も非
も無しに唯道樂をする人々である。歌に「八十になつても色と慾のみち、火は見えね
ども煙たつなり。」此情慾ばかりは年寄になつてさへ、仲々制し切れぬものだといふ。
況して孔子が「少き時は血氣未だ定まらず之を戒むる色にあり」と言れたる、其年
若い人々に於ては尙更のとてある。歌に又「若き身は殊に慎め皆人の、ふみ迷ふの
は戀の山道」とは、如何にも尤も千萬なる忠告である。或時一人の醫學生が放蕩の
結果、モルヒネを服んで自殺した時の辭世に、「かくすればかくなるものと知りなが
ら、止むに止まれぬ腐れ魂」と書いてあつた。之を彼の長州の志士吉田松陰が泉岳
寺の門前を過ぎて、「かくすればかくなるものと知りながら、止むに止まれぬ日本
魂」と歌ふたのに比ぶれば、それこそ雪と墨と言はふか、月と籠と申さうか、何と

も早や大層な相違である。然り乍ら實際世の中には前の醫學生同様、止むに止まれ
ぬ腐れ魂に驅られて、親に勘當されると知りながら放蕩し、主人に相濟ぬと承知し
乍ら道樂をし、仕事が荒む、妻子に難儀をさする、其身を亡ぼす本だと心付ながら
も、不品行不身持をする者共が至つて多い。現に前に述べたる三種類の道樂者と雖
も、或は交際の爲め、或は快樂の爲め、又は人情を知る爲めなど、口には言ふ
て居れど、其實際は矢張胸に燃え焦る、情慾の制し切れない爲め、即ち其止むに止ま
れぬ腐れ魂故に、放蕩して居る者が百人の中の九十九人である。然らば私共は何ん
なにして斯る念入の放蕩病を根治するところが出来るかといふに、これには頭と心と兩
方からの藥を用ゆるのが大切である。然らば頭への藥とは何かといふに、それは道
樂が神様の前に罪だといふ道理を、よくよく其脳髓にしみ込ませしむるとである。
心への藥とは何かといふに、それは神様の御助に由つて、其靈魂を更生させ、情
慾に打勝つ力を授けらるゝとてある。今少しく其説明を致したいと思ふ。

(一) 兎角我日本人は、道樂が罪だといふ道理を知らず、却つて之を風流なる戯れ

事の様(こと)に心得(こころえ)て居(を)る者(もの)が多い。其故(そのゆゑ)に女房(にようぼう)と疊(たひか)は新しいが好(よ)いなどいふ大馬鹿者(だいばかもの)があれば、妾(めかけ)を置くのは男(をとこ)の腕前(うでまえ)だ、飛(と)んだ漫言(たはごと)を言(い)ふて居(を)る痴漢(しんま)さへもある。併(しか)し乍(な)ら之(これ)は申(まを)す迄(まで)なく大變(たいへん)な大間違(おほまちがひ)である。放蕩(ほうたう)は天(てん)の神様(かみさま)の前に、此上(このうへ)もなく恐(おそ)ろしい罪惡(ざいあく)である。神様(かみさま)は一人(ひとり)の夫(むと)に一人(ひとり)の婦(むすめ)が連添(つれそ)ふ所謂(いはゆる)一夫(いつぶ)一婦(いつむ)といふとを、人間社(にんげんしゃ)會(かい)の土臺(どだい)となし給(たま)ふて居(を)る。之(これ)は各(かく)國(こく)とも生(う)まれて來(き)る男女(なんにょ)の數(かず)が、いつても大抵(たいてい)同數(どうすう)であるところから考(かん)へても。又(また)は人間(にんげん)の眞(まこと)の情愛(じやうあい)が、唯(ただ)一夫(いつぶ)一婦(いつむ)の間に於(お)いてのみ保(たも)たるべき道理(だうり)から考(かん)へても。或(ある)は聖書(せいしょ)の嚴重(げんじゆう)なる教訓(きょうくん)に照(てら)して判斷(はんぜん)しても、明白(びやく)にして決(けつ)して疑(うたが)ふとの出來(で)ない眞理(しんり)である。神代(かみよ)から紙籙(かみひやく)二人(ふたり)、三人(さんにん)見(み)ず。其故(そのゆゑ)に正式(せいし)に結婚(けつこん)して夫婦(ふうふ)となりたる一男(いちなん)一女(いちにょ)の外(ほか)に、何(なん)んなどがあつても、決(けつ)して怪(あや)しい男女(なんにょ)の關係(くわんけい)をつくつてはならぬ。不義(ふぎ)密通(みつつう)は罪(つみ)である。遊女(いうづよ)狂(くる)ひ、藝者(げいしや)買(か)ひ、又(また)は妾(めかけ)を置く杯(むす)いふのは固(もと)より大(おほ)なる罪(つみ)である。金錢(ぜに)故(ゆゑ)に操(あそ)ぶ穢(けが)し、又(また)は穢(けが)さす者(もの)は罪人(つみびと)である。姦淫(かんいん)の故(ゆゑ)ならて夫婦(ふうふ)別(わか)れをする者(もの)も亦(また)、容(ゆる)し難(がた)い罪人(つみびと)である。それ(これ)に就(つ)いて或(ある)人の言(ことば)に、「姦淫(かんいん)は泥棒(どろぼう)、凶殺(ひとごころし)と同じく、或(ある)は其(その)よりも一層(いつそう)大(おほ)なる罪惡(ざいあく)である。

そのわけは金(かね)や品物(しなもの)は盜(ぬす)まれても尙(なほ)其(その)取返(とりかへ)しがつけど、一旦(いつたん)奪(うば)はれたる清(きよ)き操(あそ)は、何(なん)うしても之(これ)を恢復(くわいふく)するところが出來(で)ない。國(くに)の法律(はふりつ)は人(ひと)の家(いへ)に入(い)つて貨(たから)を盜(ぬす)む泥棒(どろぼう)のみに罰(ばつ)して、人(ひと)の妻(つま)や、娘(むすめ) 又(また)は姉妹(あいらい)の愛情(あいじやう)を盜(ぬす)む大盜賊(おほどろぼう)を、其(その)儘(まま)に見通(みとお)す場合(ばあひ)がある。併(しか)し乍(な)ら神様(かみさま)の御政治(みんせいぢ)も同様(どうじやう)だと思(おも)ふ者(もの)があらば、それは大(おほ)なる心得違(こころえまちがひ)である。或(ある)は爰(こゝ)に一人(ひとり)の男(をとこ)が居(を)つて或(ある)婦人(ふじん)を河(か)の中(なか)に突落(つまた)し、溺死(どくし)させたとするならば、法律(はふりつ)は無(む)論(ろん)其(その)男(をとこ)を殺(ころ)す人(ひと)犯(はん)として嚴重(げんじゆう)に處分(しよぶん)するであらう。併(しか)し乍(な)ら巧(たく)みに婦人(ふじん)の愛情(あいじやう)を弄(もよほ)び、なぐさんだ上(うへ)に之(これ)を見棄(みす)て精(せい)神(しん)的(てき)に殺害(せつがい)し、生(い)きながら死(し)るが如(ごと)き難儀(なんぎ)に遭(あ)せ、之(これ)を黜殺(ちよくせつ)にする者(もの)の罪(つみ)は、更(さら)に幾層(いくそう)倍(ばい)も重(おも)いことを知(し)ねばならぬ」といふてある。姦淫(かんいん)の罪(つみ)は此(かく)の如(ごと)く、神様(かみさま)の前に泥棒(どろぼう)凶殺(ひとごころし)と同様(どうじやう)で、或(ある)は其(その)にも愈(ますます)つて重(おも)い惡事(あくじ)である。其故(そのゆゑ)に昔(むかし)ヨセフは、主人(しゅじん)の妻(つま)から淫猥(いんわ)らしいと持(も)ちかけられ、之(これ)を拒(こ)めばひどい目(め)に遭(あ)はさるゝとを、よく承知(しょうち)し乍(な)ら、さつぱり斷(こと)つて、「我(われ)いかで此(この)大(おほ)なる惡(あく)を爲(な)して、罪(つみ)を神(かみ)に犯(まか)すべけんや」と申(まを)した。此(この)ヨセフが後(のち)に埃及(エジプト)一國(いっこく)の大宰相(だいさいしやう)と迄(まで)立身(たてみ)したる者(もの)である。それ故(ゆゑ)に諸君(しよきん)が放蕩(ほうたう)は立身(たてみ)出世(しゅつせ)の障(さまた)りであるとか、

又は名譽を墜す種であるとか、或は金錢を無くする本である、坏いふて居らるゝ間は、未だ仲々本統に堅氣な人間になるとが出来ない。けれ共若し一旦道樂は神様の前に泥棒、凶殺同様の罪惡である、體と靈魂とを永遠の滅亡に墮す大罪であるといふ道理を辨へられたならば。最早二度と再び其様な惡事を行ふことは出来ぬと、大に目が醒めて來ねばならぬ筈である。私は也 互 日本人の頭の中に、もつと此放蕩は天畏ろしい犯罪である、又人非人の所爲であるといふ思想を、刻み附たいと切に希ふ者である。

(二) 今一つ大事なるは人々が其穢れたる罪を悔改め、基督を信仰して罪を赦され、更生りたる人間となつて、情慾に打勝つ力を神様から授けらるゝとである。人が眞面目に基督にすがるときに、神様は其人の靈魂を更生らせ給ふ。腐れ魂は澄々したる清き靈魂と變り、以來凡て不義不潔の行爲を心から嫌ふて、清く堅氣な世渡を眞實に慕ふ様になる。基督は何んな極惡人をも救ふ力を有て居給ふ御方である。又神様は人をして堪難き情慾にも打勝せ給ふ者であるハレルヤ。基督のお弟子の一人にマ

グダラのマリアとて、最も篤信なる婦人があり、基督の蘇り給ふた時には最初に其御姿を拜み、之を他の弟子達に告知する御命令をさへ受けた者であるが、此婦人は其以前「七つの惡鬼につかれたる」墮落婦人であつたといへば、これは如何に神様が罪に穢れたる者を更生らせ、全く別人間となし給ふかといふ最も良い實例の一つである。又オーガスチンといふ人は若い時大變に放蕩をなし、妾に子迄拵へた道樂者であつたが、それが悔改めて妾に出來た子と一緒に基督の救を受けて以來は、全く變つて宗教上に稀なる善き働をする程の人物となつたのである。今から十數年前一夜不品行に身を持ち崩したる一青年が、救世軍の集會に來て涙ながらに其罪を悔い、基督の救を求めたとがあり。其翌日は斷然放蕩の行を止めたるしに、これまで關係したる婦人からの手紙三十幾本と、其他放蕩の紀念物品數點、及び其朝婦人から來た許で、未だ封を切らぬ手紙さへ持つて來て、私の手に渡したのである。同人が其時の懺悔談に、「今日迄私が道樂をして居つた有様を譬へて言へば、宛然微温い風呂に入つて居つた様で、此儘長居をすべし筈ではないと萬々承知して居りながら、

扱思ひ切て出てしまふには何となく心残りがある様に覺え、つひ愚頭々々し乍ら今日に至つたのを。幸に今は基督に救はれて、斷然堅氣になるとが出来ました」とのとてあつた。此人は其以來神様の御爲め、又人の爲めに有益なる働きをする人物となつて居るのである。又十數年前或日一人の紳士が私の處へ尋ねて來られ、「私は己に克つとが出来なくて困りまするが、何うしたら可てせうか」といふことであるから。「一躰貴君が克ち難い己といはれるのは、何ういふ種類のものでありますか」と問ふと、「それは婦人の慾に打克つとが出来ないのであります」との返事に。すなはち諄々として基督の救の事を話し、一緒に神様に祈禱をして別れたのであるが。それから數ヶ月の後、何んでも帝國ホテルにて東京の實業家の新年宴會があつた様子で。其席上一人の紳士が起ち上り、實業家に堅固なる品性の必要なることを説て。「附ては今年中、東京實業家の宴會には一切藝妓などいふ醜業婦を招かぬことに致したい」といふ様なことを演説したといふとて。其紳士の名前を聞けば、それこそ數ヶ月前、私の處へ、己に克つ工夫を問ひに來られた其人である故。私は今更基督

の救が、人を變化する力の廣大なるに驚き、心から神様を讃めたゝへたのであつた。此の如く頭には道樂の罪たる道理を辨へ、心には又其情慾に打勝つ力を授けらるゝ者は。よく堅氣な人間になり得る許か、以來何んな強い誘惑に過ふても、美事其等に打勝つて、清く、正しく、有益にして、又幸福なる生涯を續けるとが出来ものである。而してつまりは耶穌基督が「凡て婦を見て色情を起す者は、心の中に姦淫したる也」と仰せられたる、其心の中の姦淫罪をさへも絶て犯さぬ程、高潔なる人物となることが出来る者である。榮を神様に歸し奉つれ。

(五) 如何に救を持續すべきか

我爾に彼等を世より取りたまへと祈らず、唯彼等を守りて惡に陥らす勿れと祈る。(約十七〇十五)

耶穌基督の救は、根本的の救である。人の罪を赦すのみならず、亦其靈魂を更生らするものである。何んな極惡非道の人と雖も、又は罪の鎖に繋がれたる者と雖も、若し眞實から悔改めて基督を信仰するに於ては、必らず全然以前と異ふ新しき人間となることが出来る。救世軍の軍歌に

- 一 始めは人が酒をのみ 終りは酒が人をのみ
- 二 淫らがましき行は 耶穌基督にたよるべし。
- 三 ちやうよはんよの争に 堅氣のわざは手につかず
- 眞の神をうやまひて 正しき人となれよかし。

神の子耶穌にしたがひて うまれかはりし人となれ。

地獄におつる近みちぞ

堅氣のわざは手につかず

正しき人となれよかし。

四 罪人よきけ基督は 極惡非道の人をさへ

救ふ眞のすくひぬし 來りて耶穌によりたのめ。

とあるのは、其辭こそ露骨て無風流にもあれ、其意味は眞實間違のなき眞理である。然り乍ら救を受けるのと、又之を持續けるのとは、自ら別問題である。多くの人は救の恵を受けて道樂をやめ、酒を禁じ、喧嘩をしなくなり、虚言偽りを言なくなつて、一時は随分熱心に基督に従ふて居る様であれど、其うち何時しか神様に遠かり、今一度罪愆の生涯に逆戻りをするところがある。聖書に「惡鬼人より出て早きたる地を巡り、安息を求むれ共得ずして曰けるは、我出し家に歸らん。既に來りしに掃清まり飾れるを見、遂に往て己よりも惡き七つの惡鬼を携へ、偕に入て此に住へば、其人の後の有様は前よりも更に惡かるべし。此惡き世も亦此の如くならん」とあり。一旦救はれたる人々が今一度罪愆に墮落する段には、往々一の惡鬼が出て行た後へ、今度は七つの惡鬼を連れて歸つて來るといふ如き、以前よりも餘程ひどい落ぶれかたをするものである。それ故私共は一旦受たる救を持續けて、何んな

とがあつても之を取喪はぬ様心がけねばならぬ。これは私共の爲めに血汐を流し給ふたる基督に對して、是非然らざる可き筈のことである。又自分が有用、幸福の生涯を送り、死んだ先では臆する所なく、神様の御前に歸つて行かるゝ爲めに、何の道から言ふても極めて大切のとてである。然らば私共は如何にして一旦授けられたる救を、最後迄持續けるとが出来てあらうか。

●第一、先づ大切なるは神様に祈禱をする事である。何んでも打明けて神様に御相談申し上げ、其思召を伺ひ、又其助を受けて世渡をするのが何より肝要の事である。或人の語に「祈禱を以て朝の戸を開き、祈禱を以て晩の戸を閉めよ。」といふてある。此の如く私共は朝起ると直ぐに祈禱して、其日の仕事に取かゝり、夜息む時には又一日の御守護を感謝し、尙明る朝迄無事に支へ給はんことを願ふて、寢床に入らねばならぬ。我安然にして臥又眠らん、眞神よ我を獨にて坦然に居しむる者は汝なり。或學者は又祈禱を車井の釣瓶に喩へ、「祈禱といふ釣瓶が上に昇る時、神様の恩恵といふ釣瓶が下に降る」と申ししたが、如何にも然らういふわけのものである。殊に

救はるゝ以前に、酒だの、博奕だの、道樂だの、短氣だの、懶惰だのといふ様な悪い癖のあつた人にて、それが兎角今一度頭を擧げ様とする如き場合には、何はさて措き先づ神様に祈禱をし、「神様よ何卒今私を助け、此悪い癖に打ち勝せたまへ」と、願へば神様は必ず諸君の祈禱を聴き、其都度諸君を助けて、充分情慾を抑へ又悪魔に打勝つ力を授け給ふものである。求めよ然ば與へられ、尋ねよ然ば遇ひ、門を叩けよ然ば開かるゝとを得ん。又「凡そ祈禱の時其求ふ所のものは、必ず得べしと信ぜば必ず得べし」とは、是眞の神様が私共の祈禱を聴給ふとに就ての、貴き御約束の言葉である。

●第二、其次に大切なるは聖書を讀むとてである。聖書は聖靈の劍と申し、昔の武士が兩刀を重じて、暫くも身から離さなかつた如く、私共基督の軍人が常住不斷傍から離してはならぬ武器である。私共は聖書の御語をふりかざして世の罪愆と戦ひ、悪魔に嚮ひ、又己が私心私慾を鎮めて、神様の聖旨を行ふべき者である。聖書は又神様が人間に賜はりたる約束の書にて、其中には私共が罪に惱む時、心配苦勞のある

時、病氣の時、貧乏した時、人から迫めらるゝ時、災難に遭ふ時、力足らざる時、誘惑に遇ふ時、人の救の爲めに苦心する時、老先き短かくなりたる時、死に臨みたる時、其他榮枯盛衰、喜怒哀樂、大凡如何なる時、如何なる場合にも、必らず其折に適當したる恩恵と、助力とを賜はるとの御約束を一ばい書き載せてある。或時一人の西洋婦人の聖書に、所々「I」と書込んであるのを見て、これは如何なる符徴でありますかと尋ねると、婦人は答へて、これは「Tried and Proven」の頭文字即ち「やつて見た」の「や」の字と「たしかだ」の「た」の字でありますといふたさうである。其如く私共も亦聖書にある神様の御約束を眞にうけ、之を實際に履み行ふて、果して其御語の確實なるを我身に經驗せねばならぬ。人はパンのみにて生くる者に非ず、唯神の口より出づる凡ての言に由る」と録してある。私共は毎に三度の食事を供給ふ必要のある如く、亦靈魂の爲めに少くとも一日に一度位、聖書を讀んで之を養ふとを努めねばならぬ。

第三、次に大切なるは集會に出席するである。一箇の炭火は直ぐに熄ゆれ共、多

く集むれば段々火氣が強くなつて、終には傍にある物を何んでも燬てしまふ程になる。丁度其如く私共の信仰も、孤立して居つてはいぢけて力が無なれども、多人數集つて互に勵まし、勵まざるゝ時には、盛んに火の手を擧るとが出来るものである。其故希伯來書には、「我儕互に顧みて愛心と善行とを激勵し、集會を輟る或人に傲ふとなく、共に相勸め、其日いよく近よるを見て益々此の如くなすべし」と教へる。基督は又「若し爾曹の中二人のもの地に於て心を合せ、何事にても求めば、天に在す我父は彼等の爲に之を成たまふべし。蓋我名の爲に二三人集まれる處には我も其中に在ばなり」と、仰せられて居る。ピリイ、ブレイといふ人は、或時集會に出るとを厭がる人々を戒て、「それでも地獄に行くよりは、集會に行く方が良いではないか」と申したことがある。受けたる救を終り迄持續け度と願ふ人は、集會を重んじ、少くとも一週二回以上、都合して之に出席する様に心がけねばならぬ。

第四、其次に大切なるは信仰上の友を擇ぶとである。即ち以前の悪い交際を一切絶ち切り、新に聖き信仰上の友達を求むる心がけが肝要である。「交りは紫蘇の染たる

小梅かな。「又一人は善悪は友による」などい申し。私共は否でも應ても其交際友人に化せらるゝもの故、救を維持するためには、是非共よく救はれたる献身的の人物を擇び、之と交はらねばならぬ。聖書に又、「悪き交りは善き行を害ふなり」と教へてある。

第五、其次に、大切なるは受けたる救を包まず告白するところである。即ち自分は基督に救れて以來、罪の世渡を止めたる者であるを、逸早く其家族、知人、朋輩の間又は世間に發表してしまふとが必要である。基督の御言に「凡そ人の前に我を識ると言はん者を、我も亦天に在す我父の前に之を識ると言はん。人の前に我を識らずと言はん者を、我も亦天に在す我父の前に之を識らずと言ふべし」とある。信仰を告白するとは、即ち此世の罪惡に對して背水の陣を布く様なものにて、最早どんなことがあつても惡魔の領分に後戻はせぬ、何が何でも只管信仰の生涯に進むものであるとの、旗色を明かにする所以である。

第六、次に大切なるは人を救ふ爲めに働くところである。人を救ふ爲めに盡力するのは

即ち自分の救を全うする所以である。其に就て面白い話がある。或時一人の旅客が雪の深い山の中を旅行して、身軀は疲れる、手足は凍える、最早一步も進み難く、殆んど其場に倒れさうになつた。併し乍ら雪の中に倒れる程劔呑などはないので、若し其儘寢入込んだ日には、大抵其切り凍死ぬるものださうである。折柄旅客は忽ち足元に何か黒い物が横はつて居るのに氣がつき、目をとめて見ると是はとも如何、自分より先に行つた一人の旅客が、同じく歩行に悩んで終に雪中に倒れて居るのであつた。之は棄て置くべきに非ずと擁き起して介抱し、其軀を擦つては又擦り、更に擦つて漸く躰に温りの出て來た頃には、不思議や自分までも大層元氣附て。つゞり人を救ふた代りに、自分も一命を拾ふたといふとである。今私共が他人の靈魂を救ふ爲めに働くとも亦此の如く、其爲めに祈禱をし、警告をし、其家を訪ね、之を集會に誘ひ、之に「ときこのころ」や其他の書物など讀せ、之を愛し、之に親切を盡すなどいふのは。即ち其儘自分の信仰を養ひ、愛心を増し、人格を築き上げる、最上の修鍊になるのである。其故人を救ふことは即ち自らを救ふ所以である。又自分が救

はれた故に進んで他人を救ふ爲に働くといふのは、これ實に基督の宗教の大精神である

第七、今一つ大切なるは疑はず惑はず信仰を神様に置くことである。私共は世の中の毀譽褒貶や、境遇の順逆、また我感情の浮沈などに頓着なく。唯天の父なる神様が自分を助け、守り導いてお出なさるとを堅く信じて、眞一文字に信仰の生涯を迎る様でなくてはならぬ。基督の御言に、「身を殺して靈魂を救すと能はざる者を懼る、勿れ。唯爾曹魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ。二羽の雀は一錢にて售るに非ずや、然るに爾曹の父の許なくば其一羽も地に墮ると有らじ。爾曹の頭の髪また皆數へらる。故に懼る、勿れ爾曹は多くの雀よりも優れり」とあり。一羽五厘で賣る雀さへも、神様の御許がなければ人手にはかゝらぬものを、況して基督に救はれて清く正しき世渡をする人間に、神様の御守護のなからう筈がない。眞神の使者は、眞神を畏る者の周圍に營を列ねて之を援く。「私共は心強く覺えつゝ進み行かねばならぬ。昔預言者エリシヤは何の備もなきに、忽ち數萬人のスリヤ勢から取圍まれたが、

神様に依頼して少しも騒がず、靜かに其御助を祈り、聽て傍に居る若者に向ひ「懼る、勿れ、我等と偕に在る者は彼等と偕に在る者よりも多し」といふたが。果して神様は不思議なる手段を以てスリヤ勢の圍を解き、彼等をして手を空うして歸らしめ給ふたといふとがある。或人が宗教改革者マルチン、ルーテルに向ひ、「御覽なされ、今や余世界は皆貴君に反對して居るではないか」と言ふと。ルーテルは答へて、「イヤ何、私が全世界に反對して居るのである」と言たさうである。ルーテルがかく迄大膽不敵に信ずる所を守つて立つとの出来たわけは、全く全能全智の神様を頼りとして居たからである。ジョージ、ワシントンには又非常に信仰の篤い人にて、いつも不思議に神様の御守護を受けて居つたが。其頃或土人の言に「何うも彼ワシントンといふ人許は、彈丸では死ぬ人と見える。私は充分ならひを定め、ライフル銃にて十七度迄うつたけれ共、終に之を倒すとが出来なかつた」と申した。それと前後してワシントンが其兄に贈りたる手紙の中には「兄上よ、私は不思議なる神様の御攝理の中に今日迄生存へて居ります。私の外套には四個の彈丸がとまつて居り、私の乗馬

は二頭進みも休まされ、周囲には多くの死人怪我人がある中に私は些かの手傷だも負ず、無事な働の居女をまき、と認めてある。若し神我傳を守らば誰か我儕に敵世なや。私共は世界を掌中握る神様が、自分に附添ても出なるとを知らず、慍せず救済される者として、の生涯を終り迄立て貫く様でなくてはならぬ。...

(六) 貧民の福音

貧乏人ほど世の中につらいものはない。昔の謎に此ういふのがある。「貧乏人とかけて何と解く。五合徳利と解く。其意は一升つまらぬ。又「大病人とかけて何と解く。貧乏人の嫁入と解く。其意は長持がない。」又「破炬燵とかけて何と解く。貧乏人の葬式と解く。其意は後で法事が出来ない。」云々。貧乏人は人から馬鹿にされる、世間の交際がし難い、病氣に罹つても充分なる手當が届かず、兒供に勉強させ度ても其本の仕送が出来ない。世の人は財布の輕き重き其人の價值を定め、月給の多寡、又は收入の大小で人品の高下を量る、其故に金多ければ、馬鹿でも、惡黨でも、旦那様奥様と立てられ、金かばければ何んを穿い人を羨し、空腹の目をせねばならぬ。是に於て多くの貧乏人は只管世の金満袋を羨し、其身必不仕合をかき、...

とは、此ういふ人々の心の中を穿つた語ではないか。否々其位なら未だしも、古語に「小人窮すればこゝに濫す」といふてある如く、中には貧故に人の物を竊んで懲役にやらるゝ者あり、又は貧故に失望落膽して、我と我壽命を縮める者さへある。昔權助といふ男が僅かの金につまつて首を縊つた時の辭世に、「死んだなら僅か一分といふぢやろが、生きて居つたら百も貸すまい」と、書いてあつたといふ話がある。此の如く貧乏人の身の上は、誠に人間世界の最もつらい、悲しいものである。果して然らば斯る貧乏人が仕合になる工夫はないか。眞の神様は斯る貧乏人の難儀を救ふ方法を立てお出はなさらぬであらうか。これは私共に取て最も大切なる問題である。

世間には貧乏人に金さへ呉れば、直ぐに其人が救へる様に思ふ人々がある。併し乍らこれは淺はかなる考へてある。何ぼう貧乏人に金を呉れても、若し其胸の中に充分獨立獨歩の精神を吹き込み、勉強して其家業を勤め、儉約して其家政を整へ、我と我身を立てる心を奮ひ起させずば、決して本統に其人を仕合なる人間とする

が出来たものではない。却つて「焼石に水」といふ諺もある通り、金銭づくの助けは其場限りで消てしまひ、直ぐに復後から之を見つぐ必要が起る様なことが多い。或る書物に「西班牙の人は精出して稼ぐとが嫌で、根氣好く働くとの出来ない人民である。即ち懶惰半分と高慢半分とにて勞働を嫌ひ、仕事をするには赤い顔ですれ共、其くせ乞食をするには何んとも思はない」といふてある。私は西班牙人の氣風が果して然うであるか、何うだか知らない。併し乍ら世には丁度此語の如く、仕事をそののが嫌ひで、恥かしくて、其くせ人の世話になり、又は施與を受けるとを何んとも思はぬ人々が少なくない。或時一人の乞食が或商家の店頭に立つて、頻りにお辭義をして居り、見れば其胸には「難儀な啞者に何ぞやつて下され」と書た板片をぶら下げて居つた。折柄其家の輕忽しい丁稚が茶椀の湯を外へ棄るといふて、つひ誤つて其乞食の足にかけると、啞者の乞食は飛上つて「熱い」と言ふたさうである。此ういふ風に自分で稼ぐよりも人の稼いだものを貰ふとを好み、啞者でもない者が啞者の眞似をして乞食をする様になつては、眞に情ない話である。此ういふ人々

は何ぼら金を呉れ、又は物を取らせた處で、それで立派な人間になれる見込はない。本統に貧乏人を救ふ法は之に金を施すとはなくて、其靈魂を救ふことである。昔々ラヤが「生來の跛者から施與を求められた時」「金銀は我に無し、唯我に有る物を解はす。ナザレの耶穌基督の名に由りて起ちて歩め」と申し、金を呉れないで其跛者の足を癒してやつたといふ話がある如く。本統に貧乏人を救ふ法は、彼等をして悔改めし基督の救を受け、自助自營の人間とならしむることである。即ち信仰の力により從來の遊惰、放逸、不身持、不始末等を一切改め、以來は神様を畏れ敬ふて我本分を盡す者とならしむる外に途はないとである。今尚、も少し詳しく基督の救が貧乏人に及ぼす影響のことについて考へ度と思ふ。

第一、稼ぐに追付く貧乏なき事。救はれたる貧乏人は通常段々工面がよくなる者である。西洋の諺に「新しい心を得たる者は新しい上着を得る」と申し、人が基督に由つて其靈魂を入れかへられ、罪より救ひ出されて、清く正しい世渡をする時、自然其生活もゆたかになつて来るものである。何故かといふは、貧乏の原因は基督

火の不勉強、不身持、不注意、濫費等に因るとが最も多い。併しながら基督に従ふ人は此等の良らぬ癖から救はれるゆゑである。フランクリンといふ人は或時「諸君は政府の租税が高じといふを苦情を鳴らすけれ共、其くせ租税の二倍の金を遊惰に拂ひ、三倍を贅澤に、また四倍を物敷寄と娛樂とに拂ふて居るではないか」といふたことがある。然り乍ら基督に救はれて真面目に世を渡る者は、神様の御力にて其己に打克ち、酒を飲ず、道樂をせず、物見遊山に濫費をする様なとがなくなるから、唯其丈でも餘程以前より工面がよくなる筈である。加之基督の僕は又正直に家業を勤める者である。見通しの神様を信仰する者が、陰日向の符をしたがひ又は懶惰な者おぼせらるゝわけのものではない。然るに勉強は幸福の母であるから、然るに入々が幸福の人となるのは、固より當然の事ではないか。昔徳川家康は或時近侍の家來共に向ひ「汝等は俗の生る木といふものを知つて居るか、金の生る木とは即ち正直と剛氣であるを」と仰せられると。細川三齋といふ人が其話を聞き傳へた大に感心し、乃ち正直といふ木の圖を書き、それに朝起き、働きの二つの枝を

添へて、皆なに示されたといふことがある。諺に「稼ぐに追付く貧乏なし。」また「神は正直の頭に宿る」などと申し。基督の救を受けた者は自ら勤儉の人となり、勤儉の行は其人の工面を好くせずしては止め者である。

第二、貧乏な中にも楽しみがある事、救はれたる貧乏人は又貧に安んずると刀出来る。これが若し神様を信仰しない人であつたら、胸に安心満足の無い所から、貧すりや鈍する世の習、天をも怨み、人をもとがめて、悶々の中に其生涯を送り、果は自棄酒でも飲んで亂暴をなし、又は貧乏を苦に病んで淵河へ身を投げてもし兼ねぬ様な場合にも。全智全能なる恵深き神様に頼る身は、眞の安心立命といふものがある故、決して左様な不了簡なことをしない許か。却つて足るとを知つて天命を樂み、夫婦相愛し、兄弟相睦み、長幼相助けいたはりて、貧しければ貧しいなりに、幸福なる日を送ることが出来るものである。即ち聖書に「少しの物を有ちて神を畏るゝは、多くの貨を有ちて擾煩あるに愈る。蔬菜を食ひて互に愛するは、肥たる牛を食ひて互に恨むるに愈る」とは、此ういふ人々の身の上を言ふたるものである。プース大將の貧

窮論といふ文の中に、貧乏人の幸福を説て下の如くいふてある。「神様は此世の貧しき者を選びて信仰に富せ給ふ。神様の僕の大部分は貧乏人である。初代教會の信者達は悉く皆貧乏人であつた。其わけは彼等が信仰故に家倉身代を失ひ、然りとて仕事に有就く事は六かしく、物を買ふにも賣つて呉れ手がなく、物を賣るにも買ふて呉れる人がなく、野山の間を彷徨ふて世を渡らねばならぬ場合が多かつたからである。今も基督の僕の大多数は貧乏人である。貧乏人は喜んで一から十迄神様の思召に従へども、金持は何時の世にも天國に入るとが六つかしいものである。神様が金持を恵み給はぬわけではない。唯金持が神様よりも金を大事がるが故に、天國に入り兼ねる場合が多いのである。而して聖い神様の僕の中には、今も眞面目に其聖旨を行はん爲め、態と富貴榮華を棄て、貧窮の生活を營む者も少なくない。貧乏は好ましいものではなくて、慥に罪の結果たる荆棘と藪の種類なりと見做すべき場合が多くあれど、其と同時に貧乏は又祝福である。多くの利益を私共に與へるものである云々。」歌に「世の中はあるに任せて事足す、足らて事足る身こそ安けれ。」而して聖書には

又一爾曹世を過るに食ふことせず、有るところを以て足りとせし。蓋我爾曹を棄ず更に爾曹を棄じといひ給ひたれば也」と教ふのである。

●第二、貧乏なる中にも有益の生涯を送る事。救はれたる貧乏人は貧しい中にも有益なる生涯を送ることが出来る。其事に就ては又ブリス大將の語を、貧乏は世界最大の悪人である。神様の前に大事業をなしたる古人は、多く貧乏人であつた。ダビデは田舎の牧童より身を起したる者は、ネム、ヤ、ダニ、エ、及び三人のヘブルの青年は奴隷であつた。エリヤ、マリヤは今の救世軍大尉位の生活をなしたる者にして、其の入隊さかの時の相談相手になつて呉れる、聯隊長を有たなかつたのである。エリヤ、エゼキヤは何れも貧乏人の子にして自分にも亦貧乏なる生活を立てたるものである。我等の主耶穌基督は貧しき大工の生涯を送り給ひ、其使徒達は又三人を除く外、殘らず貧家の産物であつた。後世に於ても彼アシ、のフランシスと其徒の如きは、殊に清貧に甘んじて著るしく神様の御用を勤めた者である。今日の私共救世軍人は亦多少の例外を除けば悉く貧乏人である。財産もなぐ、亦大學教育もない

者共であれど、それでも能く十九世紀の宗教社會に、革命を惹起すことが出来た。今日以後と雖も、若し推救世軍中の貧しき親達が、惜氣もなく其子女を戰場に送り出すに於ては、世界は此等の青年に由つて、眞々神様の奇蹟を見るところを得べく、而して其聖旨と又救の事業とは、大に成就せらるゝに相違ない」といふのである。或時一人の慈善家が、貧しい黒人の老婦を其病床に訪ね、冗談半分に「もうお前さんも、好加減で天國に行つた方が可い頃ではないかな」といふと、老婦は眞面目に答へて「否々決して然うてはありませぬ。一體神様の御爲めに盡すに二通りの方があつて、一は貴君の様に金で助けることありますが、今一つは私の様に、此うして居つて新舊で助けることあります。其故に私が生きて居つて、皆さのためを爲めに祈禱をするとは、丁度貴君が惜みなく財布の口を開けて人に施與をなさるのと同じ、何方を欠てもならぬものであります」と言ふたさうである。此の如く救はれたる貧乏人は、貧の間にも有益なる生涯を送ることが出来る故に、此上もなく幸福なる者である。

第四、神様は貧乏人を顧み給ふ事。神様は救はれたる貧乏人を顧み給ふものである。耶穌基督の御言に、「爾曹何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思ひ煩ふと勿れ。先づ神の國と其義とを求めよ、然らば此等のものは皆爾曹に加へらるべし」とあり。私共が誠心誠意神様に従ふて我自分を盡しつゝ、それでも何ぞの都合にて忽ち食ふ物にも困る様な場合には、神様は必らず何か特別なる方法を以て、之を救ひ助け給ふ者である。其故に昔預言者エリヤは王様から追められ、川端に身を隠し、食物が盡されて困つて居ると、神様は鴉にパンを運ばせて之を養ひ給ふたといふとがある。基督は又或時、徹夜漁をして疲れ果たる弟子達に向ひ、「小子等よ食物はあるか」と尋ね、「ござりませぬ」といふのを聞いて、之が爲めにパンと魚との用意をしておやり成れたといふとがある。此の如く神様の御子は今も私共に向ひ、「小子等よ食物はあるか」と尋ね、なくて困つて居る時には、必ず相當の手當を成し給ふ御方である。乃ち西洋の學者が、「泣いて三度の飯を食つたとなない人には、神様の有難いとは分らぬ」といひ。又「難儀苦勞に遭ふたとなない人のみ、奇蹟の時代は過ぎ去つた様に言ふ」

など申して居るのは、如何にも意味の深い言であると考えらる。或時プロシヤの國の片田舎に、貧しい父子の者が住んで居り、何うしても年貢を上納することが出来ない故、今日にも役場から役人が出張して、ありもしない、家財を差押へるかも知れぬと心配し乍ら、切りに神様に祈禱して居ると。忽ち一羽の鶯が其家の窓から内へ飛込んで来て、戸棚の隅へとまつた故、何氣なく取おさへて有合せの古い禽籠に入れて置くと、鶯は直ぐに籠に慣れて快く歌を唱ひ始めた。それから二三時間経つた頃、表の戸を叩く者があるから、父子の者は扱こそ役人が家財を差押へに來たのであらう、何うして此場を切りぬけたものかと狼狽ながらも、心の中に神様を念じつゝ、戸を開けて見るとこれは役人ではなくて或貴婦人の家來が、今朝がた禽籠を脱出た、主人の鶯を尋ねて來たのであつた。聞けば此鶯は非常に高價なもの、由にて、それが此家で無事に手に歸つたといふので其人は大層喜び、辭退するにも拘らず、無理に多分の金をも禮に置いて歸つたゆゑ。其ため懸て本統の役人が年貢を取立てに來た節には、差支なく悉く之を支拂ふとが出来。此んな嬉しいとが復とあらうかと、

父子の者は其處に跪いて、只管に祈禱に應へ給ふ神様を讃たへたといふ話がある。此の如く神様は貧乏人の祈禱を聴いて、之を憐み助け給ふものである。艱難の日に我をよへ、我汝を援けん。而して汝我を崇むべし」とは、忝けない神様の御約束ではないか。

第五。此世から天國に貨を蓄ふる事の救はれたる貧乏人は又年中天に貨を積む者である。路加傳第十六章に救はれたる貧乏人ラザロが、死んだ先では天國に入り。又紫袍は細布を着て日々奢り樂んで居つた金持が、死んだ先では地獄に墮ちたといふ。如何にも意味の深い譬喩談がある。私共は假令現世で卅年か五十年の間何んな難儀苦勞をするとも、立派に信仰の道を履み、神様の聖旨を行ひ、而して永遠な來世の光榮を求めねばならぬ。使徒パウロの言に「我儕が受る片刻の輕苦みは、極めて次なる、窮りなき、重き榮を我儕に得せしむる也」とあり。ドレイ、ブレイといふ人は又「黒塗の馬車で地獄に馳込むよりは、跛て足のうちから血を流し乍らも、天國に入る方が餘程優した」と申して居る。救はれたる貧乏人は、或は此世で暫くの

間、跛て荆棘の中を歩む様な切ない思をする者があるかも知れない。併し乍らつたきは天國に歸つて、神様から「善且忠なる僕」との御褒辭を戴く望をもつ者である。而して唯此一語を承るとが出來たならば、私共が現世の三十年や五十年の苦勞は、固より充分辛抱のし甲斐があつたものと謂ねばならぬ。我此等の望を既に得たものと謂ふに非ず、亦既得全うせられたりと言ふに非ず、或は取るとあらんと我惟之を追求む。基督之を得ばせよ我を執へ給へる也。兄弟よ我自ら之を取りと意はず。惟此一事を務む。即ち後に有るものを忘れ、前に有るものを望み、神基督耶穌藉由りて上へ登りて賜所の褒美を得んと、標準に向ひて進むなり。」

(七) 獻身の勧め

兄弟よ我神の諸々の慈悲を以て爾曹に勸む。其身を神の意に適ふ、聖き、活る、祭物となして神に献けよ。是當然の祭なり。(羅十二〇一)

基督の救を受けたる私共は、常に酒を禁じ、道樂不身持を改め、喧嘩口論、虚言詭詐をやめ、集會に出席し、多少の献金をなし、又は折々證言や、勸告をする位ではなく、進んで神様に献身したる人物とならねばならぬ。献身とは身も、靈魂も、又凡ての所有をも、一切献げて神様の有となし。以來は唯もう神様が、なれと仰せらるゝ儘になり、爲せと仰せらるゝ儘を爲す人間となつてしまふことをいふのである。これは救世軍士官や。又は凡て傳道に従事する者丈の務でなく、商人も、職工も、百姓も、學者も、軍人も、政治家も、老たるも、若きも、女も、男も、苟くも基督に救はれて、眞面目に一人前の世渡をし度と思ふ程の人々が、悉く皆爲さねばならぬ等のとてである。即ちパウロが「是當然の祭なり」といふたるは此意味ではな

いか。然らば私共は何故に献身の生涯を送るべきかといふに。

第一、私共は元來神様に造られ守られて居る者である。爾は何の賞はざる物をもつか、若し賞は何ぞ賞はざる如く誇るや。凡ての物は皆神様から戴いたものである。故、これを神様に献げて其思召通りに扱ふべきは理の當然である。昔話に狼狽者の丁稚が主人から買物を命令けられ、金を握つて飛出した迄は可いけれ共、餘り周章で何を買ふのだから聞くとを忘れ、後で氣が付いたが今更歸つて尋ねるのも面倒臭いと、持つて居つた金で勝手に買喰したり、又は觀物を見たりして、晩方に主家に歸つて大層叱られたといふとがある。今私共は天の神様から智慧と、能力と、様々の祝福とを授けられて此世に出て乍ら、其等の資本を何の爲めに、何う用ふべきかといふとを神様に伺はず、勝手次第に浪費して、唯食つたり、飲んだり、淫れたり、悶へたりしながら、死んでしまふに於ては。これは丁度前の狼狽者の丁稚が、主人の命を待ずに町へ飛出して、買喰や物見遊山に金を使ふてしまふたのと、似た様な話ではあるまいか。神様は私共に向ひ「我來る迄商賣せよ」と仰せられて居る。私

共は終の總勘定の日に、立派に御報告の出来る様、今の間から一切萬事唯神様の思召を伺ふて、其通りを行ふて居らねばならぬ。

第二、私共は又基督の御慈愛に感激して献身すべきものである。罪を犯して亡ぶべかりし身を、貴き神の子の寶血によつて救はれたる私共は、其御恵に勵まされて、以來は唯其聖旨を行ふ爲めにのみ生くべきものである。或時ノルザンプトンといふ所にて死刑の宣告を受けた者があつたが、ドッドリッチ博士といふ人は其人の罪なきことを確信し、色々と盡力して之を救ひ出されると。其人は喜んで申す様、「私の命は貴下のお蔭で助かりました。私の身に屬く者は唯一滴の血汐に至る迄、皆貴下の賜であります。貴下は私の命の親である故、私は最早、私自分の有てはありませぬ。今より命のあらん限り私は貴下の家來となり、貴下の忠實なる僕となつて、御奉公申上るてござりませう」と。元來無罪の人が其罪なきことを辯護して貰ふた丈でも、此うであるとすれば。況して實際山なす罪を神様の前に犯し、永遠の滅亡に至る外なき間から、救ひ出された私共に於ては、何んと基督に對へ奉るべき筈である

か。先年英國の救世軍にて發行したる柱曆には、其真中の處に、基督がカルバリ山の上にて、天は眞黒に掻曇り塵さい風は吹き荒る中に、十字架の死を遂げ給ふ様を畫き、其下に「我は汝の爲めに此の如くなせり。汝は我爲めに何を爲すか」といふ短い文字を認めてあつた。嗚呼十字架にかゝつて私共の爲めに死給ふたる基督に對しては、私共亦其身を擲つて働くべき筈ではあるまじか。或人の歌に「すてに早や死し此身をすくはれて、残る月日を誰が爲めにせん」とあり。私共は基督の愛に感激して、献身の人とならねばならぬ。

第三、神様は又私共が献身することを命令して居給ふ。基督は「我を信ぜよ」「我に學べ」と仰せらるゝのみならず、亦「我に従へ」と御命令になつて居る。「又耶穌人々に曰けるは、若我に従はん」と欲ふ者は、己に克ちて日々其十字架を負て我に従へ。其生命を保全せんとする者は之を喪ひ、我ために生命を喪ふ者は之を保全すべし。人若し全世界を利するとも、自己を喪ひ自ら亡びなば何の益あらんや。」或は「凡そ我に來りて其父母、妻子、兄弟、姉妹、又己の生命をも憎む者に非ざれば、我弟子

となるを得ず。又十字架を任ずして我に従ふ者は、我弟子と爲とを得ず。爾曹誰か城を築かんに、先づ坐して其費此事の竣る迄に足や、否やを計ざらん乎。恐くは基を置て之を成能はずば、見る者皆嘲笑ひて此人は築きかけて成遂げざりしと曰ん。又王出て他の王と戦はんに、先づ坐して此一萬人を以て、彼が二萬人に敵すべきや否やを算らざらん乎。もし及ずは敵尙隔たれる時に使を遣はして和睦を求むべし。然ば斯の如く爾曹其所有を盡く捨ざる者は、我弟子と爲とを得ず。鹽は善物なり、然ども鹽其味を失はば何を以て之に味を和んや、田にも糞にも益なく外に棄らるゝなり。耳ありて聞ゆる者は聴くべし。」などあり。基督は私共が一切を其御手に任せ、其思召の儘に何うてもなり、何んでも爲すべきことを要求して居給ふ。此献身なくして基督に従ふ者は、味の脱けた鹽の如き基督信者である。預算を立てずして建築に取かゝり、又は作戦計畫なくして戦争を始むる者と同じく、途中で敗れて、決して最後迄基督に事へるとは出来ない者である。

第四、今一つの私共が献身して唯神様の聖旨の儘に生き存へることは、最も有益にし

て又幸福なる生涯を送る所以である。爾曹壞る糧の爲めに勞かずして、永生に至る糧、即ち人の子の與ふる糧の爲めに勞くべし。「私共が何を食ひ、何を飲んで生活するかといふとは、是唯瞬時の問題である。然り乍ら何れ丈神様に従ふて、愛の働きをなすかといふと丈は、永遠に關る大問題である。或彫刻師が死る間に申す様、「私が達者な間は、其上手な彫刻師であることが何より大事な様に覺えられたが。今となつて考へて見れば、私が眞面目な基督信者であるただけが、何より大事であつたとを發見する」とのとてあつた。ブリス夫人が死に臨んで申されたる言に又「今更想ひ出して快く感ぜらるゝとは、唯幾らか人の爲めに善をなし居りたるを許りてある」といふてある。夫れ人は既に草の如く其榮は凡て草の花の如し。草は枯れ其花は落つ、然ど主の道は窮なく有つなり。「私共は後々迄も存る善事を行ひ、有用、幸福の生涯を營まん爲めに、一切を献げて神様の思召の儘に、毎日を通す者とならねばならぬ。

神様は献身する者を潔めたまふ。潔むるのみならず、亦之を用ゐて、其御榮の爲め

に活潑々地の運動をなさせ給ふ者である。其故パウロは「其身を神の心に適ふ、聖き、活る祭物として神に献げよ」といふたのである。

献身とは献心の謂である。私共は私心私慾を全く棄て、其胸の中を神様に明渡さねばならぬ。即ち聖書に「我子よ汝の心を我に與へよ。」又「爾曹基督耶穌の意を以て意とすべし」とあるのは、此事である。私共は自分の意志を全く神様の意志に降伏させ、パウロと共に「最早我生けるに非ず基督我に在りて生けるなり」といふ様にならねばならぬ。私共は又其四肢五體を悉く神様に献げねばならぬ。爾曹の身は爾曹が神より受けたる、爾曹の衷にある聖靈の殿にして、爾曹は爾曹の屬にあらざるを知らざるか。そは爾曹は價を以て買れたる者なればなり。是故に神のものなる爾曹、身に於ても、靈魂に於ても、神の榮を顯はすべし。」又「エホバの心に嫌ひ給ふ者七あり、即ち驕る目、虚偽を言ふ舌、無辜人の血を流す手、惡謀計をめぐらす心、速かに惡に趨る足、詐偽をのぶる證人、及び兄弟の中に争端を起す者なり。」其故に私共は目に非禮を視ず、耳に非禮を聽かず、口に非禮を言はず、手足に非禮を行は

ず、却つて食ふにも飲むにも何事を行ふにも、神様の榮を揚げる様でなくてはならぬ。或時一人の紳士が瀛車の中にて、救世軍の士官と語を交へ「切今こゝには婦人が居らぬから宜しいが」と、前置をして何んだか妙なことを話しかゝると。士官は遮り止めて「否、お待ち下さい、婦人が居つては聞れぬ様な話は、お見合された方が可はありますまいか」と、いふたさうである。私共の耳は神様に差上げたものであるから、最早浮つ調子をとを聴く爲に用ふるとを許さない。今から三十年程前、タツカー少將が始めて救世軍を印度に開かれたる時、全く土人と同じ様な風になつて、其着物を着、其食物を食ひ、其家に住み、あまつさへ素足で焼砂を踏んで歩いて居られると。或日少將が疲れて樹蔭に寝て居らるゝ處へ、數人の印度人が通りかゝり、其印度服を着たる姿に目をとめ、尙傍近く寄つて、果は其軟かい足が血に染むをも厭はず、其同胞の救の爲めに働いて居らるゝ有様を賞見するに至り、非常に感動し。乃ち少將を招じて其町に歸り、先に立つて斡旋盡力したのが本にて、其地方に傳道の門戸が開け、三ヶ月の間に悔改むる者七百人に及んだとがある。此の如く私共は

手足の先にまで、神様の恵を證明する者とならねばならぬ。昔ペテロは、「人を偏視せず、各人の行に由て鞠く者を爾曹若父と呼は、世に寄れる日を懼れて過すべし」と申した。其通り私共は又凡ての時間を神様に献け、働けと宣ふ時に働き、休めと宣ふ時に休み、人を救ふ爲めに盡せと宣ふ時に盡す様でなくてはならぬ。新聞讀む時間があつても、聖書を讀む暇がないといふ者は虚言者である。無駄話をする時はあつても、祈禱をする時を有たぬといふ者は自ら欺く者である。又は非將基を弄ぶ閑があつて、行軍に出でず、「ときのある」を賣らず、人の靈魂を救ふ爲めに働かぬ人は、固より基督の旨を行ふ者とは申し難い。昔パウロは救を受けると直ぐに「主よ我に何を爲さしめんとし給ふや」と尋ねて、其職業の選擇に就て神様の御導を求めた。其如く私共は亦、その職業の選擇を神様に一任するものでなくてはならぬ。唯儲が餘計にあるからとか、又は安樂であるからといふ爲でなく、却つて神様が商人になれ、職人になれ、月給取になれ、又は救世軍士官になれと仰せらるゝから、それになるべき筈のものである。私共は其從事する職業が、自分に取て一番餘計に神様の御榮

を揚げ、又人の靈魂を救ふ方法であるから、それ故之に就く様でなくてはならぬ。私共は又其家族を神様に差上げ、凡て己が權威の下に在る者を教へて、専ら聖國の爲めに働く者となすべき筈である。神様は嘗てアブラハムに就て「我彼をして其後の子孫と家族とに命じ、エホバの道を守りて公義と公道を行はしめん爲めに彼を知れり」と仰せられた。私共は又財産を神様に献げ、其思召に従ふて之が處置をなし、常に己が安樂幸福の爲めに金を用ゐ、或は之を貯へるのみならず、進んで精々多分に之を世の救の爲めに運轉することを心がけねばならぬ。一言にいへば私共は身も、靈魂も、凡ての所有をも、悉く神様の御手に引渡し、其所有權を讓渡して、以來は何につけても唯、神様がなれと仰せらるゝ儘になり、爲せと仰せらるゝ儘のみこれ行ふ人間となつてしまはねばならぬ。即ち基督が「我に従はんと欲ふ者は、己に克ちて日々十字架を負ひて我に従へ」と宣ふたのは、全く此意味をいはれたものである。

使徒パウロは「我神の諸の慈悲を以て、」汝等に献身の事を勧誘すると申した。今婦

人が自分の姓を棄て、故郷を離れ、親に別れて、夫に嫁するのは、非常なる犠牲を拂ふわけてあれど。誰も之を吊はずして却つて之を祝ふのは、かくてこそ其婦人の身の落着が定まり、これより一層幸福有用なる生涯に入るべきことを知るが故である。丁度其如く私共が己の意志を没して、之を神様の意志に服はせ、其體をも、所有をも、皆神様に献げるといふのは、大した犠牲を拂ふとの様ではあれど。其實はこれに由つて始めて耶穌と一つになり、眞に聖潔、有用、幸福の生涯に入ることが出来るわけである。われ神の熱心の如き熱心を以て爾曹を念ふ。我爾曹を一人の夫に聘定せり、是爾曹を潔き女として基督に献げんとする也」とは、此の道理を説いたるものではないか。随つて献身の生涯は切ないものでなくて、楽しいものである。窮屈なものではなくて、満足安心の極致である。其故に之は、「神の諸の慈悲を以て、勸誘せらるべきの生涯であることを知らねばならぬ。

昔アブラハムは献身の人であつた。初に神様から「其うけ継べき地に往け」との命を蒙り、之に遵ひ、其往所を知らずして出たるのみならず。後には其一子イサクをさ

へも祭壇に献げて、神様から「汝の子、即ち汝の獨子をも我爲めに惜まざれば、我今汝が神を畏るゝを知る」との、御言葉を承はつたといふことである。モーセは亦献身の人であつた。其故に彼は「暫く罪の樂を享んよりは、寧ろ神の民と共に苦難を受けんと善とし、基督の爲めに受る誹譏は埃及の貨財よりも貴きもの」と思ふたのである。使徒パウロが「我わが主基督耶穌を識るを以て、最も益れることとするが故に、凡ての物を損となす。我彼の爲めに既に凡ての物を損せしかど、之を糞土の如く意へり」といふたる如きは、亦最もよく此大なる献身の精神を告白したるものではないか。救世軍は献身の精神の凝つて成りたる軍隊である。即ち故ブリス夫人が「救世軍の今日あるは、全く其初、唯二人の者が献身の大主義を受入れ、之を己の生涯に實行する覺悟を定め、又此主義に由つて兒女を教育し、熏陶し、同じく此主義を他人に及ぼしたるの結果である」といはれたのは、如何にもよく實際を穿ちたる言であると思ふ。

ジョン、ウエスレーの言に「神の外畏るべきものなく、罪の外恥づべきものなく、

耶穌基督と其十字架の外、何事をも知らざる者百人あらば、世界を動かすことが出来る」といふことがある。嗚呼神様よ、何卒此の如き献身の人物を、多く我日本の國に起し給へ。

(八) 聖潔の早わかり

人若し潔からずば主に見ゆるを得ざる也。(來十二〇十四)

既に基督の救に與かりたる者は、進んで聖潔の恵を受けねばならぬ。私は今此非常に大切な問題に就て、雜と其説明しを試み度と思ふ。

第一、聖潔を求むべき理由。今先づ聖潔を求むべき理由五ヶ條を擧げると致さう。

(一) 聖潔を受へるとは神様の御命令である。即ち「我潔ければ爾曹も潔くすべし。」「爾心を盡し、精神を盡し、意を盡し、主なる爾の神を愛すべし。又己の如く爾の隣を愛すべし。」「杯とありて。神様は無理などを御命令になる御方でないから、此等の御命令に適ふ生涯は必ず之を營むとを得べく、亦必ず營まれねばならぬ筈のとてある。

(二) 神様が聖潔を與へ給ふことは聖書の御約束である。即ち「我儕の罪を除かん爲に、主の現はれ給ひしとは爾曹の知る所なり。彼又自ら罪なし。凡そ彼に居る者

は罪を犯さず。「平安の神凡ての善事に於て、爾曹を全うせしむべし」杯とあるは其例證である。

(三) 人を罪より潔むるとは又基督が此世に來り給ふたる大目的である。基督我儕の爲めに己の身を捐て給へり。是我儕を諸ての罪より贖ひ出し、且己の爲めに一の民を潔め、之をして熱心に善事を行はしめん爲めなり。「又神の子の顯はるゝは惡魔の工を毀たん爲めなり。」などあるのはその事である。

(四) 聖潔は又多くの人々の實驗である。昔エノクは三百年間神様と偕に歩んだ人にて、ブリス大將は之を「最初の救世軍人」と呼ばれて居る。其他ノアも、アブラハムも、モーセも、イザヤも、皆神様の前に全く、聖き生涯を送りたる者であつた。使徒パウロが、「我儕が爾曹信する者に對ひて如何許り深く、義しく、缺るとなくして行へるを、爾曹も神も證をなす」と言ふたる如きは、亦此實驗を述べたるものに外ならぬ。

(五) 聖潔は又私共の必要である。切角救はれたとは言條、未だ心に殘る苦の根が

あつて、稍ともすれば復もや新しい芽をふき出す恐があり、罪を犯しては悔改め、悔改めては復罪を犯すといふ様な有様にて、一向安心がない。即ち使徒パウロが羅馬書第七章に於て、其心の中の苦悶を録し、「我願ふ所の善は之を行はず、反つて願はざる所の惡は之を行へり。我内なる人に就ては神の律法を樂めども、我が肢體に他の法ありてわが心の法と戦ひ、我を擽にしてわが肢體の中に在る罪の法に従はざるを悟れり。噫我困苦人なるかな。此死の體より我を救はん者は誰ぞや」と申したるは、更生の恵を受けたるのみにて未だ聖潔に到らざる人々が、何時の代にも同様に經驗する所の苦悶である。救はれた許て未だ潔められない人は、復しても罪を犯す者である。隨つて胸に不斷の安心といふものがない。する働きに身が入らず、切角の善事も兎角長持が致し兼ねる。而して殊に墮落の恐が最も多い者である。昔モレピヤン派のシンゼンドルフといふ人は、或時ジョン、ウエスレーに向ひ、「私は過る十年間事大小となく、一切自分の意の儘を行ふたどがない。私に取つては自分の意志は即ち地獄である」といふと。ウエスレーはこれによつて感奮し、それから一層聖潔の祝

福を味ふたといふとである。私共も亦此シンゼンドルフの如く、一切萬事唯神様の聖旨をのみ、これ行ふ者とならねばならぬ。然らば聖潔の恵とは、果して如何なるのであるか。

第二、聖潔に似て非なるもの。聖潔とは何かといふとを考へる前に、先づ聖潔とは何てないかといふとを知るのは、誤解を避ける爲めに大層便利のとである。

(一) 聖潔とは人間が神様同様になり、又は天の使同様になるといふ意味ではない。これは唯人間が人間相應に完き者となるといふ意である。昔ダビデ王は、「エホバよ願くは我を鞠さ給へ、われ我完全によりて歩みたり。然のみならず我たゆたはずエホバに依頼めり」と申した。神様は神様として完く、天の使は天の使として完きが如く、私共は又私共相應に、完き人間になると出来る筈にて、其状態を即ち聖潔とはいふのである。

(二) 聖潔とは又過失のない人間になるとでない。唯罪を犯さぬ者となる丈の話である。罪とは爲てならぬ悪いとを爲し、または爲すべき善を行はぬとにて。潔められたる人は然らういふ罪は造らなくなれ共、然りとて智慧判断の足りない所から、切角善い積てやつたとに後て落度を發見する、所謂過失に陥ると迄なくなるわけのものではない。

(三) 聖潔とは又試練のない人間になるとでない、唯試練に打勝つ人間とせられるとをいふのである。墮落しない前のアダムも悪魔に試みられ、罪なき基督も野の試練に遭ひ給ふた。其如く私共も潔められたからといふて、試練のない者となるてはなく、却つて試練は以前よりも劇しくなる場合さへ少なからねど。唯潔められたるお蔭には、凡て此等のものに打勝つとが出来様になる。ルートルの語に、「鳥が頭の上を飛ぶのは致方もないが、併し乍ら鳥が頭の中に巢を組むとを許してはならぬ」といふことがある。其如く聖潔を受けたる人は、悪魔が頭の上を飛ぶ分はいざ知らず、其心に入つて巢を組むとばかりは、決して許さぬ様、之を拒絶する力を與へらるゝものである。

(四) 聖潔とは又肉體の弱味を取去られるとではない。勿論潔められて有用の奉事

をなす人は、神様も特に其病氣を癒し、不思議に其健康を支へて、一層御用を勤めしめ給ふ如き場合が毎度ある。併し乍ら聖潔を受けたる人々は何時も無病息災にて、凡て肉體上の弱點を取除かるゝものだと思ふ人があらば、それは誤解をして居るものと謂ねばならぬ。

(五) 次に聖潔を受けたからといふて、最早墮落の恐なき者となるのではない。罪を知らぬアダムさへ、墮落してエデンの園を放逐せられた例のあることを思へば。パウロが「自ら立ちと思ふ者は倒れざる様慎むべし」と戒めたるは、私共にとつて最も適切なる警告であるといはねばならぬ。ジョン、パンヤンの語に、「天國の入口にも尙地獄に通ふ路がある」といふてある。其故に信仰の生涯には「目を醒し且祈禱する」とが、いつ迄も必要であるを知らねばならぬ。

(六) 今一つ心得て置くべきは、聖潔を受けたからといふて、最早進歩成長の餘地なき人間になるのではないといふ事である。却つて病人は滋養物を食ても左程利目がなないけれど、達者な人は目に見えて其健康を増す如く、潔められたる人は唯救はれた許の人々よりも遙か優つて、其靈魂上の成長進歩が著しいものである。私共は潔められて後にこそ、眞に恩寵の中に成長して益々繁く果を結ぶべき筈のものである。

第三、聖潔とは如何なるをいふか。前の節に於て、聖潔とは何んでないかといふとを離と考へたゆゑ、私共は今進んで、然らば聖潔とは何かといふことを考へねばならぬ。勿論これは非常に大なる問題にて、仲々私共の不完全なる語を以て、一言に言盡すことが出来難い。併し乍ら私が今日迄一番解り易くして、又最もよく其意味を言現はして居ると思ふ説方は此うである。

聖潔とは凡ての罪を其心より取去られ、愛の靈を満さるゝことである。即ち聖潔とは、一方から言へば一切の罪を根こぎにして悉く其心から取去らるゝこと、又他方から言へば、全き愛を満さるゝことである。即ち愛なる神様の靈に満さるゝことをいふのである。神様は愛である。基督の宗教は又神様を愛し人を愛する所の宗教である。而して潔められたる人は、全き己に死んで愛の靈に満されたものとなる

が故に。以來は唯もう年中毎日、明けても、暮れても、神様と人とを愛し、愛に由つて考へ、愛に由つて語り、愛に由つて働き、愛に由つて生き又死ぬる人となる者である。人が一旦此境涯に入れば、最早疑も、惑も、功名心も、嫉妬心も、安逸を貪る心も、十字架を恥る念慮も、偽善も、作爲も、世俗を愛するとも、身勝手も、淫蕩な念も、皆無くなつて、後には唯潔く、正しき、愛の靈のみが働き給ふこととなる。馬大傳五章四十八節に、「天の父の完全が如く爾曹も完全すべし」とは此事である。加拉太書二章廿節に「最早我生るに非ず基督我に在て生るなり」とは此事である。其他「全き救」といひ、「清き心」といひ、「全き愛」といひ、「靈に由て歩む」といひ、「靈に満さるゝ」などといふのは、皆此有様をいふたるものである。基督が「婦を見て色情を起す者は、心の中すでに姦淫したる也」との嚴重なる御戒も、潔められたる人には難なく之を守るとが出来。又パウロが「愛は律法を全うす」といふたる話も、聖潔を得たる人には、日毎に之を實驗する事が出来るものである。然らば、救と聖潔との相違は如何といふに、その事に就てマクドナルドといふ人の

説は、最も丁寧深切であるから、今それを左に掲げませう。

- 一、新生に於ては罪が支配をしなくなり、成聖に於ては罪が存在しなくなる。
 - 二、新生に於ては罪が降服したるものにて、成聖に於ては罪が撲滅せられたるものである。
 - 三、新生に於ては憤怒、高慢、不信、嫉妬等の不都合なる願望が、壓抑されたるものにて、成聖に於てはそれが取除かるゝものである。
 - 四、新生とは故意なる犯罪より救はるゝことにて、成聖とは罪の存在より救はるゝことである。
 - 五、新生とは舊き人を束縛する事にて、成聖とは舊き人を放逐し、其所有を没收する事である。
 - 六、新生は成聖の始にて、全き成聖とは其工の成就られたる有様をいふのである。
- 五旬節以前の弟子達は救はれた許で、未だ聖潔を受けない人々の標本である。彼等は救はれて居つたればこそ、傳道にも派遣せられたわけてあれど。未だ潔められて居なかつた故、其間に嫉妬があり、争闘があり、功名心があり、短氣を起し、失望をなし、又屢々疑ひ惑ふた者である。然り乍ら一旦五旬節の聖靈に由りて、其心を潔められての後は、死をだも恐れずして神様を愛するペテロ、ヨハネの傳道となり、己を殺す者をも愛して其爲めに祝福を祈るステパノの殉教となり。凡ての罪の根は

弟子達の心から取除かれて、その後には唯神様を愛し、人を愛する愛の靈のみが、自由自在に働いて居給ふたを見受ける。而して全き聖潔とは實に此の如きものをいふのである。

第四、全き聖潔を受くる條件。然らば私共は如何にして、此の如き全き聖潔を受けるとが出来るか。之には三つの大切な條件がある。

(一) 私共は凡ての罪と、又疑はしき行とを棄てしまはねばならぬ。救はれて後尙聖潔を受けない人々は、隠れたる罪と縁を切らず、殊に之は爲ない方が可と思ふとを行ひ、之は行ふに如くはないと思ふとを行はず、兎角水臭い動作が有りがちなもののである。其故聖潔を受けたいと願ふ人は、先づ改めて我身と心との有様を吟味し、以來凡ての罪惡を思ひ切るは勿論の事、亦一切の之は如何かと思はるゝ様な疑はしき行を皆打棄てしまはねばならぬ。即ち聖書に「罪人よ爾曹の手を潔くせよ、二心の者よ爾曹の心を淨くせよ」といひ。又「爾曹彼等の中より出て、之を離れ、汚穢に捫ると勿れ。我爾曹を納けん、我爾曹の父となり、爾曹我子女となるべし。」など

とあるのは此事である。

(二) 次に大切なるは献身する事である。即ち身も、靈魂も、一切の所有をも、悉く神様に献げ、全然神様の有となり、以來は何一つ自分の考へを行ふとを求めず、唯其聖旨の通り、何にてもなり、何處へても行き、何をてもなし。生るも主の爲めに生き、死るも主の爲めに死。「食ふにも、飲むにも、何事を行ふにも、神の榮を顯はす」者とならねばならぬ。昔ヨブが苦しい試練の中より「彼我を殺すとも我は彼に依頼まん」と申したのは、最もよく眞の献身の意味を告白したるものではないか。米國に南と北との大戦争のあつた時、或人が當時の大統領リンコンに會ひ、「此際私共に取りつて大切なるは、神様が私共の側面に在すと思ふ」といふと。リンコンは答へて「左様、併し私はそれよりも大事などがあると思ふ。それは私共が神様の側面に在るとである」と言はれたさうである。此の如く私共は神様を自分の側面に來て居て戴かふてはなく、却つて自分の方から無我無心になつて神様の側面に屬さ、全く其思召の儘に自由に役ふて戴く様、献身せねばならぬ。而し

てこれは聖潔を受くるに大切なる第二の條件である。

(三) 今一つの肝要なるは、神様が今自分を潔め給ふと信仰するところである。聖潔は神様の御命令であり、亦其御約束である。人を聖潔に入らしむるとは基督が此世に來り給ふたる大目的にて、又多くの人々の経験する所であり、自分になくてならぬ御祝福故。今眞實を以て之を求むるに於ては、必ず與へ給ふに相違ないと、信仰を以て願ひ求むる様でなくてはならぬ。凡そ祈禱の時其求ふ所のものは必ず得べしと信ぜば必ず得べし。又「爾曹の父は求むるものに聖靈を與へざらんや」とあり。それ故私共は充分なる信仰を神様に置いて、此至大なる祝福を祈り求めねばならぬ。第五、何時聖潔を受くべきか。然らば私共は何時聖潔を受くべきものであるかとらふに、聖潔は即刻瞬間に受けらるべき祝福である。誰にても若し、前に言ふたる三つの條件を具へて、饑渴如く神様に願ひ求むるならば、直ちに授けらるべきものである。今も少し精しく言へば。

(一) 聖潔は段々に達せらるべき祝福でない。聖潔に關する神様の御命令、又御約束は、凡て皆現在即刻の意味である。即ち「我潔ければ爾曹も潔くすべし」とか、「聖靈に満ざるべし」とか、又「神の旨は爾曹の潔きとなり」とかいふ様な御語は、何れも追々潔くなれといふ意味でないのは明白である。此點に就きジョン、ウエズネルの言に、「私は嘗て倫敦のみにて六百五十二人、其他英蘭士、愛蘭士等に於て、多くの潔められたる人々に就て其實験を問質したが、唯一人も段々に潔められたと言ふものはなく、皆即刻瞬間に潔められたることを證言して居つた」といふてある。

(二) 聖潔は又多年信仰上の経験を積んで後に、始めて受けらるべき恵でない。人を潔め給ふものは神様である。而して神様に於ては一日も千年の如く、千年も一日の如くてあれば、どれだけ時間を経たる靈魂でなくては、潔められぬといふ様な制限のあらう筈がない。唯既に救を得たる人が更に聖潔を受ける必要を認め、其條件を具して熱心に願へば、何時でも直に與へらるべきものである。それに就き又ウエズネルの言に、「私はアクリスノイルトにて四十人の潔められたる人々に會ひ、箇々の経験を聞いたが、其内或人は救はれて十日目、或人は七日目、四日目、三日目に

聖潔を受けたる者にて、二人は其救を受けたる翌日、早くも潔められたるものがあることを發見した」とある。其故に私共は聖潔を非常におつくりなものとせず、一刻も早く思立つて、之を祈り求めねばならぬ。相成るべくは其救はれた當時の熱心の未ださめない間に、速かに聖潔を求むるが宜しいとは、古來多くの聖潔の教師達の一般に主張した所である。

(三) 此の如き次第故、聖潔は又固より或人々の思ふ如く、死の間際になつて始て受けらるべき祝福ではない。或る時熱心ではあるけれ共此道理を誤解へたる一人の基督信者があり。人は皆臨終の際になつて始めて此大なる祝福を受け、肉慾をも、世俗の悪風をも蟬脱する筈にて、それ迄は潔めらるゝ見込なきものとのみ思ひ込んで居つたが。其うち非常の大病に罹り、段々容體が悪くなつて最早全快の望がないと醫者にも見放された故、自分でも其覺悟になり。それにつけても、今こそ全き聖潔を受くべき大切なる時期であると、苦しい息の下から切に神様の恵を祈ると。神様は其願を聽届け、其靈魂を潔め給ふたを心に感ずる様になつた。これならもう

大丈夫、いつ死んで天國に行つても憚らず救主に見え、又古への聖徒と會ふとが出来ること、喜んで待つて居るうち。何うしたものか、其程ひどい病氣が追々快方に向ひ、果は間もなく全く健康に復してしまふたのである。然りとて切角受けたる祝福を今一度取失ふべきにもあらず。これは奇體だ、此恵は來世でのみ樂しめるものと思ふて居つたに、此世から之を實驗する事が出来るとは、何ういふ忝けないとであるか。こゝに始めて我年來の信仰上の誤謬を思當つたといふ話がある。其故聖書に「今は恩寵の時なり。」又「今日若し其聲を聽ば爾曹心を剛愎にする勿れ」などとあり。神様の時は「今」である。今を棄て、今ならず、今に及んで今すなはち「今」とやら。救はれたる者が進んで聖潔を受くべき時は、即ち唯現在即刻の外はない。私は此書物の讀者が何れも直ちに思立つて、速に此大なる祝福に與かられんことを切に祈るものである。

(九) 聖旨に従ふ生涯

我心の儘をなさんとするに非ず、聖旨に任せ給へ。(太廿六〇卅九)

基督と私共との關係は、譬へば牧者と羊との如き間柄である。誠は實に爾曹に告ぐ、羊の牢に入るに門よりせずして他より踰る者は盜賊なり。門より入る者は其羊の牧者なり。門守は彼の爲めに啓き、羊は其聲を聴く。彼己の羊の名を呼びて之を引出す。彼其羊を引出す時先に行くなり。羊彼の聲を識りて之に従ふ。羊は別人に従はず。反つて避く、そは別人の聲を識らざればなり。羊が牧者の聲をさし覺えて其導く儘に歩く如く、私共は亦常住不斷、神様の御聲を聴わけて、之に従ふ者でなくてはならぬ。潔められたる生涯は服従の生涯である。聖潔は唯不斷の服従に由つてのみ、之を維持する事が出来べきものである。救世軍の標語に「Anywhere with Jesus」耶穌と偕に何處へても」といふのがある。有名なるフレッチャー夫人が「私の宗教は唯四字を以て之を言つくす事が出来る。即ち「Thy will be done」聖旨を成し給へ」といふ、唯此丈である」といはれたのは、共に此道理を述たるものである。果して然らば、私共は如何にして神様の聖旨を辨へ知るとが出来るかといふに、これには凡そ四つの途がある。

第一、私共は聖書に由つて神様の聖旨を知るとが出来る。聖書は「神に屬する聖き人が聖靈に感じて」書き著はしたる書物にて。其中には神様のと、來世のと、人間の罪のと、救のと、聖潔の事、奉事の事を始めとし。親子、夫婦、主従、兄弟、隣人の間の義務責任のと、物の言ひ様、身の持方、飲食衣服の心得迄、細々と説示してある。其故に毎朝新聞を讀むよりも大切なるは、先づ聖書を讀んで神様の思召を伺ふとである。鏡に對ふて容を整へるよりも肝要なるは、聖書に照して我心の有様を省みるとである。古來大に神様に用ゐられたる人々は、皆何れも聖書を愛讀したる者であつた。それ故にジョン、ウエスレーは晩年に及んては専ら聖書のみを讀み、嘗て自分のとを「一書の人」と稱へた程であり。又世界第一の孤兒院を英國プリストル市に起したるジョージ、ミエーラルは、三十四年間忙しい中にも必らず毎

年四回宛、創世記から黙示録の終迄、聖書を讀み通して居られたといふとである。ダ
 ウドル少將が其以前、救世軍社會改良部に屬する或る小さな店を預つて居らるゝ頃、
 或る土曜日に一人の牧師が他の紳士と連立つて其店に參り、肉の罐詰を四つ五つ取
 出させ、試みに其一つを切れといふ。畏りましたといふて直ぐにそれを切つて見せ
 るとも、一つ其次のをも切て見せるといふ故。少將は拒んで帳場にある聖書を取上て
 言ふ様、「御覽なされ、明日は日曜日ですから、私は此聖書から四度も五度も説教や
 警告をする筈になつて居ります。然るを若し私が一つの罐詰と、他の罐詰と、品の
 違ふ様なものを賣つて居つたならば、悪魔は私を嘲つて、お前の説教と店での行為
 とは、全然齟齬して居るではないかといふてあらう。安心してお持歸り下さい。私
 の店では見本と商品と異ふ様な品物は捌きませぬ」と言れたとがある。私共は毎日
 聖書を讀んで神様の聖旨を辨へるのみならず、之を身に引當て實行せねばならぬ。
 使徒パウロの語に、「聖書は皆神の默示にして教誨と督責、又人をして道に歸せしめ、
 又義さを學ばしむるに益あり。これ神の人の完全を得て、諸々の善事を行ふに缺な

からしめん爲めなり」といふてある。

第二、神様の聖旨は又其忠實なる僕に由つて告示さるゝものである。天に口なし人
 をして言はしむ」とは、如何にも道理を盡した語であると思ふ。昔ノアは唯一人に
 て當時の世の人を戒め、「汝等罪を悔改めずば、今に大洪水の爲めに滅ぼさるべき
 ぞ」と説教して居つたが。其言葉を聽かなかつたる悪人共は、果して間もなく悉く
 大洪水の爲めに取滅ぼされたといふとである。又昔イスラエルの軍隊は、其總督モ
 ーセの命に従はず、却つて色々と愚痴小言のみ列べた時、神様は「是モーセに逆ふ
 には非ず、即ち我に對ふて喧く者である」と仰せられ、嚴重に之が處分をなし給ふ
 たといふとである。「夫主エホバは其隠れたる事を、其僕なる豫言者に傳へずしては、
 何事をもなし給はざるものなり」とあり。それ故神様が其僕を用ひて聖旨を顯はし給
 ふ時、之を人の道とせず、神の道として受けいるゝ者は幸である。乃てパウロは嘗
 てテサロニケ小隊の兵士達に向ひ、「我儕神に向ひ爾曹が我儕より神の道を聞し時、
 之を人の道とせず、神の道として受けたるを斷ず感謝す。此道は誠に神の道にして

爾曹信する者の中に働くなり」といふて居る。神様は今も篤實熱誠なる其僕等を用ゐ、罪人を警めて其悔改を促し、救はれたる者を教へて更に全き献身と、成聖と、神への奉事とに導かせ給ふものである。諸君、諸君は天に代つて物言ふ預言者の聲に聽従はねばならぬ。

第三、神様の聖旨は又其御攝理に由つて教へられる。昔基督は天飛ぶ鳥の種を播き、收穫るともせざるに、尙安然に養はれて居る有様を見て、神様が滅多に人間を飢し給はぬ道理を示し。又野に咲く百合の花の美はしき姿を見て、義き人の着る物に不自由はあるまじき道理を説諭し給ふた。昔ルーテルは其親しき友達が雷に打れて死んだのを見て、浮世の果敢なきとを知り、断然一生涯を神に献げたといひ。又印度の傳道に大なる貢献をしたるジャドソンといふ人は、少い時嘗て不信心なる一人の友達が、大學校を卒業すると間もなく大患に罹り、宿屋にて苦み悶へつゝ死ぬる有様を見て、眞の献身をなすに至りたるものだといふとである。ブース夫人の物語に又此ういふとがある。「私はウエリントンゴッローからの汽車の中にて、折柄同じ客車

に乗合の客はなし、自分一人にて静かに神様に見え、深く其愛と誠信とを思ひ、以來は何んなどがあつても、決して不信仰に陥るまいと決心したのである。私が汽車の窓から波うつ野の作物、愉快氣に歩く羊の群、又は輝く大空の景色など眺むる時、神様の御聲があつて、「汝、何をか懼るゝや。我は全能の神にてあるに、汝の最小き需用を充すと能はざる者の如くに考へて居るか」と宣ふ故。私は畏み答へて、「オ、主よ、それにて充分であります。私は此後は唯あなたにのみ依頼します故、私の不信仰を赦し給へと申しました云々。」此の如く神様は私共人間に不斷の實物教育を施し給ふ者である。即ち其毎日出會す物事に由つて、これは此うせよ、あれは彼せよと、言はぬ許りに仕向けて導き給ふ者である。其故私共は神様の御攝理を見て其思召を窺ふ様でなくてはならぬ。

第四、神様の聖旨は又聖靈に由つて直ちに私共の良心に告示するものである。即ち聖書に、「汝右に行も、左に行も、其耳にこれは道なり、之を歩むべしと後邊に語るを聞ん。」又「我往くは爾曹の益なり、若し往かずば訓慰師爾曹に來らじ、若往

かは彼を爾曹に遣らん。彼來らん時爾曹を導きて、凡ての眞理を知しむべし」などいふてあるのは、何れも此聖靈の御導きのことをいふたるものである。殊に静かな森の中か、又は密室の内に於て、或は夜深て四隣も静かになりたる頃など、祈念を凝らしつゝ、俟望んで居ると、忽ち何んとも言へぬ莊重なる感想が湧て参り。又胸の中に聲があつて、或は其日頃の罪を責め、或は進んで聖き生涯に入るべきとを教へ、十字架を負ふて基督に従ひ、人の救の爲めに心を碎くべきと等、勧誘するのを發見するであらう。而してこれは即ち神様の靈が人間の良心に囁き給ふ聲である。昔ヨルヂ、フオックスは諸方を遍歴して福音の眞理を尋ね歩け共、誰も満足なる教をなし呉るゝ者がないので、失望落膽の極に達した時、忽ち自分を教へ導く教師は基督の他にないとを教られた。即ちフオックスが自分で其當時の有様を書たものの中に、「私が僧侶と其他の凡ての人々に置たる一切の望は絶果て、最早外より私を助け、私に忠告を與へ得る者は誰もないとを發見したる時。オ、其時私は茲に唯一人、身の上に適當なる言を語り得る者があつて、それは即ち耶穌基督であるといふ聲を

聞いた。而して私の心は喜びを以て踊つたのである」と認めて居る。所謂「爾曹の導師は一人、すなはち基督なり」とは此事にて。耶穌基督は昔肉體を以て弟子達の間に在し、且暮有難い教を垂れ給ふたと同じく、今も其靈を以て私共の衷に宿り、一切萬事に其御導きを與へ給ふ者であるハレルヤ。此の如く神様は、第一聖書に由り、第二聖徒に由り、第三攝理に由り、第四良心に由りて其聖旨を現はし給ふものである。「人皆教を神に受けん」とあるのは此事ではないか。それ故に私共は神様の聖旨に従はねばならぬ。一切萬事唯神様の御聲に聽従ひ、其なれと仰せらるゝ儘になり、又其なせと仰せらるゝ儘を行ふ者とならねばならぬ。聖き生涯とは即ち聖旨に従ふ生涯のといふのである。「我を召て主よ主よと曰もの盡く天國に入るに非ず。唯之に入る者は我天に在す父の旨に遵ふ者のみなり。其日我に語りて主よ主よ、主の名に託りて教へ、主の名に託りて鬼を逐ひ、主の名に託りて多く異なる能を行しに非ずやといふ者多からん。其時我彼等に告げ、我嘗て爾曹を知らず、惡をなす者よ我を離れ去れと曰ん」とあり。假令基督信者と名乗り

基督教の傳道をなし、又は基督教主義の事業に従事するとも、平生天の父の旨に遵はぬ者は、是即ち「惡をなす者」である。基督と何等の關係もなきものだといふとある。恐れて又懼るべきとではないか。

諸君は神様の聖旨に服従せねばならぬ。服従に大切なるは心から服従するところである。(羅六〇十七)常に服従するところである(腓二〇十三)凡ての事服従し、(創六〇廿三)直ちに服従するところである。(拉一〇十六)而して又死に至る迄順ふところである。(腓二〇八)貴君が若家族の迫害を恐れて救を告白し兼て居る者であるか。基督は「地に泰平を出さん爲めに我來れりと意ふ勿れ、泰平を出さんとに非ず又を出さん爲めなり」と、仰せられて居るではないか。結果が何うであらうと關はず、大膽に其信仰を告白なされ。貴君が若不義の利益を棄て兼て、心ならずも不正の業務を營んで居る者であるか。基督は「若人全世界を得るとも、其生命を喪はば何の益あらんや」と御戒めになつて居る。靈の啓示に聽従ふて速に其營業をも改めなされ。貴君は又隠れたる罪があつて、之を棄て兼て居る者であるか。基督は、「若右の眼爾を罪に陥さば拔出して之を棄よ」

と、宣ふて居るではないか。斷然其罪との腐れ縁を絶切り、身を神様にお獻げなされ。神様が若し貴君を傳道に召し給ふならば、貴君はイザヤと偕に「我こそ、に在り我を遣はし給へ」と言はねばならぬ。神様が若し貴君の金をお求めになるならば、貴君は古への信仰篤き婦人達と偕に「其所有を以て耶穌に供事」奉らねばならぬ。神様が若し貴君の家族を獻ぐるとを求め給ふならば、貴君はアブラハムの如く「其獨子を惜まず、之を祭壇の上に置かねばならぬ。神様が「此世或は此世にある物を愛する勿れ」と命じ給ふ故、貴君は寄席や芝居に浮れ歩くべき筈ではなく。神様が「食ふにも飲むにも神の榮を顯はすべし」と宣ふ故、貴君が禁酒禁煙等を勵行すべきは無論のとである。神様が「金と眞珠と價貴き衣を以て裝飾とせず、善行を以て裝飾とせよ」と仰せらるゝに、貴君は何故紅白粉や、金鎖を以て身を装ふとを好むか。神様が「道路や藩籬の邊に行き、強て人々を連れ來れ」と命じ給ふに、貴君は何故行軍に加はり、野戦に立會ふとを耻ぢるであらうか。預言者イザヤは裸 跣にて神様の證人となつたといへば、貴君も喜んで救世軍の制服位着用すべしと筈ではないか。

又使徒達は耶穌の名の爲めに、耻辱を受くるに足る者とせられし事を喜んだといへば、貴君も亦世の人の救の爲めに耻と苦みとの十字架を負ふべき筈ではないか。神様にお従ひなされ。今直ぐ靈の聲にお順ひなされ。今日若し其聲を聽ば爾曹心を剛愎にする勿れ。「夫れ順ふ事は犠牲にまさり、聽くとは牡羊の脂にまさるなり。そは反逆は魔術の罪の如く、抗戻は虚しさ物に事ふる如く、偶像に事ふるが如し」といふてあるてはないか。

(10) 戦争的の聖潔

基督我儕の爲めに己の身を舍給へり。是我儕を諸ての罪より贖ひ出し、且己の爲めに己の民を潔め、之をして熱心に善事を行はしめん爲めなり。(多二〇十四)

こゝに基督が私共の爲めに命を棄給ふたる御目的に就き、二つ三の大切なることを教へてある。第一、これは私共の罪を贖ふのみならず、亦私共を罪より潔むる爲めである。第二、基督は己の爲めに一種特別の人民を造り出し給ふものである。第三、其人民は又熱心に善事を行ふ者であると等である。今少しく其説明しを試み度と思ふ。

第一、基督は私共を凡ての罪より潔むる御方である。所謂罪より潔められたる生涯の如何なるものかといふとに就ては、パウロが加拉太書第五章に説いたる所が、甚だ詳細である。即ち次の如し。「我謂ふ爾曹靈に由りて行むべし。然らば肉の慾を成すと莫らん。そは肉の慾は靈に逆らひ、靈の慾は肉に逆らひ、此二の者互に相敵

る。是故に爾曹好む所の事を爲すを得ず。然ど爾曹もし靈に導びかるゝ時は律法の下に在ざるべし。靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、樽節、此の如き類を禁ずる律法はある事なし。夫基督に屬する者は肉と其の情及び慾とを十字架に釘たり。若我儕靈に由て生なば亦靈に由りて行むべし云々。」(拉五〇十六至廿五) ジョン、ウエスレーは嘗てフレッチャヤーの死を惜み、「此の如く内も外も共に神様に献げ、其品格には又一點の非難すべき所なき人物は、歐羅巴にも米國にも他に見出すとが出来ない。恐く此世で復と此の如き人物に出會ふとは、六かしいとかと思ふ」と申ししたが。其フレッチャヤーが自らの聖潔の實驗に就て證したる所は次の如し。

私は基督を全世界に告白し、又三一の神様の前にて諸君に向ひ、自分が今實に罪に死したる者であることを宣言する。私は悪と「基督と併に十字架に釘らる」といふ語を用ゐない。何故かといふに、斯く言へば何か漸次罪に死する様な意味にとる人があるかも知れないからである。併し乍ら私は明言する。私は罪に死して神様に由つて生きて居る者である。基督は我預言者、祭司又王にして、我衷に宿れる聖潔、又我凡てに於ける凡てである。

と。ブリス大將は又古への聖徒ブラムウエルの風を慕ひ、其長男に同じ名前を命られた程であるが。其ブラムウエルの實驗談には又、

我靈魂は唯感嘆と愛と讚美とに滿されて居る。私は今日迄二十六年間此の如き自由を以て世を渡つて居る。神様に榮あれ。私は神様に支へられ、信仰に由つて立つ者である。而して私は神様が何を私に成給ふたかといふことを宣言する義務があると信じ、いつも機會さへあれば必ず之を勉めて居る者である。

といふてある。マダム、ギヨンといふ人は、又稱義事と聖潔との教理を主張したる爲めに、四年間牢屋に入られたる婦人であるが、其獄中にて作りたる歌の一節には、

我は籠中の禽に似て外に飛翔ることが出来ず、我翼は堅く縛られて居れど、我心には自由がある。牢屋の壁は我靈魂の飛び翔ること、自由とを妨ぐることは出来ない。

といふ様な意味を詠んである。然らば此の如き貴き聖潔は、唯宗教家や、又は救世軍の士官のみの經驗すべきものであるかといふに、決して然うてはなく。これは實に凡ての基督に屬ける人々が、皆必ず受けねばならぬ筈の祝福である。其事に就てブリス大將の言葉に「諸君も亦境遇が悪くて聖潔を受けられぬと言ふ人々であるが。然らば昔三百年間神様と偕に歩んだるエノクのとを考へて御覽なされ。エノクは

人を避けて山の中に入つて居つた預言者ではなく、却つて妻子もあれば、世間の人との交際もあり、毎日の職業を勤め、今日の諸君と同様邪惡なる世に住るながら、よく彼の様な生涯を送つたものである。「私共は全く潔められて、神様と一緒に世を渡る者とならねばならぬ。エノクが三百年間、神様と偕に歩んだといふ經驗は、亦今日の私共に眞似の出来ないとはない。

第二、潔められたる人々は、此世に對して一種特別の人民たるべきものである。其のわけは、此世の人は人間にのみ目をつけて生活すれ共、私共は神様の思召の儘に生存へる者である。此世の人は己の益のみ求むれ共、私共は他人の幸福を求め。此世の人は地のとをのみ思へ共、私共は天のとを思ひ。此世の人は利の爲めに動け共、私共は愛に由つて働さ。此世の人は肉に事ふる者なれ共、私共は靈の爲めに生きる者である。其動機が此の如く全く相違するが故に、潔められて事毎に神様の聖旨を行ふ者と、此世の人と、膚の合ぬのは固より當然の事と謂ねばならぬ。それ故私共は強て世俗と調和するを求めてはならぬ。却つて嚴重に己が立場を守り、此世の人

を自分共の方に引付けるとをこそ勉むべき筈のものである。「爾曹不信者と構ふこと勿れ。蓋義と不義と何の侶なるとかあらん、光と暗と何の交はるとかあらん、基督とペリアルと何の合ふとかあらん、信者と不信者と何の干かるとかあらん。神啓て我彼等の中に住り且行まん、我彼等の神となり、彼等我民とならんと曰給ひし如く。又爾曹彼等の中より出て之を離れ、汚穢に捫ると勿れ。我爾曹を納ん。我爾曹の父となり、爾曹わが子女となるべしと曰る、是全能の主の言なり」と。此點に就て神様の聖旨は最も明白である。私共は世に住へ共世の屬にあらず、肉に在りて生くれ共肉の爲めに生存へる者ではない。其故に私共は世の流行を賤み輕薄なる風潮に逆はねばならぬ。又其肉慾を擯まにし、金錢に事へ、虚名を慕ひ、娛樂を逐ひ求むる、浮た風俗に反對せねばならぬ。私は嘗てブリス夫人が、其母から兒供に着せよとて立派な上着を贈られた時、之に答へられたる手紙を讀んで、其眞實に感動したるとがある。即ち左の如し。

母上よ、あなたがお送り下された結構な兒供の上着に對し、厚く御禮申し上げます。唯一つ共に就て當惑

して居りますのは、上着が餘り立派過るとであります。以來此ういふ場合には遠慮なく此方の望を申し上げますから、宜くお含みを願ひます。私共は何うしても此ういふ點に於て、人々に手本を見せねばなりません。私自分には今更何を着たとて、然んなどて自分の心を動かさうとは思ひませぬけれども、子女のとは仲々油断がなりませぬ。殊に私共の周圍には兎角世俗の弊風に傾き易い人々が居つて、私共はそれ等に善き手本を見せねばならぬ筈故、何處迄も質村な身だしなみが大切であります。ア、主よ私を助け給へ。母上よあなたに失禮などを申し上げる積てはありませぬけれども、實際私共は基督の御爲めに此世の華美驕奢なる風習を打破らねばなりません。けれ共あなたの御親切に對しては、固より此上もなく忝なく覺えて居ります。この私の心中は何分にも御推察を願ひます。

昔ロトは神様と此世とに兼事へんとしたる人であつた。即ちソドムの榮華を見棄てるところが出来ない故、其町の外れに移住し、信仰も棄てないが、然りとてソドムの利益にも與かるとを勉めた。併し町外れては何彼に不便利のところが多し故、間もなく町の内に轉宅するようになる。ソドムの人々は皆目をロトの方に注ぐ様になつた。彼人は基督信者だから身持が善い上に、然りとて叔父のアブラハムの様に窮屈な所がない。分つた人だ。話せる人物である。間もなく推されて其町長となり、一門に坐

する一程の榮譽ある身分とはなつた。而して二人の娘は町の有力者の息子に嫁く約束が出来、ロト夫人といへば當時交際社會の花と云はるゝ有様。處て基督信者が此の如く社會の勢力を得た爲めに、非常に神様の御榮が揚つたとかといふに、決して然うてはなかつた。ロトは二十年間ソドムの有力者と稱へられたけれ共、終に一人の改心者をも起すと能はず。却つて周圍の輕薄なる風俗の方は、遠慮なく其家庭に入込んだため、神様の御怒の日には、婿は勿論其妻さへも救ひ得ず、娘と三人、命からく漸く硫黄と火との天罰を免れたといふとである。ロトは輕ふじて救はるゝ者の先祖である。又二人の主人に事へんとして失敗したる者の鑑であると謂ねばならぬ。けれ共アブラハムは神様に選ばれ、所謂「潔められたる一種特別の人民」として世を渡りたる者である。一生涯天幕の生活に甘んじ、到る處祭壇を築いて神様を拜み。地に在つては自ら賓旅なり、寄寓者なりと言ひ。軍の分捕品を贈りたるソドムの王に向ひては、「我天地の主なる至高き神エホバを指て言ふ、一本の絲にても、鞋帶にても、凡て汝の所屬は我取ざる可し」と答へ。其子の爲めに妻を娶る時には、

「汝彼處より我子に妻を娶るべし、吾子を彼處に携へ歸る勿れ」と言ふて、何處々々迄も堅く信仰に立ち、人を己に化するとも、己れは人に化されぬといふ精神を以て、終迄立派に選民の資格を立てとほしたる結果が。神様に祝まれて「死たる者の如き一人より、天の星の多きと、海邊の砂の數へ難きが如く、其子孫は榮え、其感化は未代迄も流布するに至つたを見受ける。私共はロトの微温くして曖昧なる態度を學んではならぬ。却つてアブラハムの嚴格にして一步も譲らざる、信仰の足跡を辿るべきものである。

● 第參、潔められたる人は、又熱心に善事を行ふ者でなくてはならぬ。中にも人の靈魂を救ふ導くと、善事中の善事、又最も大なる善根功德であるが故に、潔められたる人は殊に世の人の靈魂を救ふとに熱心すべき者である。私共は銘々箇々、皆其周圍の人々の救主とならねばならぬ。靈魂を救ふとを以て、單に救世軍の士官や、又は所謂宗教家のみの務であると思ふてはならぬ。これは凡て基督に救はれたる者の責任である。救はれたる者は其以來、世を救ふより外に此世にあつて何等の目的

をも有てはならぬ筈である。其理由は左の如し。

(一) 神様は此世に天國を打建んとを望み給ひ、其爲めに働く責任を私共に授けてお出なさる。即ち「聖國を臨らせ給へ」とは、私共が旦暮の祈禱の辭ではないか。而して聖國を此世に臨らす唯一の方法は、箇々の靈魂を救に導くとである。

(二) 私共は又基督の心を心とすべき者である。凡て基督の靈なき者は基督に屬する者なり。「爾曹基督耶穌の意を以て意とすべし」などあり。而して基督の心は即ち「此至微者の一人の亡ぶるをも好まず、一喪はれたる者を尋ねて救ふ」心であるが故に、基督に在ると言ふ者は亦必らず先づ他人を救ふ爲めに働く可き筈の者である。

(三) 次に基督の宗教は愛である。而して愛は人の靈魂を愛するより大なるはなき故、私共は己を忘れて人の救の爲めに戦はねばならぬ。「主は我儕の爲めに生命を捐給へり。是に由つて愛といふとを知りたり。我儕亦兄弟の爲めに生命を捐つべし」とは此事ではないか。

(四) 殊に世の人は牧者なき羊の如く、流離になつて彷徨て居る。私共が彼等に對してなすべき事の第一は、之に書物を教へるでなく、之に御馳走を食へさせ、之を嬉ませ、之を金持にするとはなくて、之を罪愆より救ひ、愛の父なる神様に立歸らしむるとである。私共が若し同胞兄弟を基督の救にしむるとが出来ないならば、其他に何をするが出来ても、必竟生きた甲斐のある世渡をして居るものとは申し難し。

其故に潔められたる人々は、唯靈魂を救ふとを生涯の大目的とし、身を以て周囲の人々の救主となることを心がけねばならぬ。とはいへ萬人が萬人、皆朝から晩迄説教許して居つたといふて、それで世の中が救はるゝわけのものではない故。或は神様の御命令の儘に、世を救ひ度との大目的を抱いて商人となり、或は又靈魂を救ひ度との大望を有つて職工となり、百姓となり、船乗となり、醫者となり、官吏となり、又は救世軍の士官、下士官、兵士となり。丁度昔忠臣蔵の四十七士が、薪割、竹賣、夜そば賣と様々に身をやつしつゝ、主人の仇を返した如く。私共は又様々に姿をか

へ、各方面から總がかりにて靈魂を救ひ、聖國を臨らせん爲に戦争すべき者である。即ち女皇ビクトリア陛下は帝王にして世の救主たりし者である。グラッドストーンは政治家にして世の救主たりし者である。ゴルドン將軍は軍人にして世の救主たりしもの、ナイチンゲール嬢は看護婦にして世の救主たりしもの、バンヤンは補鐵工、ピリイ、ブレイは礦夫、ナアマンの小間使は奉公人、アクラとブリスキラとは天幕製造人、封永生は又ランプ口金直として、共に其周囲の人々の救主となりたる者である。私共も亦必ず銘々一箇の救主とならねばならぬ。耻辱と苦勞との十字架を負ふて、世の救の爲めに戦ふ者とならねばならぬ。十字架はいつの時代にも世の救主が甘んじて受くべき運命である。十字架は基督にのみ負はせ奉るべきものではないのである。

(一一) 如何に靈魂を救ふべきか

道路や溝の邊に行き、強て人々を連れ來り、我家に盈しめよ。(路十四〇廿三)

ソドム、ゴモラの二つの町が目餘る罪惡を犯し、神様の御旨を痛めて悔ゆることを知らない故、神様は天から硫黄と火とを降らせて、之を焼討にするを御決定になつた。然るに此ソドムの町にアブラハムの甥のロトが住んで居り、其家族と共に別に篤信といふ程ではないけれど、兎も角も神様を敬ふとを知り、餘り甚しい罪を犯さず、毎日を送つて居る。而して此ロトに就ては叔父のアブラハムが熱心に祈り求めて居る所もあるのて、神様はこれをも他の極惡人と一緒に滅すは不憫であると思召し。乃ち特に二人の天の使をソドムの町に遣し、前以てロトと其家族の者と共に注意を興へ、其夜の中に町から外へ落延ればよし、若し然もなくは必ず他の罪人と一緒に滅ぼさる可きとを告示し。それでも愚頭々々するロトと其家族とを督促して、其手を曳て町の外に連れ出し、辛くも親子三人をば救ひ出されたといふとがある。(創

世記十九章) 今此天の使がソドムにての働さ振は、如何にもよく今日の私共救世軍人が、罪惡の世を救ふ爲めに働く運動法を教ふるものと思ふ故、今少しく其等の點に就て考へたいのである。

第一、喪はれたる者を尋ねる事。天の使はソドムの町に踏込んだ。ソドムは是罪惡の巢窟である。ロトの如き微温い信者が浮かり入つて來ては俗化せられて、危く滅亡に墮んとしたる町である。併し乍ら天の使は斯る罪に穢れたソドムの町に踏込んだ。何の爲めかといふに、これは固よりソドムの罪惡の仲間入をする爲めではなく、亦好奇心に驅られて然らういふ穢れた町を視察する爲めでもない。全く唯神様の御命令に由り、其處に在る靈魂を救はん爲めに來たのであつた。彼等は何處迄も天の使の資格を穢さず、罪の衝に入つて其働さをなしたる者である。是即ち後年基督が、「人の子は喪ひし者を尋ねて救はん爲めに來れり」と、宣ふたると同じ精神である。待つて居つて人の救を望むのではなく、却つて出て往て亡ぶる靈魂を救ふ所の精神である。私共救世軍人は又出て往て喪はれたる者を尋ね、これを基督の救に入らし

めねばならぬ。天の使の如き潔き心を善へ乍ら、進んでソドムの如き罪惡の深淵に、溺死んとする靈魂を曳出す爲めに働かねばならぬ。その爲めに「とこのころ」を家毎に賣らねばならぬ、街頭に野戦を營まねばならぬ、行軍せねばならぬ、歌はねばならぬ、制服を着ねばならぬ、近所隣家を訪問せねばならぬ。工場にも、店頭にも、汽車の中にも、機さへあつたら罪人を警めて、これを救主に導かねばならぬ。これは救世軍人の特色である。即ちライトフット博士といふ人が「私共は彼方から一人、此方から一人、選ばれた様な會衆を得ることを以て満足し。主が道路や藩籬の邊に行き、強て人々を連れ來り、我家に盈しめよとの、御命令を忘却する如きとがあつてはならぬ。救世軍は此點に就て高尚なる教訓を與ふものである。救世軍が何等の申し分があるにもせよ、少くとも教會が取失ふたる「強て世界人類の靈魂を救ふ」といふ思想を、今一度奮ひ起さしむるものである」と申されたるは、極めて適評である。と謂はねばならぬ。

第二、少數の人々の爲に苦勞すべき事。天の使は五千人も一萬人もの靈魂を救ふ爲

めにソドムの町に來たのでなく、僅か三人か五人の生命を助ける爲めに、態々出て來て彼程の苦勞をなしたるものである。其如く今日の私共救世軍人は亦、僅か數人の靈魂を救ふ爲めに、何んな苦勞手數をも甘んじて働く覺悟がなくてはならぬ。果物を取るにも傷をつけぬ様に取ふと思へば、竿てばさくくと打くのではなく、木に攀つて一箇宛之をもぎとるではないか。人を救ふにも亦それと同じく、説教や、或は演説に由つて、一網に數十百人を救ふとも出來ぬわけではないけれども、つまり一番大切なるは一人宛膝詰で説けて、愛と誠とを以て之を導くことである。救世軍の一司令官は、或時「三十二年間に全世界を救ふ法」と名くる一表を作り。且次の如く論じられたのであつた。「若し茲に一大宗教家が現はれ出て、年が年中、毎日七千人宛を救に導いて歩いたとした處で、全世界の人類を殘らず救ふには、大凡九百年の歳月を要する勘定である。然り乍ら若しこゝに一人の基督信者があり、年毎に一人の人を救に導き、其救はれたる人は又順送りに必らず毎年一人宛を基督に連れ來るものとすれば、其結果は僅か三十二年の間に無慮二十一億四千七百四十八萬人を

救ひ得るととなる。而して目下全世界の人口は、大凡十四五億萬といへば、假令此三十二年間に何んなに生死の變動があつたとしても、必らず美事全人類を救ひ得べし計算である云々。今其表を左に掲ぐるとと致さう。

● 参拾貳年間に全世界を救ふ法

| 年 | これだけの人が | これだけの人を救ひ | これだけの数になる |
|------|---------|-----------|-----------|
| 第一年 | 〇 | 〇 | 一 |
| 第二年 | 一 | 一 | 二 |
| 第三年 | 二 | 二 | 四 |
| 第四年 | 四 | 四 | 八 |
| 第五年 | 八 | 八 | 一六 |
| 第六年 | 一六 | 一六 | 三二 |
| 第七年 | 三二 | 三二 | 六四 |
| 第八年 | 六四 | 六四 | 一二八 |
| 第九年 | 一二八 | 一二八 | 二五六 |
| 第十年 | 二五六 | 二五六 | 五一二 |
| 第十一年 | 五一二 | 五一二 | 一、〇二四 |
| 第十二年 | 一、〇二四 | 一、〇二四 | 二、〇四八 |
| 第十三年 | 二、〇四八 | 二、〇四八 | 四、〇九六 |
| 第十四年 | 四、〇九六 | 四、〇九六 | 八、一九二 |

| | | | |
|------|---------------|---------------|---------------|
| 第十五年 | 八、一九二 | 八、一九二 | 一六、三八四 |
| 第十六年 | 一六、三八四 | 一六、三八四 | 三二、七六八 |
| 第十七年 | 三二、七六八 | 三二、七六八 | 六五、五三六 |
| 第十八年 | 六五、五三六 | 六五、五三六 | 一三一、〇七二 |
| 第十九年 | 一三一、〇七二 | 一三一、〇七二 | 二六二、一四四 |
| 第二十年 | 二六二、一四四 | 二六二、一四四 | 五二四、二八八 |
| 第二一年 | 五二四、二八八 | 五二四、二八八 | 一、〇四八、五七六 |
| 第二二年 | 一、〇四八、五七六 | 一、〇四八、五七六 | 二、〇九七、一五二 |
| 第二三年 | 二、〇九七、一五二 | 二、〇九七、一五二 | 四、一九四、三〇四 |
| 第二四年 | 四、一九四、三〇四 | 四、一九四、三〇四 | 八、三八八、六〇八 |
| 第二五年 | 八、三八八、六〇八 | 八、三八八、六〇八 | 一六、七七七、二一六 |
| 第二六年 | 一六、七七七、二一六 | 一六、七七七、二一六 | 三三、五五四、四三二 |
| 第二七年 | 三三、五五四、四三二 | 三三、五五四、四三二 | 六七、一〇八、八六四 |
| 第二八年 | 六七、一〇八、八六四 | 六七、一〇八、八六四 | 一三四、二一七、七二八 |
| 第二九年 | 一三四、二一七、七二八 | 一三四、二一七、七二八 | 二六八、四三五、四五六 |
| 第三十年 | 二六八、四三五、四五六 | 二六八、四三五、四五六 | 五三六、八七〇、九一二 |
| 第三一年 | 五三六、八七〇、九一二 | 五三六、八七〇、九一二 | 一、〇七三、七四一、八二四 |
| 第三二年 | 一、〇七三、七四一、八二四 | 一、〇七三、七四一、八二四 | 二、一四七、四八三、六四八 |

ブリス大將の言に、「往け、十四億の生靈を救はん爲めに地の極迄も往け。阻喪する

勿れ。これは成得べきのとてある。若し地上の凡ての聖徒が悉く其本分を盡すに於ては、世界は向ふ十年間に救はるべく。救世軍が神に誠を致すに於ては、世界は五十年間に救はるゝてあらう」と言ふてあるのは、同じ意味を説いたものである。昔基督は唯一人のニコデモを相手に、靈に由りて更生るべき大なる眞理を教へ。又唯一人の不身持なるサマリヤの女の爲めに、活る水の貴き教訓をお説きなされた。使徒行傳にはピリポが僅か一人の靈魂を救ふ爲めに、遙々野に遣はされたといふとがあり。パウロは又「如何にもして數人を救はん爲めに、衆の人の狀に循ふて働いて居ると告白した。貴君の妻の爲め、夫の爲め、親の爲め、子の爲め、主人の爲め、朋輩の爲め、隣人の爲め、又圖らず話相手となつたる人々の爲めに、力を盡して働きなされ。二人の天の使は僅か數人を救ふ爲めに、態々ソドムの町に遣されたといふとを忘れてはならぬ。

第三、率直に罪人を警しむべき事。何んなに體裁を繕ふても罪人は矢張罪人である。何うせ基督に頼らねば亡ぶる筈のもの故、遠慮なしに其實際の有様を彼等に警告せ

ねばならぬ。ソドムの天の使は明ら様に其町の罪と天罰の恐ろしい有様とを告げて、ロトと其家族とを警めた。併し乍ら今時の基督信者は、宗教の社會に及ぼす影響だとか、信仰と知識との關係だとか、又は道德倫理の基礎が何うの、家庭改良の主義が此うのといふ様なと迄は盛んに論ずれども、偕面と向て「貴君は神様の前に罪人である、基督に頼らねば滅亡に墮するぞ」といふ様なとを話し兼ねる。人の子よ我汝を立て、イスラエルの家の守望者となす。汝我口より言を聞き、我に代りて彼等を警むべし。我惡人に向ひて惡人よ汝死せざる可らずと言んに、汝其惡人を警めて其途を離るゝ様に語らずば、惡人は其罪に死なれど、其血をば我汝の手に討問ひべし。然ど汝若し惡人を警めて、離へりて其途を離れしめんとしたるに、彼其途を離れずば彼は其罪に死ん、而して汝は己の命を保つとを得ん。(結卅三章) 私共は福音を耻とせず、思ひ切つて基督と其十字架とを證しせねばならぬ。罪に亡ぶる人々に直言して之を戒むるとは、亦救世軍人の特色である。或教師が其教會にて色々天國の美はしいとや、楽しいと、又幸福なると杯説た後に「それとも諸君が若し地獄の

恐ろしいと、禍ひなると、苦々敷と杯閑度ば、街頭に往つて救世軍の野戦にお列りなされ」と言ふたさうである。私共は天國の樂みを説て人を慰める許でなく、亦其罪と罰とを警めて、人を眞正の救に導かねばならぬ。或時一人の救世軍兵士が平服にて旅行中、汽車の中で乗合の一紳士に向ひ、「貴君は救はれて居りますか」と話しかけると。紳士は喫驚し乍ら、熱々相手の顔を眺めて、「貴君は救世軍人ですね」と言ふ。「何故私が救世軍人だといふとが分りますか」と問返すと。答へて、「それでも今日眞實に靈魂の爲めを思ひ、初對面の人を救に導かふとする者は救世軍人の外には滅多にないからである」と言ふたさうである。私共はどこへ迄も率直に世の罪人を警醒せねばならぬ。これは取分け救世軍人の責任である。

第四、強て人々を連れ來るべき事。ロトと其家族との愚頭々々して決しないを見、天の使は之を督促した。果は其手を執つて之を滅亡の町から外に引張り出したといふとである。私共も亦罪人に其悔改めを督促せねばならぬ。借錢取が若し人を督促する権利があるものならば、私共救世軍人はそれよりも愈つて神様の前に山な

す罪の負債のある人々を督促して、之を基督の救に引き入る権利がある。世の人は今も古へのロトと同様、現世の名利や情慾に未練を残して、仲々罪のソドムを出ない故、私共は唯説教や小冊子の配附位では安心が出来ない。必らずや今一步踏出して之を漁り、一之を説き、附纏ふて之を勧誘し、否が應でも其罪惡を棄て、神様に従ふ所まで導かねばならぬ。これが即ち基督の「強て人々を連れ來れ」と仰せられたる意味である。亦ブリス大將が「罪人を迫害せよ」といはれたると同じ意であると思ふ。罪人は何時でも神様の僕を迫害して、再び罪惡に後戻させんとを努めて居るに、何故基督の軍人は其反對に、罪人を迫害して之を救に導くとか出来ぬであらうか。私共はソドムに於ける天の使に倣ふて世の人を督促し、其手を引張つて之を救の道に旅立たしめねばならぬ。米國の救世軍に大校ジョー、ジ、タークといふ勇士がある。眞に大膽不敵の剛の者にて、平生救世軍の御恵に感激し。古への保羅と同様「我福音を宣傳へずば實に禍ひなり」と深く其心に感ずるものから。何んなどをしてなりとも、唯此大なる御救を遍ねく世の人に知らせ度と、必死になつて盡力して

居る。ジョー、ジ、タークの蝙蝠傘は、よく傘屋の看板に見る様な白と紅とだんだらのものにて、其一けた毎に大文字にて「死は近し。」「審判の日來らんとす。」「天國に行く用意ありや」など認めてあり。それを晴雨といはず、寒暑を論ぜず、何時でも翳して屋外を往來する。又同人は「耶穌は力ある救主なり」といふ一句をゴム印にしたのを持って居り、書物にでも、道具にでも、手紙にでも、手あたり次第にべたべたと捺すのである。或る時紐育の市にて士官會のあつた折、何分士官達の逗留すべき家が足りない故、本營の方では手分て救世軍の同情者を頼んで廻り、士官達を泊めて貰ふことになつたが、爰に一人の婦人があつて、大層に立派な生活をなし、殊に美事な家を有つて居るのを自慢であつたが。此度救世軍の士官を其家に泊めて呉れまいかとの頼みを受け、兼て幾許か宛の金を救世軍に寄附はして居るもの、未だ一向軍隊の様子としては知らぬ故。暫しためらふたる末、試みに一人丈引受けませうとの應對をなし、頼て家中で一番立派な一間を掃除し、何んな人物が来るかと待構へて居ると。其當日譬へば日本の千金丹賣の様に、傘一ぱいに何んだか文字

を書列ねたるものをさし、手にはコルチット(樂器)の入つた箱の、而も其外部には、「基督の恵に由つて救はれたり。ジョー、ジ、ターク。」と書附けたるを提げて来た男がある。これは堪らぬ、何んたる狂氣染みた人間が舞込んで来たとかと、一時は呆れ惑ふたが。止むとを得ぬゆゑ、兼て用意の一室に通し、其鍵を渡して置く。以來同人は右の一室に起臥し、飯時になれば家の人々と一緒に食へては又外へ出かける。何か物を言へば始から終迄、唯基督、基督、救、救といふ許り、一向其他のとは話さねど、それにしては思つたより柔しい所のある面白い人物である。かくて後三四日過ぎてジョー、ジ、タークは最早士官會もすんだので、鍵を其婦人に返し、これ迄世話になつたお禮をいふて歸つて行つた故。婦人は何の氣もなく、後から其部屋を取片付に行つて見ると、こは如何。机の上にある紙や、状態は勿論、果は周囲の壁にさへ數ヶ所「耶穌は力ある救主なり」といふゴム印を捺してある。これは何ういふ不都合などをする人であるかと、一時は大層腹を立てたが。さて其夜臥床に入つて後、不圖其「耶穌は力ある救主なり」といふ語の意味を考へ始め、種々思案をめぐ

ぐらして居ると。其うち何時しか自分の罪のとや、又は基督の救のとなど、追々其道理が分つて来て、終には翌る朝夜のほのくくと明くる頃には、全く悔改めて基督を信仰する心になり、乃ち寢衣の儘で彼のジョー、ジ、タークが泊つて居つた部屋に馳け入り、ゴム印を捺した紙など載ある机の上に身をもたせ、神様に嘆いて其御恵を求めたといふとである。かくて後其日の中に婦人は救世軍の本營を訪ね、ジョー、ジ、タークの行先を問合せたが、最早受持の小隊に歸つた後であつた故。婦人は直ぐに手紙を認めて同人に贈り、其改心の始末を述べて、何卒此次に紐育へも出の節は、必らず今一度御立寄を願ふと、最も丁寧に申し送つたさうである。古語に「過ぎて中す」といふとがあり。私共は當今善人といへば、唯もう卑屈で、因循で、蚤一匹も殺し得ぬ佛様の様なものだとのみ心得て居る世の中に、折々はジョー、ジ、タークの様な「獅子の如く勇ましき」義人を見るとを厭はぬ者である。

(一三) リバイバル

聖靈降臨に臨むに由りて後、爾曹力を受け、エルサレム、ユダヤ全國、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人と爲る可し。(徒一〇八)

リバイバルといふ字の意味は復興といふとである。即ち寢入込んだものが目を醒し、死かゝたものが元氣を恢復し、熄かゝつたものが今一度火の手を擧るとである。信仰の歴史は是リバイバルの歴史である。舊約聖書にはイスラエルの人民が罪を犯して神様を忘れ、様々の難儀苦勞に遭ふては忽ち思ひ當り、信仰を復興して神様に立歸つたといふ様な事實が満て居る。昔エリヤがカルメル山上に犠牲を献げ、天からの火が之を焚つくしたる時には、全國民一時に偶像を棄て眞の神様に歸依し、「エホバは神なりエホバは神なり」と申した。又ダニエルが獅子の穴を出て、神様が如何に義人を護り給ふかといふとの證明せられたる時には、バビロン國中悉くダニエルの神を畏れ敬ふ様になつた。バプテスマのヨハチが「野にて神の命令を受け、起つて悔改めのバプテスマを宣べ傳へたる時には、「ユダヤ全國及びエルサレムの人々

來りて、各々其罪を認らはし「たといひ。而してペンテコステの日には又、一度に三千人の罪人が悔改めて基督の救を求めて居るとを見受ける。使徒等は信仰復興家であつた。使徒行傳はリバイバル傳であるといふても差支ない。後世に於ても彼の美以派の開祖ジョン、ウエスレーが、聖靈に満されて説教する時、其聴衆の中から死人の如くばかりと倒れて罪を悔改むる者が起り。フィンニーが神様に用ゐられて盛んにリバイバル運動を行ふ時には、其町に入つて來る程の人々が、町境から皆一種異様の靈氣に襲はれ、殆んど基督に從はずしては出られなかつたといふことである。又或町では暫くリバイバルが続く間に、監獄に在る者が忽ち其三分の一に減じ。或工場ではフィンニーが自分の顔を見て冗談を言ふた一人の工女を、じつと見つめたばかりて其工女が居堪らず、涙を流して悔改め。それが本にて彼方からも、此方からも改心者が起り、仕事に手に付ないから、其日一日臨時に工場を閉して集會をしたといふ様なこともある。救世軍が創立以來今日迄四十餘年の歴史は、亦是斷間なきリバイバルの記録である。殊にブリス大將及び其夫人の一代記の如きは、目醒し

きリバイバルの事實に滿て居り、或町に半年か一年働いて居らるゝ間に、町の風儀が全く改まり、名代の悪黨が續々救はれ、芝居や寄席はお客がなくなつて寂れてしまひ、酒屋は廢業し、暖味屋は閉店し、警察や裁判所は無事に苦んだといふ様な例が多くある。即ちアーノルド、ホワイトが其著書「大なる思想」に於て「倫敦から若し救世軍を取除いたならば、新に七千人の刑事巡查を増すも、これ程に安寧秩序を保つとは六かしいと思ふ」といふた程の働さが、救世軍に由つて營まれて居るわけは。其零落したる同胞を濟度する爲めに營む感化救濟事業ばかりの効能ではなくて、却つて救世軍を通じて働さ給ふ靈の力、即ちリバイバルの勢力の大なるが爲めに、此の如きものと謂ねばならぬ。タツカー少將が或時「救世軍はリバイバル軍なり」といはれたのは、亦この道理を説かれたものと信する。リバイバルに由つて從來此世の煩悶と貨の惑とに心くらみ、神様のとも、靈魂の大事も、無我無由て暮して居つた罪人が改心する。リバイバルに由つて現在自分が救はれて居るか、否やの程も不憚なる基督信者が、本統に救の喜を経験する様になる。リバイバルに由つて儀式的に

基督を信仰して居つた者が、本氣で神様の聖旨を行ふ様になり、前には福音を耻ぢたる信者、十字架を負ふとを厭ふたる兵士が、今度は却つて基督の名の爲めに迫害を受くると喜びとする様になる。リバイバルの在る所には聖潔を受ける人々が多く現はれ、又何れも他人の靈魂に對する責任を感じる様になる。リバイバルの在る所は愛の精神の満ち溢るゝ所にて、自分が此世ながらの天國を樂むが故に、進んで其大なる幸福を他人にも頒たんと爲め、必死に盡力するに至るものである。リバイバルの在る所は又奇蹟の行はるゝ所である。即ち名代の惡漢無頼の徒が悔改めて、珍らしい程堅氣な人間となり、亂れたる家庭は調ひ、基督教の大反對者は變じて最も忠實なる耶穌の證人となる。此の如きリバイバルの働きは、固より人間業ではなくて全く神様の御業である。併し乍らリバイバルは地震や雷電の如く、人間の力で招くことも、止むるとも出来ない様な性質のものではなく。却つて米を播けば米が實り、麥を播けば麥が收れる如く、リバイバルは最も明白なる因果應報の理に由りて行はるゝものである。随つて私共が若し其筋道を踏んで之を求めんに於ては、何時でも

間違なく與へらるゝ所の祝福であることを知らねばならぬ。即ち聖書に「働勞りたる百姓先づ實を得べき也。」又「涙とにも播く者は歡喜とにも收穫らん。其人は種を携へ涙を流して出てゆけど、禾束を携へ喜びて歸り來らん」とあるのは此事である。私共はリバイバルを受くるに必要な條件を具して、神様の祝福を呼降さねばならぬ。神様の御力に由つて今の世の中に、も一度奇蹟を行はして戴かねばならぬ。諺に、「能筆は筆を揮まず」といふとがある。然るに神様は天下無二の能筆にて在るすが故に、若し唯私共さへ自由になつて、其御手に動かされて居つたならば。神様は能く禿筆の如き私共をさへ用ゐて、巧みに「救」の大文字を日本八十餘州の上に書せ給ふ御方であるハレルヤ。神様よ私共を助け用ゐ給へアメンアメン。

然らば私共は、如何にして斯る大なる靈の降臨を求むべきか。私共がリバイバルを得るには如何なる條件が必要であるかといふに、こゝに凡そ三つの大切な箇條がある。

第一、全く潔められて居るべき事。聖書に「エホバは全世界を徧く見をなはし、己

に向ひて心を全うする者の爲めに力を顯はし給ふ」とあり。神様に用ゐられんと欲ふ者は、必らず先づ全き心を以て専ら其御榮の爲めに盡す者でなくてはならぬ。それ故にリバイバルを求むる人は、先づ深く己を省み、少しでも残れる罪があるならば之を悔改め、怠れる務があるならば進んで之を果さんと決心し、全く心に疚しき所のない人間となつて、然る後其以上の祝福を願ひ求むべき者である。フインニ「は其名高き著作「信仰復興論」の中に、凡てリバイバルを求むる人々が反省すべき箇條として、下の如き諸點を擧げて居る。即ち

- (イ) 神様に對する忘恩(ロ) 神様を愛するとの不足(ハ) 聖書を讀むとの怠慢。
- (ニ) 不信仰(ホ) 祈禱を怠ると(ヘ) 恩寵を受くるに必要なる様々の方法を等閑にする(ト) 又は自分の義務を盡すとき、其中に精神がこもつて居らぬと(チ) 周囲の人々の靈魂を愛するとの不足(リ) 罪人に注意するとの缺乏(ヌ) 家族の爲めに盡すとの不足(ル) 世間に對する義務の怠慢(ヲ) 己を責むるとの不足(ワ) 人を警むるとの不足(カ) 克己の足らざると(ヨ) 世俗に流るゝと(タ) 高慢(レ) 嫉妬

(ソ) 貪婪(ツ) 誹謗(チ) 輕薄(ナ) 虚言(ラ) 瞞着(ム) 偽善(ウ) 神様の物を私しする
 (エ) 短氣(ノ) 他人の有用を妨害すると等である。

人が若し眞面目に、此等の諸點を一々我身に引當て考へ、成べくは紙と筆とを持って一室に退き、一々我と我身を吟味し、改むべき所は斷然悔改め、盡すべき所は神様の御助けに由りて直ちに之が實行に着手し、かくして此際全く其献身の誓約を新にするならば、これは即ちリバイバルを得るの第一條件を全うしたるものである。「然れば愛する者よ、我儕此約束を得たれば、肉と靈の凡ての汚を去りて自己を深くし、神を畏れて聖潔とを成就すべし」とあり。肉と靈との凡ての汚を去りて、全き聖潔を得、且之を持續くるとは、是れ大に神様に用ゐらるゝの第一歩である。

第二、信仰を以て祈禱すべき事。次に大切なるは信仰を以て祈禱するところである。フインニーの語に「リバイバルの下に祈禱の人あり」とあり、信仰の祈禱はリバイバルに最も必要なる條件である。神様は潔められたる人の心に祈禱の靈を遣り、知人朋輩の爲め、其小隊の爲め、其地方の爲め、罪人の救の爲め、墮落者の恢復の爲め、文

は名許りの信者の覺醒の爲めに、祈れ〜と命令し給ふ「聖靈も亦我儕の在弱を助く、我儕は祈るべき所を知れども、聖靈自ら言難さの慨嘆を以て我儕の爲めに祈れり」とは、此事である。それ故私共は心を澄して祈禱の靈に聽従ひ、油断して之を打熄すとならず様注意し、導かるゝが儘に神様に祈り、祈つたが上にも祈り、復重ねて祈り。求めたが上に尋ね、尋ねたが上に恵の門を叩き。根氣よく、著しき聖靈の降臨を俟望まねばならぬ。マカイ少將は有名なる救靈者にて救世軍の士官となつて最初の二十一年間に、五萬七千人を悔改めに導いたといふ豪傑であるが、それだけに亦祈禱に非常な力を有つた人である。其物語に、「私は救はれて五ヶ月の後に士官となつたものである。其頃は固より私共を養成する士官學校もなければ、後見に立つて呉れる聯隊長もない。全く單獨で自分を鍛へねばならぬ場合であつた。私は士官となつて間もなく一週間に一日断食し、又一晩寝ずに祈禱するに由り、兵士の精神を奮ひ起し、又市民を警醒して救に入らしむる力を受くべき必要を感じた。そこで直ぐに其實行に取りかゝつたが、それは〜随分骨が折れるたのである。終日

何も食はず唯水位飲んで部屋の中に居ると、物が食べたくなつて仕方がない故、態と財布を室に遺し、無錢にて寂しき場所に往き、數時間祈禱をして歸つた様などもある。又は徹夜の祈禱に就ても、右同様油断すると寝てしまふ恐がある故、祈りつゝ、俟望みつゝ、暫く部屋の中を歩き廻つては目を醒し、やがて復睨いて神様の前に眞實を注ぎ出すなど、色々苦心した末。後には何の苦もなく、終日の断食、又は終夜の祈禱をするのが出来る様になつた。或はこれは馬鹿氣たたとと嘲つた人々、否士官さへもあつたが、併しながら私はそれが神様からの御導きであると確信する故、断じて行ふたので、其爲めに受けたる利益は固より擧げて數へることが出来ない程である。即ち私の今日あるは此祈禱と断食とに由ることが最も多い。私は凡ての士官に皆私のやつた通りのとを爲されとは言はない。併しながらやつた方が可い人々の多くある丈は、疑ひもない事實であると思ふ。私自分には今も事情の許す限り之を實行して居るのである云々。「リバイバルを得ん爲めに特別の時間を定めて祈禱するのは、此上もなく大切なるとしてある。殊に同志の人々が申合せ、毎朝或は毎晩、或

は日中、或は土曜の夜あそく迄、心を合せて特にその爲めに祈るといふ如きは、最も良き方法である。ブリス大將は若い時、六かしい傳道地を受持つ毎に、先づ數人の熱信なる青年を集め、特別祈禱會を組織し、それを中堅として、段々に其町を震動す様な大運動を行ふて居られたといふとである。尙左に「老たる鍛冶」の篤き祈禱の實例を御紹介すると致さう。或時米國のある町に教會はあれ共、多年の間信者の信仰が眠り、會員の數は減つても増すといふとなく、町の中の若い者といへば十人が十人、皆な不信者といふ様な處があつた。こゝに其町外れに一軒の鍛冶屋があつて、其主人なる老爺は、信仰家ではあるけれども、舌がもつれて其言ふとが分明しない男であつた。ある金曜日のこと、此老爺は何時もの様に仕事をし乍ら熟々考へて見るに、何うも教會の様子が彼んなとはならぬと、頻りに心配になつて來た。そこで老爺は到頭其午後、半日丈仕事を休んで戸を閉めてしまひ、獨り一生懸命に神様に祈禱したのである。かくて次の日曜の日に、老爺は會堂の集會に出て、會の終つた時教師に向ひ、何んとか信者の信仰を奮ひ起す様、それ等のとに就て相談

會を開いては下さりませぬかと申出たが。教師は暫し躊躇したる後其計畫を受入れ、乃ち二三日の後に町の内で可なり大なる一軒の家を定め、一同其處に集會するとなつた。勿論皆な信仰の衰へて居る時として、餘り澤山の來會者があらうとは思はなかつたが、打寄つて見ると不思議にも家に入り切ない程の人々が集つた。而して始めの間は何れも控へて黙つて居つたが、そのうちに一人の男が忽ち大聲に叫び出て、「皆様よ何卒私の爲めに祈つて下さい」といふ。すると續いて一人あちらの隅から泣いて祈る者が現はれ、又一人此方の隅からも悔改むる人が出るといふやうな有様。果は幾人となく救を求むる者が現はれ、町中何の通からも此夜改心者の出なかつた所はないほどにて、神様の靈は著るしく集會の中に働さ給ふたのである。殊に不思議なるは後て此等の人々の懺悔談を聞くに、皆言ふ様、「私は去る金曜の午後から、頻りに私の罪のところが氣にかゝつて堪らなくなり、到頭今晚悔改めて基督の救を求めたのであります」といふたさうである。いふ迄もなく之は鍛冶屋の老爺が仕事を休んで祈禱をしたのと同じ時刻であつた。斯して神様は年寄で、無學で、貧乏で、

あまけに舌さへまはらぬ鍛冶屋の老爺の祈禱を聴き、多くの人々を救ひ、教會の信仰を奮ひ起し給ふたものである。諸君、あなた方も亦此同じ力ある神様に祈るとにより、人々の靈魂を救に導かれねばならぬ。祈禱は世界を動かす所の神様の御手を動かす」といふてあるてはないか。

第三、機會を捉へて努力すべき事。祈禱と共に大切なるはリバイバルの爲めに力を盡すとである。又は箇々の靈魂を救ふ爲めに有ゆる骨折を甘んずるとである。此至微者の一人の亡ぶるは、天に在す父の聖旨にあらず。「二人の靈魂は全世界よりも貴きものであるが故に、私共は其一人の靈魂の救はるゝ爲めには、如何許の苦勞をも甘んじて之が爲めに盡す様でなくてはならぬ。參謀總長プラムエル、ブーアの語に、「汝の祈禱に應へよ」といふとがある。祈禱に應ゆるものは唯神様許であるに、何故「汝の祈禱に應へよ」といはれたかとならば、それは唯口先にて神様に祈るのみならず、同時に手足を働かして其祈禱によさはしき努力を試みよといふの意味である。私共は神様の目醒しい御働を祈り求むると共に、苟くも神様が其靈を以て私共に

爲せと命じ給ふた程のとは、何んなに骨が折れ、手数がかゝり、又は耻かしく、さまざりの悪いとである共、押切つて進み、人の救はるゝ爲め、又御榮の揚る爲めに之を断行する様でなくてはならぬ。昔に一度之を断行するのみならず、根氣好く之を行ひ續けて行くのが大切である。殊に或人々を指名して其爲めに特別の祈禱をなし、之を訪問し、之を集會に誘ひ、之に信仰の書物を讀ませ、之に手紙を贈り、日中行つて話が出来ずば夜深けて後に訪ねて行き、夜行つて會へずば朝未だ暗い間に行つて、只一言なりとも警告の語を遺して歸るといふ様に、一人の靈魂の爲めには何んな面倒をも甘んずる覺悟がなくてはならぬ。殊に誰しも自分でなくては救はるべき手がりのない特別の關係者が、必ず幾人か身邊にあるもの故、然ういふ人々の爲めには、取わけ所謂「産の劬勞」をして盡力する事が大切である。私共が腓利門書を讀んで感心するとは、當時異邦人の教會に救世軍大將の地位を占めたるパウロが、唯一人の心得の悪い黒人の奴隸オチシモの心を深く心にとめ、之を愛し、之が爲めに祈り、之を導き、又之が爲めに有ると有らゆる面倒を見てやつたる結果。以前に

は慈悲深い主人にさへも持餘されたるオチシモが、今は主人は勿論、パウロに違も、至極有用の人間になつたといふ事實を見出すとである。此の如く私共も亦一人の靈魂の爲めに有ゆる面倒を見ねばならぬ。又始終一寸した機會をも捉へ、凡ての人々を基督に導く心がけがなくてはならぬ。或時一女士官が土瓶が碎けて茶を入れるとが出来ないから、新しいのを買ひに行かふと思ひ。折柄町の内でも取分け救世軍嬢ひの瀬戸物屋のあると思出し、態とそこへ土瓶を買ひに行き、機を捉へてその主婦に話をしかけたが、一向ハキ／＼返事をしない。それにも拘らず、其地方の名物の事など無邪氣に語り出て主婦の心を解き。兎も角も次の號の「とまのこゑ」が出たならば、ち届けを願ひますと言ふ迄に打解させた。扱其次の「とまのこゑ」といふのは、第一頁に病人が寝て居つて、その周圍には名譽、金錢、歡樂等、さまざまのものが交互之を慰めやうとすれ共及ばず。困つて居る處へ基督が出て来て兩手を差伸へ、「我に來れ」と言ふて居り給ふ口繪のついた號であつた。約束の如く之を其瀬戸物屋に届けて置と、主婦の實弟にて名代の亂暴人が其日店に來合せ、一寸其繪を見てこ

れは正しく自分の今の有様だと大層感心し。以來其繪のとを忘れ様としても忘れられず、自棄酒など飲んで矢張氣にかゝつてならぬ故、終に救世軍の小隊を尋ねて來て悔改め、基督の救を受けると、間もなく其事が町の内の評判となり。彼亂暴人が救はれたかといふので、他の人々迄も集會に來て祝福を受けるとなり。到頭その小隊にリバイバルが起つたといふ話がある。古語に「精神のある所に方法あり」とは此事ではないか。此の如く若し土瓶一つ碎けてさへ、其機會を利用して、多くの靈魂を救ふとが出来るとすれば、善を爲すの機會は何れの時、何れの處にもあつて、唯私共の起ち上つて之を捉へるのを待つて居るのである。神様がリバイバルを起して、日本を救ひ給はんとを祈る。

(二三) 基督教の家庭

我と我家とは共にエホバに事へん。(書二十四〇十五)

ブリス大將の説に、「英語に取分け美はしい語が三つある。それは Mother (母)と、Home (家庭)と、Heaven (天國)と此丈である」とあり。獨逸の豪傑ビスマルクは又英語に羨ましい語が二つある。それは Home (家庭)と Gentleman (紳士)と云ふ語であるといふて居る。此の如く英語で Home (家庭)といふ語は、何んとも言盡せぬ程奥床しい意味を含んだ語である。家内中眞の神様を畏れ敬ひ、只管に其思召を行ふとを努め、一致和合して誰一人我儘を言ふ者もなく、銘々其本分を盡して互に相愛し、幼きを憐み、老たるをいたはり、兄弟相助け、夫婦相和して、宛然一體の如くてある。妹と脊も兄も弟もそれへの、道を守れば家を齊ふ。「家内中仲の好いのが寶船、心やすく世を渡るなり。」私共の家内が此ういふ風に齊ふて參れば、それこそ理想的のホーム、此の世ながらの天國にて、此程樂しく幸福な所といふはない。併

し乍ら眞の神様に従はぬ人々には、斯る幸福で喜ばしい家庭をつくる事が出来難い。一方に狗も喰ない夫婦喧嘩をする者があれば、一方には又兄弟鬩に閱ぎて、外其侮を觀ぎ兼る愚者があり。親の異見を聽ずして道樂をする息子のわきには、嫁をいぢめて得たり顔の姑がある。歌に「さるといふ亭主に妻はいぬといふ、狗と猿との喧嘩なりけり。」又「恐ろしき鬼の姿を尋ねれば、邪見の人の胸にこそ住め」とは、此ういふ殺風景な家内の有様をいふたものではないか。

第一、救を家庭に持込むべき事。然らば幸福なる家庭は、如何にして之を營むとが出来るかといふに、何よりも大切なるは救を其家庭に持込むとである。基督を迎へて其家の主人と崇め、一切萬事唯其思召を伺ふて、之を行ふ様になるとである。其事に就てブリス大將の申されたる言に「凡ての家庭は神様の宿り給ふ所てなくてはならぬ。エデンの園が結構な場所であつたわけは、其位置や、氣候の好いこと、又は奇麗な花や、澤山な果實、其他様々の美事なものがあつた故てはなく、神様が借に在し給ふたからである。私共が目指て往く天國も亦神様が其處に居給ふ故に貴い

ものである。それと同様私共の家庭は、此世からして神様の宿り給ふ所ではなくてはならぬ。即ち救世軍の會館と同じく、全く、明かに、神様の御用の爲めに献げられたるものにて。私共はこゝにて神様を愛し、又之を拜むべく、神様はこゝにて己を顯はし、其靈を注ぎ、其子等と交通し給ふ様でなくてはならぬ。随つて私共の家庭には何んでも神様を餘所にし、其聖旨を痛むる様などを許してはならぬ。アルコール性の飲料を入れず、淫猥なる言語、舉動、行爲、書物等を遠け、凡ての馬鹿らしきと、世俗の流行、贅澤なる裝飾、其他怠惰、不義、怨恨、虚偽杯を拒絶し、苟くも天國の臺宅に相應からの様などは、此世から其家庭に入てはならぬ。斯る家庭には當然家族の禮拜があるべき筈である。古への族長は到る所其天幕を張ると直ぐに、犠牲を献ぐ可き祭壇を築いて居つた。かくして彼等は公然エホバの御存在を認め、之に依頼して凡ての善事を行ひ、又之を禮拜したものである。今日と雖も凡て幸福なる家庭には、此家族の禮拜がなくてはならぬ。出来るならば朝晝晩の三度、それが出来ずは少くとも一日一回は、家内中打寄つて讚美感謝を献げ、錦々自分共の

爲め、不在なる家族縁者の爲め、小隊の爲め、又世界の救世軍と、亡び行く世の人の爲めに祈禱をせねばならぬ。」といふてある。如何にもよく行届いたる教訓であると思ふ。

第二、救はれし家内は和合する事。此の如く家内中打揃ふて神様を崇むる家族の間には、自から一致和合がある。

(一) 家内の不和合は、家族が互に我儘の言較をして、頭を抑へる者のない場合に起るとが多いものである。其故年寄の達者な間は先づ平穩であつた家内が、年寄の歿なると一緒に急に揉め出したといふ様な例は、世間に數多いことである。歌に、「兄弟の中も怒からちがふぞと、親の世にある時よりぞ知れ」杯とあるは、この道理を説たるものと思はれる。然り乍ら神様を畏れ敬ふ者は、決して左様な我儘氣儘を出すことが出来ない。或救世軍兵士の證言に、「私共が基督の御救を受ける迄は、若い者夫婦で誰も頭を抑へる者が無い處から、兎角双方共我儘が出易く、年中どさくさの絶間がありませぬてしたが。一旦救世軍に於て基督の救を受けて後は、全く

左様のとが止まり、一緒に神様に祈禱をしては其思召を畏みつゝ、今では至極幸福なる家庭を營んで居ります」とのとてあつた。

(二) 家内の不和合は度々男女の關係の亂れから起るものである。酒を飲み、遊興を好み、妾狂ひ、遊女狂ひをする者さへある様な家庭に、幸福平和のあらふ筈がない。さう乍ら基督を主人とする一家には、酒を飲む者がなく、遊興する者がなく、固より淫猥な行爲などする者がなく、軽々しく結婚せず、亦離婚をしない。家内の風儀が清いから自ら和合一致をすることが出来る。

(三) 家内の不和合は又人の落度を咎立する所から起る者である。「三度くふ飯さへ硬し軟かし、思ふ様にはならぬ世の中。容赦なく人の缺點を探して、小言をいふて居つた日には、年中家内に風波の斷間はない。然り乍ら基督の僕は人の罪を赦すものである。自分が山なす罪を赦されたる覺えのあるとて、固より喜んで他人の罪愆を赦す筈である。「我等に罪を犯す者を我赦す如く、我儕の罪をも赦し給へ」とは、基督が私共に教へ給ふたる祈禱の辭ではないか。

(四) 家内不和合の最も大なる原因は互に愛心の足ないとである。油の切れた車は音高くさしる如く、愛の涸れたる家庭には争論の聲が聞ゆるものである。然り乍ら神様は愛である。「我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし」とは、基督の新しい誠めてである。而してかゝる愛の神様を信仰し、愛の律法を守る者の家庭に、不和合などいふ思はしいとのあらふ道理がないのである。

第三、善良なる家庭の感化の事。眞正の家庭は神様を拜む爲めの殿である。父子、夫婦、兄弟、相愛し相助くる和樂の小天國である。世俗の惡風を防禦し、惡魔と戦争する爲めの城砦である。聖國の爲めに有用なる人物を造る士官學校である。弱者を助け、頼りなき者を濟ふ爲めの社會改良部、罪人を救に導き又救はれたる者をして更に祝福に進歩せしむる爲めの小隊である。私は先年英國の「とまごのこゑ」に出たる「救世軍の家庭」といふ記事を見て、非常に感心したとがある。今其内から二つ程の事實を紹介すると致さう。

▲救はれたる母の感化

私の母は今から廿一年前に救世軍で救はれましたが、最初から非常の大熱心にて、毎日早朝自分の部屋で家内ひとり／＼の名をよみ上げて其爲めに祈禱せられる。それが五月編んで私などは、たび／＼と床を蹴立て外へ飛出した様なともあれど、母は一向頓着なく益々熱心に神様に事へて居りました。凡そ二月程経つと、二人の姉妹は先づ悔改めて眞面目なる救世軍人となり、又一月程経つと今度は土地でも評判の大酒家にて、且博徒なる父上が改心せられました。それは何うも父上の酒の癖の悪いといふたら大變なものて、酔ふて外からお歸りになつた時などは、醒める迄いつ何事が始まるか知れぬ故、私などは唯もう頭から足の先迄ぶる／＼震へて、隅の方に小さくなつて居つたものであります。然るに不思議なるかな、此父上が或夜救世軍の集會にて救を求められてからといふものは、萬事以前と打つて變り。家の内には最早絶て殺風景な騒ぎがなくなつたのみならず、其晩から直ぐに家族の新歸會が始まる様な次第。此新歸會は廿年後の今日迄も繼續して居りますが、其最初の集會にて感動して先づ悔改めたるは、當時十四歳の少年であつた新く申す私である。引續いて他の兄弟姉妹も段々救を求め、間もなく一家族十一人悉く救世軍人となりましたハレルヤ。左に我家族の身の上を雑とお話し申せば。

(一) 父上は前申す如く廿年以來の最も忠實なる兵士で、常に軍服を着て歩き、出會はす人々に熱心の火を移して居られます。今はブレインナ小隊の會計を勤めて居られる。

(二) 母は小區軍曹、入隊志願者軍曹等の役目を盡され。

(三) 私は六年間兵士として盡し、三年半の間旅行軍樂隊員として三萬五千哩を旅行し、最近十一年間戰場士官として甘藷小隊に赴任しました。

(四) マツギー女はギッホルド少校の妻となり、十年前にアフリカに赴任し、勇しく戦争して居りました。が、昨年夫が病死しましたので、今は葬送すけれども、どこ迄も救の軍に従ふ積で、次の任命を待つて居ります。

(五) ビーツライス女は今年の五月始めて士官として任地に擢ひました。

(六) 弟のフレッドは十一年間救世軍兵士にて、長らく軍樂隊員、又樂長として働いて居り。

(七) 次の弟のウィルは救はれて十年になりますが、軍樂隊員となり、又少年軍々曹を勤め、今は候補生を志願して居ります。

(八) 次の弟ジョーは今年十四歳で、これは十二歳の時に救はれましたが、樂器を習ひ、又軍服を着用して居ります。

(九) リッジー女は樂長ゲイの妻となり、六人の子を産みましたが、何れも救世軍の集會に出ます。其長男トムミーは今年十六歳で軍樂隊に屬し、軍服を着用して居る。

(十) 今一人の妹も救世軍兵士であります。

(十一) 唯一人アリス女は三年前に二十五歳で勝利の死を遂げましたが、無論救世軍の葬式を以て之を葬

りました。

(十二) 序に義兄ゲイのとも申して置ますが、此人は過る十四年間引續き其小隊の隊長を勤め、常に軍服を着用し、軍律を厳重に守つて、他の兵士の模範となつて居ります。(ティロル少校)

▲老兵士アシウエル一家

アシウエル老人は今から十九年前に、旅先で救世軍の天幕集會に出席し、悔改の座に通んで基督の教を受けたる者であります。かくて後其郷里ニユーカッスルに歸つて居ると、間もなく其地にも救世軍の小隊が設けられたので、妻と共に入隊式を受けて兵士となりました。以来アシウエル老人は「ときのごま」軍曹、少年兵曹長、會計、曹長等の務に任じ、最も誠實に下士官としての本分を盡して居ります。最近十年間同人が日曜の早天祈禱會に缺席したるとは唯二回だけで、又日曜日に軍服を着なかつたとは、唯三回のみであるといひます。其妻も訪問軍曹、入隊志願者軍曹等の務を盡して、今日に至つて居る。アシウエル夫婦の間に四人の男子と二人の女子があつて、何れも好い軍人でありませう。両親は自分共が教はれると直ぐに家族の祈禱會を始め、又小隊に少年軍の組織が出来ると、直ぐに其子女を出席させました。中にもチックと、ハリーとは少年軍樂隊に加はり、成人して後の今は大人の方の軍樂隊員となつて居る。チャーリーは矢張り軍樂隊員としてツロンボンを吹きます。末子のビクトルは今年十一歳にて、英國中「少年兵」賣の選手であり。今年の克己週間には又、其軍隊の少年兵集會者の先登でありました。長女サイブラは七

歳の時から軍服を着始めましたが、是はニユーカッスル地方にて少年兵が軍服を着用したる始にて、能く學校友達からの悪口雜言を凌ぎ、他の少年兵の手本となりました。成長の後は下士官として長らく盡し、後候補生を志願し、今は大尉として倫敦の一小隊を受持つて居ります。次女エッチーは八歳にて「少年兵」隊に加はり、膝迄の雪を肩して行軍をしたるとなどあり。近頃は毎年救世軍の出版物六千部宛を賣つて居りましたが、今は候補生を志願して居ります。十九年來此家族の中には、未だ一人も信仰から墮落したる者がありませぬ。又過る十二年間家族の中二人の者の手に由つて、毎年平均一萬二千四百部宛の救世軍出版物を賣捌きました。(アシウエル大尉)

聖書に「アクラとプリスキラ及び其家の教會」(哥前十六〇十九)、「ヌンパス及び其家にあ
る教會」(西四〇十五)、又「アルキポ並に爾の家の教會」(門二)などいふとがあり。使徒
時代の基督教は、篤信なる兵士の家庭を分隊として、段々其周圍に救を及ぼして居
つたもの、如く見える。私共は我日本に於ても基督教の宗教が深く根を家庭におろし、
番に多幸多福なる數多の家庭が出来のみならず、併せて救の御光を四隣に發揮す
る、基督を其主人とする家庭の澤山に出て來らんとを、切に祈る者である。

(一四) 潔められたる實業家

己の如く爾の隣を愛すべし。(太廿二〇卅九)

凡て人に爲られんと欲ふことは、爾曹人にも其ごとく爲よ。(太七〇十二)

商賣職業は、私共が之に由つて神様の聖旨を行ひ、人の益を圖る様、其方便として與へられたるものである。それ故に眞正の商人、職工、百姓は、救世軍士官が人の靈魂を救に導かんものと、至誠を込めて集會杯營むと同じ精神信仰を以て、其店頭の事務、工場の勤勞、又は田畠の工作を爲すべき筈のものである。もつと他の言方をすれば、眞正の實業家は基督の心を以て其業を營まねばならぬ。基督が若し自分と同じ身分で在なされたならば、何うなさるかといふとを考へて、一から十まで、何でも皆基督が爲さうなとを爲すべきものである。今此主義を實地に當接めて言へば大略左の如し。

第一、神より命ぜられたる職業を營む事。潔められたる人は不正業を營んてはな

らぬ。何んな行懸り情實があらうとも、決して世の中の害となり又は他人の不利となる様な、道ならぬ業をしてはならぬ。即ち女郎屋、藝者屋、待合、酒屋、煙草屋等を營むべからざるは勿論、又淫猥なる書物を發行し、或は賣捌く如きことをしてはならぬ。却つて神様がも前は此地位から世の救の爲めに盡せと仰せらるゝ其職業に就て、御祭の爲めに盡すべき者である。こゝに「平民之福音」を讀んで九十年以來の酒造業を廢止したる人の手紙がある。

倍て弊家は今を去る九十年以前の創業なる酒造家に候處、明治廿三年頃より基督教を信じ候得共、うはへの信者にして基督教を深く信する事無之然れ共をり、基督教の教を拜聴したる感化により、酒造業をやめ度くなり候事徐々思ひ出たるも其進び愈に不至、然る内に君の御著書なる平民之福音を讀み、熱誠する内に大に感ずる所あり、大にさとる處あり、再三熟讀候結果いよく我が身は惡魔の奴隷となりて罪惡製造人なるを確認仕りてより、甚だおそろしく相成候より、天の父様にすがり罪惡消めつを御願すると同時に、酒類製造業を全廢して其代業として醬油製造業を開始して營業を改め、我が身も幼兒に相成候なり行は是れ偏に天の父様が高兄の著書なる平民之福音を以て恩老を御助け被下たる事を深く感謝仕ます依而高兄に御禮を申上度、尙且つ恩老も來月中には上京仕り其際は高兄の御宅を伺ひ尊顔を拜し萬々

御禮可申候早々敬白明治三十四年四月十二日

私共は不正業を営むのみならず正業を営み、同じ正業の中でも自分に取つて最もよく神様の御榮を揚げ、又聖國の爲めに盡し得る様な營業に従事せねばならぬ。潔められたる人が職業を擇び標準は収入の多少や、名譽や、又は安樂てはなくて、何うしたならば最もよく世の救の爲めに盡し得るかといふこととてなくてはならぬ。私共は職業の選擇に於て、亦「先づ神の國と其義とを求め」ねばならぬものである。

第二、正直を以て家業を営むべき事。提督ペルリに嗣て、米國から日本に遣られたるハルリスといふ公使は、或時「日本人は世界第一等の虚言者である」といふたさうである。併し乍ら眞の神様に事へる實業家は眞實を重ずるものである。「人を悦ばす者の如く只眼前の事を務むると勿れ。基督の僕の如く心より神の旨を行ふべし。」

潔められたる人は約束を重んじ、見本と商品とに相違を設けず、懸引の爲めとて不正直を言はず、壞れた品を満足なもの、如く思はせ、和製を舶來と詐り、産製品を極上等と吹聴する杯の裏表がない者である。即ちブース大將の言に「貴君が若し癖の

ある馬を賣るならば、これはかくくの癖のある馬であるとも客に注意したが宜い。馬は是非共賣ねばならぬとはなけれど、正義は必ず之を行はねばならぬ。使徒ヨハネは「凡ての不義は罪なり」と言ふて居る。虚言をいはない爲めに馬が買れないからといふて、左程のことはなけれど、欺いて馬を賣り、而して良心に責られ乍ら、重い頭を枕の上に載るといふは、何ういふ悲むべきことであるか」とあるのは、この道理をいふたものである。

第三、骨惜みなく勉強すべき事。我家業は神様から授りたるものにて、之を忠實に盡すとは、即ち神様に忠義を盡すわけであると確信する實業家は、固より懶惰て日を過すとの出来やう筈がない。而して勉強は成功の基ではないか。町人袋といふ書物に此ういふとがある。「或人の言れしは、町人は蟻の如くに食物を貯へ身を養ふとを勉むべし。蜘蛛の如く網を張り、居ながら物の命を取つて食とする類のとある可らず。蟻は正しく義なる虫なり、此故に虫の屑に義の字を添へたり。終日往來して食物を求め、穴中に貯へ置て冬の用意す。己が求め得たる食なりとて己獨りの食

とせず、穴に住る衆と共にす。町人の四方に働き勉めて財を求め家内を養ふと、蟻の如く怠らず、油断なくして家を保つ可し。蜘蛛は知謀ありて物の命を誅罰す、此故に虫の扁に知の字を添へ、又誅の字を略して朱の字を付たり、町人は之を惡むべし。謀計を以て公儀を賺して諸人の渡世を己一人にて申請け、貪慾非義の網を張りつゝ、居ながら萬人を苦めて己が身を富貴ならしめんとす、不仁の甚しき者也云々。

第四、萬事愛心にもとづくべき事。眞正の實業家が金を儲くるは、人の懐に手を突込て財布の物を盗取るが如くするのでなく、却つて他人の爲を思ふて精々と働く故、其謝禮として報いらるゝ報酬を受取るものである。其故に眞正の商人は買手の氣にばかりならず、買手の氣にもなり、自分が若し此品物を此丈の値段で買たならば、噓や満足に思ふであらふといふ風に、お客様に仕向る者でなくてはならぬ。二宮尊徳翁の言葉に「譬へば湯船の湯の如し、是を手にて己が方へ掻けば、湯は我方に來る如くなれ共皆向ふの方へ流れ歸るなり。これを向ふの方へ押す時は、湯は向ふの方へ行くが如くなれ共又我方へ流れ歸る。少しく押せば少しく歸る、強く押せば強く

歸る、是天理なり。又人跡の組立を見よ。人の手は我方へ向きて我爲めに便利に出來たれども。又向ふの方へも向き、向ふへ押すべく出來たり。是人道の元なり。鳥獸の手はこれに反して、只我方へ向きて我に便利なるのみ。然れば人たる者は他の爲めに押すの道あり。然るを我身の方に手を向け、我爲めに取るとのみを勉めて、先の方に手を向けて他の爲めに押すと忘るゝは、人にして人にあらず、即ち禽獸なり。豈耻かしからざらんや。只耻かしきのみならず、天理に違ふが故に終に滅亡す。故に我常に奪ふに益なく讓るに益あり、讓るに益あり奪ふに益なし、是則ち天理なりと教ふ。能く玩味すべし。」といふてある。これは基督が「凡て人に爲られんと思ふとは、爾曹又人にも其如くせよ」といひ。又「己の如く爾の隣を愛すべし」と宣ふたる御戒めの意を、手近く説明したるものと謂ふべく、最も貴い教訓である。潔められたる實業家は愛の靈の導きに從ふて、毎日の業を勤むるものでなくてはならぬ。

第五、利益の幾分を神様に獻ぐべき事。傳道者が傳道に由りて人を救ふとを努むる